ラスト・レター

笹本祐一

妖精作戦 PART IV

新装版

ソノラマ文庫

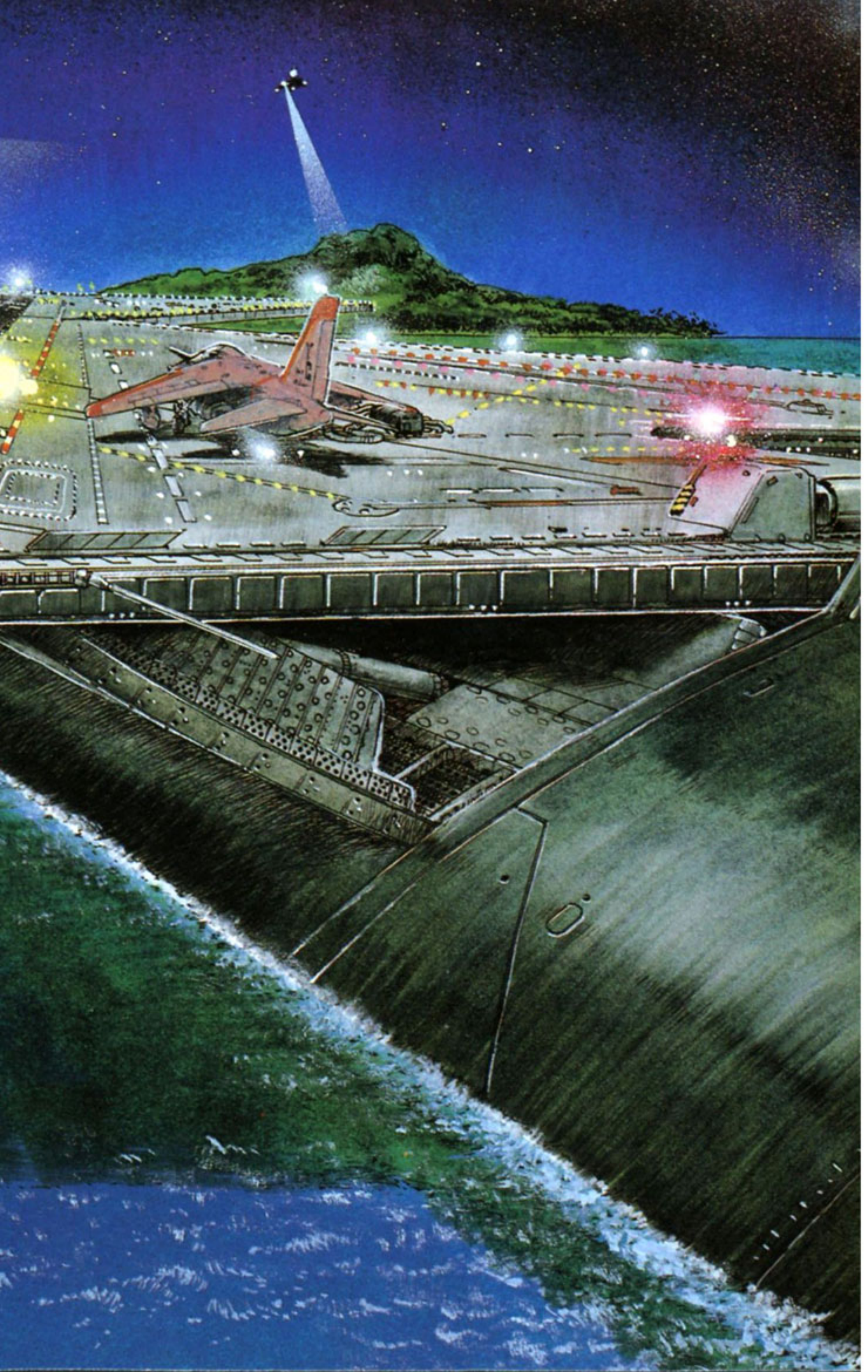
創元SF文庫版　2012年11月刊行

超能力少女は覚醒するか。

歴史を変えた四部作を
一九八五年オリジナル版で贈る

カバーイラスト＝D.K
カバーデザイン＝岩郷重力＋WONDER WORKZ。

ラスト・レター　笹本祐一　創元SF文庫
◆詳しくはこちら◆



ソノラマ文庫

ラスト・レター

笹本祐一

朝日ソノラマ

米国ハイテク株

目次

タイトルバック……5
ACT・1　襲撃……9
ACT・2　感応……40
ACT・3　接触……61
ACT・4　降下……87
ACT・5　漂流……105
ACT・6　離脱……122
ACT・7　回収……163
ACT・8　要塞……187
ACT・9　脱出……222
エンディング……286
最後の、あとがき……288

レギュラー紹介

榊　裕　私立星南学園高等部二年生。主役のはずである。

沖田玲郎　榊の同室者。脇役のはずである。

鳴海つばさ　星南高女子部新聞部長。脇役のはずである。

真田佐助　脇役である。

小牧ノブ　つばさの同室者。ヒロインのはずである。

平沢千明　私立探偵。今回は端役。

タイトルバック

神奈川県座間市――。すぐそばに米軍厚木基地、座間キャンプをかかえる基地の街は、日本国内でありながら異国の空気が流れている。

本来は米兵相手に開業した酒場、パンチョの店は、今は米兵目当てのグルーピーや在日外国人でにぎわう場所として、雑居ビルの三階にネオンを出していた。

ビートの効いたポピュラー音楽が、今夜もけばけばしい色の装飾を施された店内に流れている。年に何度もない大規模な演習が終わったばかりのため、町にどっと繰り出した米兵で店は満員になっていた。

その喧騒の中に、スモークドグラスのドアを開けて、ラメまでついた白のイブニングドレスにショールを羽織った幹本沙織が現れると、店の中は一瞬シーンとなった。

自分という一点に集中した店中の男女の突き刺さるような視線を、沙織はかすかな笑みを口許に浮かべただけではじき返した。店内に歩を進める。ヤケと、半ばあきらめにも似た翳が薄くアイシャドーをひいた長い睫毛の瞳をよぎった。

――あー、恥ずかし……

口の中だけで小さくつぶやく。店が、ぼつぼつと元の喧騒を取り戻す。沙織はアンゴラのショールを手に持って、大きく肩をむき出しにしたステージ衣裳のようなドレスのままカウンター席についた。

注文もしないうちに、小隊マーク付きのボマージャケットを着た若い空軍士官が声をかけてきた。素人っぽい英語で受け答えしながら、沙織はストレートで注文しかけたブランデーをあわてソーダに変更した。

「何これ？　まるきりジュースじゃない」

英語の会話の片手間に日本語で文句を言いながら、にこやかにグラスを傾ける。二、三分もしないうちに、沙織のまわりには米兵の取り巻きが出来ていた。

言い争う声とともに、人垣が崩れたのはその時だった。スツールを回してホールを向いた沙織の目に、米兵たちをかきわけてくる一人の男が映った。沙織は舌を出した。

すぐ目の前のカウンターに座っている女が、第一期のスターボウ計画の中止寸前にマークしていた占い師であるのを認めて、C・マッキは思わず持っていたカットグラスを落としそうになった。沙織は口許をゆがめたまま、マッキにウインクしてみせた。背のカウンターに肘をつく。

「お久しぶりね」

「こんな所で会えるとは思わなかった。とうとう決心したのかい」

「まさか」

小声でつぶやいて、カウンターの下からショールをとった沙織はマッキに笑顔をつくってみせた。

「ごめんなさいね。今夜はお相手してるわけにいかないの」

とにかく無茶苦茶な作戦を実行することで名が売れているSCFのエージェントが相手である。沙織は、安全ピンを抜いた手榴弾（パイナップル）を無造作にマッキにほうった。

「また今度ね」

「え？」

空（あ）いている手で手榴弾を受けとめたマッキは、思わずグラスと手榴弾を持ち換えたりしながら背後へ投げ飛ばした。

手榴弾は、空中で爆発した。殺傷ではなく、目くらましを目的とした眩惑弾が空中でフラッシュのような激光を放つ。

「うわっ、ちょ、ちょっと待て」

「さよなら」

沙織は一挙動でカウンターの上に飛び上がった。ドレスの裾（すそ）をつまんでカウンターを走り出し、客とバーテンに投げキスなんかして床へ飛び降（ス）りる（テップ）と、店に入った時から目星をつけておいた窓のガラスに体を丸くしてつっこむ。

ガラスをぶち破って、沙織は三階の窓から空中に躍り出た。平沢はモーガンプラス8に急ブレーキをくらわせた。ぴたり助手席に沙織が落ちる。その一瞬だけ静止して、モーガンは裏道のゴ

ミカンをけとばして急発進した。
「ご苦労さん。早かったな」
「意外な人と会っちゃって」
言いながら助手席から身を起こした沙織は、乱れた髪をかきあげながらオープンカーの幌を閉めにかかった。
今日やっと修理屋から上がってきたモーガンプラス8にカウンターをあてて国道246号線に出ながら、平沢は隣席の沙織にちらりと目をやった。
「乱れた格好もいかすぜ」
「ばか」
「で、首尾は？」
後ろからひっぱり出したコートの袖に苦労して腕を通しながら、沙織はうなずいた。
「二人とも、まだ厚木の基地にいるみたい。和紗結希って子も、小牧ノブって子も」
「そりゃよかった。まだ国内にいたか」
言いながら、平沢は東京方面に向けてアクセルを踏みこんだ。リヤホイールをスピンさせて尻を振りながら、モーガンはさらに加速した。

ACT・1　襲撃

――助けて……
榊はびくっとして振り向いた。一面ベタの濃い闇の底から、誰かが榊を呼んでいる。
「どこだ!?」
榊は、音まで吸い込んで消してしまいそうな濃密な闇にむけて叫び返した。誰何しなくても、榊には誰が呼んでいるのかわかっている。
「どこにいる?」
――助けて……
消え入りそうな、声にならない声が榊の耳に届く。榊は見えない闇の向こうに目をこらした。
――わたしはここよ、あなたはどこ?
「来い、こっちだ!」
ねっとりと体にまとわりつく重い闇の中を榊は駆け出そうとした。底なし沼に足をとられたように動きにくい。

――早く来て……

ノブの声が、榊を呼んでいる。榊は声の方向へ少しでも近づこうとしてもがいた。

――どこにいるの？　はやく来て……

悲鳴のようなノブの声が、次第に遠ざかっていく。榊は獣のような叫び声を上げて、一ミリでも前へ進もうとした。

――たすけて！

意外なほど近くで聞こえた絶叫に向かって、榊は力一杯手を差しのばした。

それだけだった。それ以上、気配も声も何もなくなった。榊は、自分の意識がその場所から遠くなっていくのを感じた。

「うわ！」

派手な音をたてて、カンペンケースが机から落ちた。消しゴムやシャーペンが床に散らばる。

授業中の教室内がシーンとなった。

「なァにしてやがんだよ」

前席の沖田が榊に振り向いた。数学教師が難しい顔でにらんでいる。黒板にぎっしり書かれたややこしい連立方程式を見て、やっと榊は我に返った。

仏頂面（ぶっちょうづら）の教師が、再び黒板に向かって式の続きを書きはじめた。

「どーしたんだよ、おい」

榊が落としたカンペンケースを、身をかがめて拾い上げた沖田が小声で訊（き）く。榊はぶるんと頭

を振った。
「ボケた。夢見てた」
夢ではない。榊は確信していた。ノブが――さらわれた小牧ノブが呼んでいる。
もう一度頭を振って幻想を追い払うと、榊は床に散らばったシャーペンの芯やボールペンを拾いにかかった。

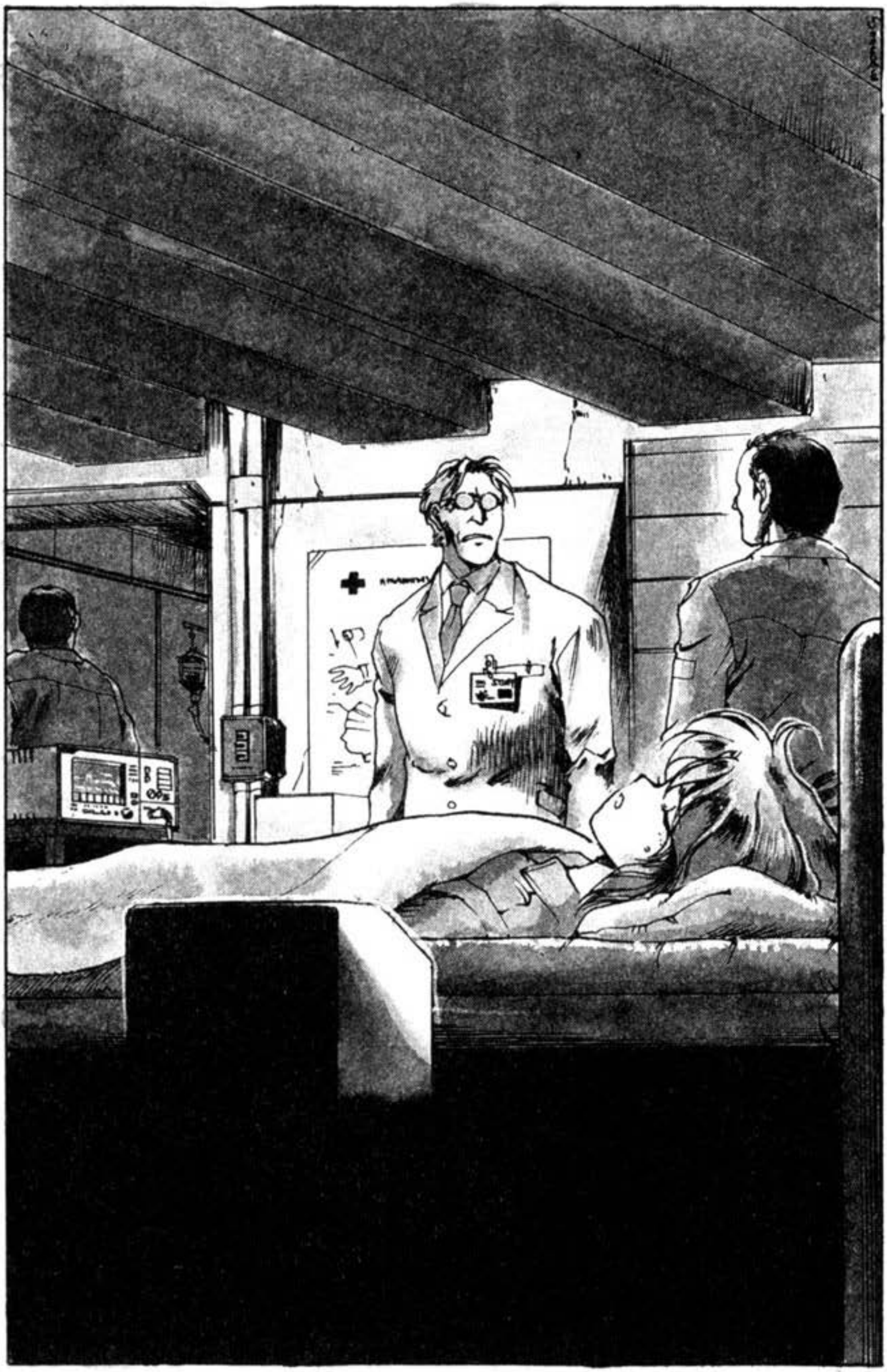
米軍、厚木基地――
プラット&ホイットニーのF－100だのF－101DFE、ジェネラル・エレクトリックJ－79、FNX－5011Bといった戦闘機のジェットエンジンが載せられた作業台が並ぶハンガーで、作業服姿のマッキはドクター・ジルベスターにつかまっていた。
「TW二〇〇〇型の重力検出器？　ダイアナ・シリーズの哨戒衛星に載ってるやつですか？　あんなもん何に使うんです？」
ハ四三－四二型などという骨董品の宝石みたいなレシプロエンジンの下から這い出てきたマッキは、油のしみだらけのボロ布で手をぬぐった。
「あれは日本製じゃなかったかね？」
手元のメモを見ながら、博士が言った。
「ええ、まあ、あれはもともと地殻異常とか地震の前兆を測定しようってんで開発された機械で、それを対宇宙空間用に転用しただけですから――」

マッキはボロ布を工具箱の中にほうり込んだ。
「地震大国ニッポンの国土地理院が、どこぞの電子メーカーに委託生産させたものです。えーと、二年前にダイアナ・シリーズ用に一ダースばかりアメリカの測地局名義で注文して、MAC（米軍事空輸団）経由でイエローサーチに送り出したのが最後で――新規注文となると、あれは確か受注生産でしたから時間かかると思いますがね。経理の許可はとったんですか？」
博士は顔をしかめた。
「次の実験に、無重力状態に配置されているやつが、どうしても必要になるのだが。となると、高度衛星軌道まで上がって、宇宙船ごとダイアナのそばに陣取るしかないかね」
「ちょっと待って下さいよ」
マッキは、現在使用されているダイアナ・シリーズの哨戒監視衛星を数えてみた。
「ダイアナは、今年のはじめに七〇万キロの超高々度衛星軌道に乗った十号が一番新しいやつで、一号と六号はぶっ壊れて行方不明で……ダイアナ衛星の最終組み立てと調整は確かブルーサーチでやってましたから、あそこのジャンク・ヤードにまだ一つくらい残っているはずですけどねえ」
「ブルーサーチか、それは都合がいい。しかし、あそこのジャンク・ヤードか……」
博士は、ルナベースのメインハンガーと同規模の技術工廠（こうしょう）なのに、廃品置き場（ジャンク・ヤード）と呼ばれるブルーサーチのセンター・ドックを思い出して十字を切った。
「わかった。連絡をとってみよう。お楽しみを邪魔して悪かった」

「気にしないで下さい。ところで、先日の作戦でカズサ少尉が連れて来た例の女子高生は、どうしてます？」
「まだ医療センターだ」
博士はマッキから目をそらした。
「身体的な異常は認められんが、まだ眠り続けておる」
「眠り姫（スリーピング・ビューティー）とはロマンチックなエスパーですね」
言いながらマッキは再び、複列星型十八気筒のエンジンの下方を覗（のぞ）きこんだ。

少女は、清潔な白いベッドで眠っていた。どうみても安らかな寝顔ではない。手術室に運ばれるのを待つ、全身麻酔をかけられた患者のように無表情に目を閉じ、わずかに唇をひらいてかすかな寝息をたてている。
「脈搏四四、呼吸数一〇、ほぼ完璧な睡眠状態です」
陸軍中尉で、専門は精神病理学だという南部出身の若い軍医がカルテをジルベスターに渡した。
「昏睡（こんすい）ではないのだな？」
通り一遍のことしか書いてないカルテに目を通したジルベスターが、軍医に顔を向けた。
「これが一時間前にとった脳波のデータです」
軍医は今度は脳電図を見せた。

「ご覧の通りです」
「ふむ……」
「β波とθ波が混在して現れております。つまり、彼女は夢を見続けているわけです」
ジルベスターは、眠り続けるノブの顔に目をやった。
「しかも、θ波は最大八〇〇マイクロボルトに達しています。患者の状態からすると、悪夢を見ているようですな」
声のないうめき声がもれた。きつく目を閉じて、ノブは頤をのけぞらせた。
「うなされている」
軍医はノブの眠るベッドを示した。
「よほどひどいショックを受けたようですな。このまま目覚めないと、昏睡状態に陥る可能性もあります。ブラックコーヒーでも飲ませますか」
ジルベスターは頭を振った。
「目を覚ますとしたら、いつだ？」
「わかりません」
じっとり汗をかき、呼吸を荒くしながら枕に頭を埋めたノブを見て、軍医は首を振った。
「本人に目覚める意志のない限り……」
「見てくれ、これ！」



新聞部員である和田は、部室から持ち出して来た全国紙、地方紙、スポーツ新聞など十数紙の朝刊と夕刊を405号室にぶちまけた。

「チリ紙交換でもはじめたのか」

机の前から椅子を回転させた沖田が、新聞で埋まった床を見た。

「朝刊に出てないのはまだ許せるけど、夕刊でも完全無視だぜ」

「テレビやラジオのニュースだって同じだ」

沖田は、聞いていたラジオのイヤホンを机の上にほうり出した。

「もっとも、日本人がはじめて月まで往復した時は学校新聞だって取材に来なかったぜ」

「何の話だ？」

「あのバカ騒ぎの調べはついたのか？」

貿易問題だの中東紛争だのの一面の記事が載っている毎朝新聞の朝刊をつまみあげながら、沖田が訊いた。和田は肩をすくめてベッドに腰をおろした。

「確認されている戦闘車両（A・F・V）は七四式戦車と七五式一五五ミリ自走榴弾砲――だっけ？」

沖田はうなずいた。

「車両ナンバーや記号は全部はずされたり塗りつぶしてあったりで、見当もつきゃしない。飛行機の方はF－16とAH－1SとC130？」

「AC－130だ。ハーキュリーズじゃねェ、ガンシップだよ、あれは」

「いろんな所で調べてみたけど、F－16ジェット戦闘機とそのガンシップは日本じゃ使ってな

い、アメリカ軍の装備でしょ。だから――」和田はポケットからひっぱり出したメモをぱらぱらとめくった。「陸上自衛隊とアメリカ空軍が共同でうちのガッコに攻めてきたってことになんだけど」

沖田は顔をしかめてポケットからハイライトを出した。くわえてから、箱を和田に示す。

「いや、今禁煙中」

「国家の正規軍相手じゃ、一介の高校生としちゃ手の出しようがねェな。マスコミ関係も、情報はなしか？」

「先輩のコネや知ってるとこ、ありったけあたってはみたんだけどね」和田がメモをポケットに入れた。「なァんも、なし。都下郊外の市街戦なんて、夢でも見たんだろーとさ。このそばにだって支所いくつかあるはずなんだけどね」

「郊外の学園都市のバカ騒ぎなんぞ気にしないのか、それとも――」

沖田は考え込むように窓の外に目をやった。日はとっくに暮れ、外は細い雨が降っている。

「強力な報道管制がかけられたからか」

和田がぼそっと言った。沖田は和田の方を向いた。

「日本は自由主義じゃなかったのか？」

「誘拐事件なんかの報道自主規制つーもんはちょくちょくお目にかかりますが」

「まぁな……正当な理由がなくても、その筋からの圧力がありゃ、マスコミは黙るか」

「関東近辺の陸上自衛隊基地は調べてみたけど収穫なし。F－16は日本じゃ青森のはじっこまで

行かなきゃないはずだし、あの四発デカブツ飛行機なんか日本にいるはずねーって航空研の連中口揃えてたぜ」

「見事な隠密作戦だな」

深く煙草の煙を吸い込みながら、沖田は三文字のアルファベットを思い出していた。S、C、F。

「本物だと思う？」

「うん……」

星南学園女子部、事務室。榊は、カウンターに出された二枚の書類のコピーをじっと見つめていた。

退学届である。一枚は和紗結希の、もう一枚は小牧ノブの。日付は両方とも今日、書式にも不備な点はない。

「ノブはこんな字じゃないと思うが……」

榊は、前にノブからもらったメッセージカードの字体と目の前の退学届の字体を交互に見た。

「誰の字でも、正式な書類なら受理されちゃうけどね」

横でコピーを見ているつばさが溜め息をついた。

「だって、ノブの荷物やなんか全部残ってんだろ」

「当然でしょ」つばさは声をひそめた。「一人っきりで、誘拐されちゃったんだから。誰かが荷

物取りに来たら、気をつけなくちゃね」
誰かが荷物を取りにくる――榊は軽い目眩を感じた。
「転校生の部屋は？」
つばさはカウンターから離れた。
「見てみる？」

443号室のドアは名札がはずされ、錠がかけられていた。
「新聞部長一子相伝の秘術ちゅうのはそれか」
「バカ言わないでよ」
鍵穴に差し込んだヘアピンを器用に動かしていたつばさは、鍵穴にカチリと音をさせて顔を上げた。
「んでは、いってみよ！」
使い古された真鍮のノブに手をかけて、榊は思いきって一気にドアを開けた。
「うわったあ！」
声をあげて、榊は思わず廊下の壁まで跳び下がった。つばさが横から覗きこむ。
「なんだこれは」
誰もいないはずのドアの向こうで、ばかでかいてるてる坊主があっかんべーと目をむいていた。

「あの娘はいったい何を考えてたんだ」
スイカほどもある、赤眼をむいたマンガチックなてるてる坊主に軽くパンチをくらわせて、つばさは部屋の中に入っていった。
「つくづく心臓に悪いやつだ」
天井からぶら下がっているてる坊主を気味悪そうに見ながら、榊は部屋に足を踏み入れた。
つばさが明かりをつける。
「見事にもぬけのカラですな」榊は部屋を見回した。「いつの間に荷物運び出したんだろう」
「もともとあんまり持ってなかったようだけど」
言いながら、つばさは机の上に目を止めた。大判の茶封筒が置き忘れたように置いてある。
「なんだろ」
つばさは、封筒を手に取った。表には何も書いてない。折り返しただけの封を開けてみると、青っぽい色が塗られた数枚のイラストボードが入っていた。
「ゴミ箱の中まで空っぽだぜ」
榊が部屋のすみから顔を上げた。
「あ、何見つけた？」
「見る？　イラストの置き土産」
つばさがほうった大きな封筒を、榊はキャッチするなり投げ返した。

「いい」
「あっそ」
つばさは、前に住んでいた者の匂いがかすかに残っている部屋を見渡した。空っぽの部屋の入り口で、廊下に向いたてる坊主がまだ揺れている。
「行こ」
榊がてるてる坊主の横を抜けて部屋の外に出た。つばさも後を追う。
廊下を出てドアを閉める前に、もう一度赤眼をむいているてる坊主が目に入った。
「あれ？」
「どうした？」
「ううん」つばさは首を振った。「何でもない」
てるてる坊主が、泣き出しそうな顔をしているように見えた。
し、明かりを消してからドアを閉めた。
つばさはドアの内側からロック

「てるてる坊主？　転校生の置き土産（みやげ）だ？」
沖田は405号室に戻ってきた榊に訊き直した。
「そ。てるてる坊主が首吊ってあかんべーってやってんの」
「何だよ、それは？」
「後で見に行けば」

「……そーするか」
沖田はベッドから立ち上がった。
「これを見ろ」
沖田は、関東地方の五万分の一区分航空図を床に広げた。
「ここが国立市、このまわりにある空港は、関東平野内だけで十四ヵ所ある」
「意外にあるもんですな」
地図を覗きこんでいた南部が感心する。
「このうち民間空港は羽田、成田、調布の三ヵ所だけで、残りは全部自衛隊と米軍関係だ」
「おーこわ」
榊が首をすくめる。
「米軍関係は三つ、横田と座間と厚木」
沖田が都下と、神奈川県の二ヵ所を指差した。
「横田基地は三〇〇〇メートル級の滑走路があるが、あそこの在日米軍は空輸専門で空軍の管轄じゃない。座間は通信基地で連絡用のささいな滑走路しかねェから、問題はこの厚木基地だ」
「つまり、うちの学校に強行着陸してったあのガンシップとかゆー四発重爆は、そこから来たってわけか」
「米空軍（U.S.A.F）ハールバート基地所属、AC－130H。ベトナム戦争で開発された機体で、対地攻撃用のバケモンだ」

「となると……」榊は地図を前にして腕を組んだ。「厚木基地に殴り込みかけるっきゃないね」
沖田はさすがにげんなりとした顔で榊を見た。
「気持ちはわかるがな、軍の基地ってな太平洋の海底基地や特撮月面基地とは違うぞ」
「なんの話だ？」
南部と和田が顔を見合わせた。女子部から榊にくっついてきたつばさが、榊を見た。
「あいつがアジト構えてるとしたら、厚木（ここ）しかないんだろ」
榊は地図上の一点を指した。
「この前みたいに潜水艦やなんかに連れこまれちゃわないうちに取り返す」
榊は、沖田の顔をニヤリと見上げた。
「こんなにすぐそばにいるんだぜ。海外旅行や月旅行に行かなくて済む分、手間かからなくて楽じゃない？」
沖田は、ベッドの上段から地図を眺めている真田を見上げた。目が合う。沖田は両手を広げた。
「だ、そーだ」
真田は白眼をむいて、平手で首をひいてみせた。
「こーゆー場合、何言っても無駄なんでないかい？」
「言うだけ言ってみよー。やい榊」
「なんだ？」

「軍の基地に殴り込みかけるとゆー事は、米軍を相手にするとゆー事だぞ」
「でしょーな」
「今度は月どころじゃなくて、木星軌道あたりまでほうり出されるかもしんねぇぞ。それでもやるか？」
「やる」
榊はあっさり断言した。
「やると言ったら絶対やる。米軍だろーが地球征服を企む悪の秘密結社だろーが、やるっつったらやる」
沖田は目を覆った。
「悪の秘密結社ね……まァ確かにそんなよーな物だが」
「あんだけひっかきまわされて黙ってひっこめるか。太陽系の外だろーが最終戦争の後だろーがオレはあきらめんぞ」
「だ、そーだ」
沖田は一同の顔を見回した。
「いいんじゃない？」つばさが軽く言った。「偽造の退学届は多分こっちで何とかできるわ。戻ってくれば、すぐに復学できるように――」
「簡単に言うな」
沖田は榊に向かって両手を上げた。

「OKだ」
「とゆーと？」
「付き合ったる。俺だって今回は頭に来てんだ。で、どうする？」
一同は顔を見合わせた。重い沈黙が流れる。
「厚木ってのは確かなん？」
榊が訊いた。和田がうなずく。
「無線部が航空無線傍受してた。航空部のデータとつきあわせて、屋上で天体観測してた自然研が望遠鏡で航跡を追っかけた方向と合わせても確かだと思う」
「通信管制もなしに強行着陸か。そーとーナメてやがんな、あの連中」
「一応コードネームばっかりで部外者が聞いたって何のことやらわからんし、英語で喚きまくってたけどねえ、あれだけはっきり目の前で展開してくれりゃなあ」
「まぁ、普通の市街戦なら敵の基地の場所なんて問題にはならんわなあ」
「つまり、第一の攻撃目標はとりあえず決まったわけだ」
榊が厚木基地の上に虫ピンを立てた。沖田がうーっとうなって目を覆う。
「基地襲撃もいいが、その前に晩飯にせんか？」
腕時計を見た南部が立ち上がった。
「早いとこ行かんと喰いっぱぐれっぞお」
「あー、ころっと忘れてた。んでは」

しゅたっと手を上げて、あっという間に南部と和田が部屋から消えた。後につばさを含む四人が取り残される。

やがてつばさが、ひざをかかえたまま言った。

「いつやるの？」

「明日の晩だ。昨日の今日じゃ動く気にならねぇ……おめ早く女子部戻れよ。晩飯抜くつもりか？」

「っさいわねえ。――見る？」

つばさは、イラストの袋を沖田に渡してよこした。

「なんだこれは」

沖田が中を覗いてみる。

「転校生の置き土産」

「バクダンか？」

真田は思わずベッドの壁に身を寄せた。

「バカ。増刊の穴埋めに頼んだイラスト――まだ見てないけど」

「あんなのにまで原稿頼むなよお」

沖田は無造作にイラストボードを引っ張り出した。

「妙なところで律義だったんだな、あの転校生は……ん？　なんじゃこりゃ？」

「おー、ハイファンタジー」

沖田の手のイラストを覗きこんだ榊が、無感動に声を上げた。
暗い森の中の泉のような水面に、ごくあっさりしたタッチで精霊のような少女が立っている。よく見ると、泉を囲む樹々の間や枝の端々（はしばし）に妖精だの魔物だのがだまし絵風にかくれている。かすかな水紋の上に立つ少女のまわりには、薄めたミディアムブルーのバックにひっかいたようなホワイトをのせて、幽霊のような影が描かれていた。
「なんだこれは？」沖田が目を細めた。「ちゅーしょー画か？」
「鉛筆に水彩で色のせて、タッチは少々たよりないが慣れてる感じ、と……」
榊は顔をあげた。
「編集長、これ使うの？」
「どーしよう、穴が空いてるのは確かなんだけど」
他にも、枯れ果てたような森の中の道を歩く中世風の旅人か、険しい山脈の上空を飛ぶドラゴンなどの、ファンタジー風のイラストが数葉あった。キャプションはおろか、サインも入っていない。全体的におとなしいタッチで、特別に目立つような絵柄でもない。
「訳わからんな……」
沖田は首をひねった。
「あの転校生はいったい何を考えてたんだ」
「どんなもんですかぁ」

「わかるわけねェだろ」
ささやかな小型ヘリが北へ飛んでいったのを最後に、厚木基地の飛行機の発着は終了したらしい。
「さて、どーしたもんかね」
金網の外の枯れた草の上に伏せた榊は、地面に肘をついた。
「どーしたもんだろうな」
相槌を打ちながら、沖田は煙草に火をつけた。百円ライターの炎に草むらの三人が一瞬だけ浮かび上がって、消えた。
「いくらなんでも準備不足だったんでないかい」
伏せてるのにあきた真田が起き上がってあぐらをかいた。双眼鏡を榊にほうる。
「大したもん見えんぜ」
明かりの消えた兵舎の彼方に管制塔のレーダーサイトが見える。榊は双眼鏡を目にあてた。
「――で、どこらへんに特っ攻む？」
沖田はほわっと煙の輪を吹き出した。
「基地の中の様子や警備の配置なんかはわかっとんのか？」
「知るか」
司令本部らしい建物を視界に入れて、榊は双眼鏡の視界を静止させた。ごろんと寝返って夜空を見上げた沖田が腕時計の夜光塗料に目を走らせる。

「ガンシップが飛んでってから丸二四時間はたってる。あの探偵もうろついてるこったし、前の潜水艦の時みたいに、こっちが乗り込むまでのったり待ってるとは思えねェんだが」
「いるよ」
沖田は榊に頭を向けた。
「いる……あそこらへん」
沖田は鼻の穴から煙を吐き出した。
「こいつもだんだん超能力者じみてきたな」
真田は肩をすくめた。
「恋すりゃ誰でも超能力者になれるんでねーの」

「どうかね？」
片耳に手をあててうつむいた和紗結希が、ジルベスターに顔をあげた。首を振る。
「やはり――見ているのは、悪夢かね？」
ジルベスターは、昏々（こんこん）と眠り続けるノブの顔に目をやった。結希は、もう一度首を振った。
「というと？」
「……」
結希は顔を伏せた。
「なにも」

久々に聞いた声に、ジルベスターは結希の顔を見た。
「脳波は安定している。β波がややフラットに出ているが、なにも見えないとはどういうことだ？」
結希は、疲れたように椅子にもたれかかった。ノブを視界からはずし、〝わからない〟というように首を振る。
「闇に閉ざされていたとでも言うのかね？」
結希はうなずいた。
博士に頼まれて覗き見たノブの夢の中――睡眠中の表層思考。言葉以前の混濁の中で結希が見たのは、ねっとりとした密度の濃い闇だった。その奥まで見透かす気にはなれなかった。あまりに熱い否定の意志が、ほんの心の表面からでさえ伝わってきたからである。
乱暴なノックが病室の静寂を破った。返事も待たずにドアが開き、特務班チーフのC・マッキが顔を出す。
「博士、通信機（トーキー）だけは身につけといて下さいって言ってるでしょう。すいません、非常事態です」
「何事かね？」
ジルベスターはマッキに椅子をまわした。
「ブルーサーチから重要度ＡＡＡ（トリプル・エー）の通信が入っています。相手はルナベースの司令で、今ブースで待ってるんですが」

「わかった。すぐ行く」
ジルベスターはファイルを持って立ち上がった。結希に向く。
「ご苦労だった。休んでくれ」
『挨拶はぬきだ』
衛星軌道上のブルーサーチからの通信のため、ほとんどタイムラグのないディスプレイの向こう側からキーラーはいきなり本題に入った。
『スターボウ計画の初期調査で、データが追跡しきれなかったエスパーが何人かいたな？』
「はあ？」
答えながら、マッキはキーボードをたたいてデータファイルの検索をはじめた。
「そう多人数はいなかったと思いますが……少し待って下さいよ」
『博士』
マッキがデータを探している間に、キーラーは相手を変えた。
「どうしたというのだ、いきなり」
『エスパーが次世代の霊長類――言い換えれば新人類かもしれんというのは、君の持論だったな』
「それは……そうだったが、しかし、なぜ今ごろになっていきなり」
『〈敵　宇宙人〉が生物学的に我々より進化している可能性はどれくらいあると思うかね？』

突然の問いに、博士は目を閉じた。
「科学技術レベルは、我々より一世紀近く前進していることは確かだろう。しかし生物学的なレベルというと――つまり、ホモ・サピエンスとしての人類より、さらに高等化しているか、ということかな？」
『そうだ』
キーラーはいらだたしそうに答えた。
『確実なことが言えないのはわかっている。ドクターの経験にもとづく予想や感触でかまわんから聞かせてくれ』
「対象があいまいである以上、推論は不可能だが――おそらく、我々地球人類の場合、本格的な星間航行の時代に生きる種は次の世代の人類ではないか、という気がするが……つまり君は、宇宙人がエスパーであるかどうかと考えているのかね？」
「データ出ました」
マツキが、すぐ横のジルベスターの前の複合ディスプレイと、ブルーサーチのキーラーに向けてデータを転送した。
「最後までウラがとれなかった調査段階のエスパーは、J－3地区ではこれだけです」

サオリ・ミキモト　年齢不詳
潜在能力指数　一四〇

能力　特A級予知能力他複合能力者と見られるが詳細は不明、現在行方不明……

データを最後まで読み取らずに、キーラーは顔を上げた。

『スターボウ計画の再始動に伴う追加データは？』

「これで全部です。必要ならば三日で再調査できますが」

『二四時間で、出生時にまで遡ったデータを揃えろ。気づかれぬように、だ』

「わかりました」

「何がはじまったのかね？」

ジルベスターが腕を組んで訊いた。スクリーンの中のキーラーは、手元のキーボードを速いテンポでたたきはじめた。

『〈敵〉からコンタクトがあったのは知っているだろう。エイリアン・メッセージの解析によって、奴らが地球上にまでそのエージェントを潜入させていることがほぼ確実になった』

「宇宙人が地球人に混じって生活している――か？　古い考え方だな」

『宇宙人はエスパーである公算が大きい。現在確認されているエスパーのうち、何パーセントが地球人類で何パーセントが太陽系外から来たものかはわからんが――』

「魔女狩りを復活させようというのかね？」ジルベスターが冷ややかな口調で言った。「一般市民の住む街で宇宙人狩りをやるつもりか」

『〈敵〉が常に外部からやってくるとは限らない。あらかじめ内側にいて息をひそめているとし

たら、ほうっておくわけにはいくまい？』

だしぬけに画像が乱れた。間髪を入れず、大きな震動が地下三階のブースにまで伝わってくる。経験上、爆発の震動だと覚ったマッキが会話に割って入った。

「すいません、緊急事態です。基地内――それもこのすぐ近くで爆発がありました」

「事故かな？」

ジルベスターがのんびりと上を見上げた。続けてもう一度震動が伝わってくる。

『事故だ……』

何か言いかけたキーラーの声が、画像ごと途切れた。マッキが、ブラックアウトしたディスプレイの前から立ち上がる。

「事故なんかじゃない。いきなり通信が切れたってことは、指揮通信網（ジャイアント・トーク）やられたんですよ。こりゃ妨害工作だ。様子見てきます」

「な……何事だあ？」

「花火大会ではなさそうである」

「当然だスカ！」

榊たち三人が見ている目の前で、いきなり夜空に火柱が立った。手前の兵舎や巨大なアンテナ群がシルエットで浮かび上がったと思うと、次の爆発がばかでかいアンテナを一瞬だけハイライトに染めてなぎ倒した。

榊、真田、沖田の三人は顔を見合わせた。
「なんだと思う？」
「察するところ、事故ではないかと……」
「一カ所ならともかく二カ所で同規模の爆発起こして事故なわけねェだろ」
沖田は爆発が起きたあたりに目をこらした。
「多分、どっかのサボタージュだ」
榊がはじかれたように立った。
「行こ。混乱に乗じて乗り込む」
「タイミングがよすぎるよーな気もするが」沖田も立ち上がった。「言ってみるか――ん？」
誰かが後ろから肩に手をかけて沖田をとめた。
「なんだよこれからって時に――うわあ!?」
振り向いた沖田が声をあげて飛び下がって背中を金網にぶつけた。
「どした？　背後霊でも出たか？」
後ろを見た榊と真田が、こちらも声をあげて左右にはじけた。
「てて転校生！」
榊が口をぱくぱくさせる。震える指先の差す方向に、困ったような顔で結希が立っていた。
沖田はゆっくり深呼吸した。
「んな所で、何してやがる」

三度目の爆発が滑走路の方向で火柱を立てた。爆発炎に照らし出された結希はうつむいた。はじけるような機銃弾の音が聞こえた。ライフルでも連射しているらしい。

「おい……」榊が沖田の袖をひっぱった。「どーでもいいから、今のうちもぐりこもう」

「おまえも切り替えの早いやつだな。こいつどーしてくつもりだ！」

沖田は目の前の結希から目を離さない。

「んじゃ沖田相手しててくれる？　真田、行こう」

「んでは、おあとよろしく」

沖田に手を上げて、真田は金網に手をかけた。

「こら、逃げるな、こら！」

基地内で火災が発生したらしい。遠くで、大きな火事の炎が夜空を赤く焼いている。機関銃らしい乱射音は、どんどん多くなってきた。

「――なんだあ」

爆発音や破裂音、鳴り出したサイレンなどに混じって、何かのエンジン音が聞こえてきた。

結希から目を離した沖田がぎょっとして振り向く。

「この排気音――まさか」

兵舎の裏からタイヤを滑らせて、ハイビーム角目のヘッドライトの大型バイクが飛び出してきた。後を機関銃の曳光（えいこう）が追いかける。

「うわっ、突っ込んできやぁがる！」

金網に登りかけていた真田が横っ飛びに飛び降りた。フルカウルつきのバイクは、身を低くしたライダーを乗せて一直線に基地内の車道を横切った。

「探偵のCB1100Rだ！」

沖田は目をむいた。青いバイクがスピードを上げながら金網に突っ込んできた。

沖田と榊が思わず左右にダイビングする。大型バイクはあっさりと金網を突き破って草むらを抜けた。

「おっと」

ブレーキをかけながら後輪を滑らせて結希をよけた平沢は、道路に出たところで1100Rを停車させた。ゴーグルを上げる。

「妙な所で会うな。こんな所で何の相談だ？」

反対車線をヘッドライトも点けずに走って来た赤いモーリス・ミニクーパーがタイヤを鳴らして急停車した。運転席側のドアが乱暴に開き、ロングヘアの占い師が向こう側から屋根の上に顔を出す。

「失敗よ。警備の配置読み違えたわ。早く逃げないと――どうしたの？」

結希がいるのに気づいて、沙織はわずかに目を細めた。

兵舎の向こう側から、重機関銃を積んだ軽車両（ハンマー）が飛び出してきた。銃架上のM60を乱射しながら、穴の開いた金網めがけて一直線に走り出す。

「お客さん連れて来てたの？」

「忘れてた」

平沢は路上のCB1100Rをアクセルターンさせて車体の向きを変えた。
「お前らも逃げた方がいいぞ」
「乗って！」
運転席にひっこんだ沙織が助手席側のシートを開け放つと、シートを倒した。沖田たちは顔を見合わせた。
ジープの機関銃が火を噴いた。足元に何発か弾着の土煙が立つ。
「か、考えてるヒマない。乗せてもらおー！」
榊が真っ先にダッシュした。続けて真田がミニクーパーのリヤシートにもぐりこむ。シートを戻して乗り込んだ沖田が座らないうちに、沙織はミニクーパーを急発進させた。
CB1100Rがミニクーパーを楽に追い越して前に出る。沖田は結希のことを思い出して振り向いた。
金網の内側に立つ小さな人影が、追ってくるジープのライトに照らされて一瞬だけ見えた。

ACT・2　感応

246から山の手通りを抜けて新宿に入った。裏道から歌舞伎町に入り、雑居ビル脇の細い歩道に片輪を乗り上げて車を寄せ、ミニクーパーは停車した。

「よお、早かったな」

助手席から青い顔をしてよたーっと出て来た沖田に、先に着いていた平沢が声をかけた。

「うっぷ……」

口許を押さえた沖田がミニクーパーの屋根（ルーフ）に突っ伏す。

「車酔いか？　情けない奴だ」

「自信なくした」沖田は片目だけ開けて平沢を見た。「乗り物酔いしないことについちゃ自信があったんだ」

「素晴らしい運転をするだろう」

沖田はミニクーパーに顔を伏せたままうなずいた。

「見ろよ」後席の榊と真田を指す。「感極まって気絶してるぜ」

沖田は平沢に顔をあげた。
「あの姐さん、カースタントでもやってたのか？　――探偵の同業者か？」
「ではない、と思うが」
平沢は階段を上がって行く沙織の後ろ姿を見送った。沖田は気力を振り絞って助手席のバックシートを倒した。
「おら出てこい、それとも夜が明けるまでひきつってるか」
「ひ、はへほ、へ、はれは」
硬直した榊がやっとのことで口を動かして音声を発した。
「帰り方はわかるな。タクシーは駅前にたまってるはずだ」
「帰れっての？」沖田がボンネットに手をついて平沢に向き直った。「ご冗談でしょ」
「あそこで騒いでらしたってことは、ノブはまだあの中にいるわけだ」
よたよたと足元をふらつかせて、頭の動きだけは正常に戻った榊が出てくる。
「幸い、始発まではまだたっぷりと時間が残ってるみたいだし、ゆっくり話聞かせてくんない？」
平沢はげんなりした顔で雑居ビルの汚れた壁を見上げた。
「前回といい今度といい、お前らと関わるとろくな事にならねえんだが」
沖田は煙草を探してジャケットのポケットに手を入れた。
「お互いさまでしょ」

本日休業の札がかかっているステンドグラスのドアを開けて店に入る。テーブルの上に椅子が逆さに上げられた〈カウンター・ミラー〉の店内にはすでに明かりが点いていた。

「穴場だな、こりゃ」

年代ものの自動ピアノだのセピアがかった映画スターのブロマイドが無造作にピンでとめられた変色した壁紙、骨董屋から持ち出して来たような洋風の電話ボックスなどがある店の中を見回した沖田は目を丸くした。

「探偵、ボトルキープしてあんだろ、一杯飲ませて」

「レッドかトリスでもあったら出してやってくれ」

沙織に言いかけた平沢は、あわてて手を振った。

「待った、こいつら未成年だ」

「ケチケチすんなよー」

「あ、オレいい」榊は手を上げた。「沖田、一人でどーぞ。このうえ酒なんぞ入れたら内臓が死む」

「飲ませるか」

平沢はひらりとカウンターを越えて中に入った。棚から適当にビンやグラスを出す。

「で……」沖田はスツールに腰をおろした。さっきからターフルでカードをめくっている沙織を見る。「あの姐さん、何者だ?」

「見ての通り――占い師だ」
「探偵、いつの間にあんな美女ひっかけたの？」
榊は沖田の隣に腰をおろした。
「ひっかけたのではない！」
平沢は手際よくブランデーをダブルで水割りにした。溜め息をついてターフルから立ち上がった沙織めがけて、カウンターの上にカットグラスを滑らせる。
「あ、俺にも……」
言いかけた沖田の前に、平沢はどんとミルクのパックを置いた。
「これでも飲んどれ」
「情けな……」
目に手をあてた沖田は、占い師の方に目をやった。
「自己紹介もやっとらんのか」
自分用にコーヒー豆をひきながら平沢が訊いた。榊は肩をすくめた。
「あの車の中で、会話が成立するよーな状況だったと思う？」
「思わん」
「ねェ占い師さん」
沖田は、軽い気持ちで沙織に声をかけた。簡単にグラスを半分カラにした沙織が、こちらを向く。

「こいつの未来でも占ってあげてくれない？」
「バカよせ」
指差された榊が、沙織の返事も待たずに沖田に喰ってかかる。
「あ、やんなくていいです。沖！　オレぁ占いなんかいらん」
「せっかくだからやってもらえばいーじゃねェか。彼女取り戻せるかどーか気にならん？」
「それで待ち人来（きた）らずなんて出てきたら、どーしてくれるつもりだよ！」
沙織は、くっくとのどを鳴らして笑い出した。
「おみくじにされちゃった」
平沢が苦い顔をしているその前で、沖田はぐいっとミルクを飲んだ。
「戻って来るって出りゃうれしーだろ」
「出てこなかったらどーすんだよ」
「どーせ占いだ、気にしなけりゃいい」
「えらい気楽に言ってくれっじゃねーか、このやろ！」
「た、たんま、落ち着け」
いーかげんオーバーヒートしている榊が沖田につかみかかった。
「うわっ、と、た助けろ真田！」
「勝手にやっとって下さい、わしゃくじけた」
カウンターにぐてーっと死んでいる真田がぱたぱたと手を振る。

「くそー、落ち着け榊！　占いったってどーせ一〇〇パーセントじゃなかろーが……」
「丁か半かでカタがつくんなら、とっくにコインでも投げとるわ！」
「んな所でプロレスはじめやがって」
渋い顔の平沢はつかみあいに背を向けた。
「落ち着けっての！　予知能力者に未来の事訊くわけじゃねェだろ」
「もし予知能力者だったらどーすんだよ！　あのムチャな運転で事故んなかったのはいちいち骨でも投げてるからか」
椅子から転げ落ちる寸前で、襟首をつかんだ榊と抵抗する沖田の動きがぴたっと静止した。
「予知能力者……まさか探偵！」
「うわっ、手を放すな榊んのバカ！」
バランスを崩した沖田が榊の手をつかみ、道連れにして床に転げ落ちた。床に手をついたまま沙織の方を見る。
沙織はぺろっと舌を出して笑った。
「ステキなカンしてるじゃない」
平沢は天井を向いたまま煙草を出してくわえた。火は点けない。
沖田と榊は顔を見合わせた。
「すすするとつまりモノホンの超能力者……か？」
「オレに訊くなオレに」

榊は立ち上がった。おずおずと口を開く。
「つかぬことお伺いしますけど……本物のちょーのーりょく者でらっしゃいます？」
「めずらしくないでしょ？」
沙織はいたずらっぽく笑ってみせた。沖田は勢いをつけて立ち上がった。
「やい探偵！　あのおねーさんどこまで事情知ってやがんだ！」
「こちらとしては、だな」平沢は沖田に背を向けたまま言った。「これ以上詳しい事情を知る前に、おひきとり願いたいんだが」
「冗談じゃねー」
「部外者じゃないことは確かだ。探偵と共同作戦してたんだから――あの、エスパーなら、SCFとかゆーのに声かけられませんでした？」
「もう、しつこいくらい」
沙織はブランデーを一口飲んだ。
「きみの彼女ほどじゃないけど」
「ありゃ特別だよ。しかし……はー」
沖田はカウンターに肘をついて、しげしげと沙織を見つめた。
「意外といるんだねえ、超能力者って」
「ほれ、失礼だぞ」
平沢が、棚から抜きとった酒ビンで沖田の頭をこづいた。

「それで、予知能力者？」榊が訊いた。「ですか？」
沙織は肩をすくめて肯定した。
「競馬で一財産つくろう」
「寝てろ。おまえ、いいから寝てろ」
突然むくっと起き上がって訳のわからない事を口走った真田を黙らせて、沖田は平沢に身を乗り出した。
「えらいの味方にしたね。仕事がぐーんと楽になったんじゃない？」
平沢は露骨に顔をしかめた。
「ちょっと待って……それっておかしい」
榊が口をはさんできた。
「予知能力あるなら、どうして失敗するってわかってるような殴り込みかけたの？」
「占いの類は信じない性質ね」平沢は沙織に視線を走らせた。「仕事には一切、能力を使ってもらってない」
「またなんで、そんな勿体ない」
「占いの類は信じないと言ってるだろうが」
「占いと予知とは別物だと思いますが」
「似たようなもんだ。カードやインスピレーションで未来がわかるんなら、世の中とっくに平和になっとる」

「んじゃまたなんで？」沖田はさらに首を傾げた。「探偵の性格からして、プロでもないのを身内に引き込むなんてのは……あー、わかった！」
「誤解するなボケ！」
「まだ何も言っとりませんが」
「彼女は一流のエキスパートなんだよ」
平沢は、気兼ねするように沙織を見た。沙織は、首を傾げて微笑んでみせた。
「――超能力とか、その方面のな」
榊と沖田は顔を見合わせた。
「専門家だって」
「ふーん」
沖田がスツールから立った。
「専門家なら、訊きたいことがある」
グラスを置いた沙織が、スツールをまわして沖田に向いた。カウンターに上半身をもたせかけて横肘をつく。
「テレパシーってのは、何なんだ？　テレパスって種類の人間は、何考えてやがる？」
不思議な表情をした沙織の瞳が沖田を捉えた。
「本人に訊いた方がいいんじゃない？」
沖田は目をそらした。

「そらそーですけどね」
無口な転校生の、まるきり感情の読めない瞳が浮かんだ。
「手品や占いじゃあるまいし、どーして他人の考えてることがわかるんだ？」
「言葉だけでしか話さないのじゃないでしょ」
占い師の、訳のわからない物言いに、沖田は困惑して沙織を見ながらお話しするんじゃない？」
「普通に話していても、相手の態度とか、表情とか、身ぶりや手ぶりを見ながらお話しするんじゃない？」
「そりゃそうだけど……」
「雰囲気だけだって、その人がどんな気分でいるかわかるでしょ。テレパシーって、そういうのが特別敏感になっただけじゃないかしら」
「そーゆー単純なもんなら苦労しないと思う」
榊がぼそっと言った。
「目の前にいる人でも、どれが本音でどれが建前か、何考えてるのかわからなくなるのに」
沙織は優しく微笑んで首を振った。
「超能力者は、普通の人間じゃないもの」
よく使い込んだ銅製のコーヒーポットがごぼごぼ音をたてはじめた。平沢はカウンターの奥にもたれて、黙って腕を組んでいる。
「おんなじ人間だろ」

「あ、バカ」
カウンターの奥に手をのばした榊は、キャップを開けたままだったレミーをらっぱ飲みした。
止め損ねた平沢が渋い顔をする。
「ガブ飲みする酒じゃないぞ」
「はあー」ボトルを置いた榊が、熱い息を吐いた。「……にが」
「もったいない飲み方を……」沖田がひょいと榊の手からボトルを取る。「探偵、グラス」
「贅沢だ」
平沢はめんどくさそうにカウンターにグラスを三つ出した。
「時々、彼らの方が本当なんじゃないかと思うわ」
沖田と真田は占い師を見た。
「言葉を交わさなくてもわかりあえる——離れていても想いが届けられるなら、素敵だと思わない？」
沖田は溜め息をついた。
「そりゃね……相手がわかってれば……」
電話のベルが鳴り出したのはその時だった。
「出なくていい」
立ち上がりかけた真田に言って、平沢はひらりとカウンターを飛び越えた。ドアの右側にある古風な電話ボックスに入ってピンク電話の受話器をとる。

「そんでは今のうちに」
沖田は自分のグラスにレミーを注いだ。
「ん。ふっふ、こんな高級酒久しぶりだぜ。――ん？　どーした榊」
「飲むんじゃなかった」
榊はカウンターの腕に顔を埋めた。
「は、腹が……うー、気持ち悪い」
「清酒はないか」
「寝とれ！」
むっくり起き上がった真田に沖田が喚いた。
「パブに日本酒が置いてあるか！」
「焼酎でよければあるわよ」
「ぶげっ」
沖田はせっかく口に含んだ酒を噴き出しかけて、あわてて飲み下した。
「しょ、しょうちゅうですか？」
「お好みなら泡盛とか老酒なんてのもあるけど」
「おみそれ致しました」
電話ボックスのドアを乱暴に開けて平沢が出てきた。フィルターを噛みつぶしたままカウンター

「どったの」沖田が声をかけた。「難しいお顔して」
「さる筋から情報が入ったんだよ」
沖田の前からボトルをとった平沢は、棚から出したグラスにブランデーを注いだ。ストレートのままぐいと飲む。
「小牧ノブの移送が決まったそうだ。明日の深夜に厚木からイエローサーチへ移され、シャトルで宇宙へ飛ばされる」
榊が、がばと顔を上げた。
「行き先はまた月?」
平沢は首を振った。
「ブルーサーチ――高度衛星軌道上の機動衛星だ」
榊は何も言わずに天井を見上げた。

朝の空は、まだ暗かった。夜を知らない街がやっと疲れを覚える時間になって、榊たちは店を出た。
「始発は動いとんのか?」
「なんとか間に合うはずだけど……おー寒ぶ」
「無断外泊の罪、ばれたら万死に値する」
「不吉なこと考えんじゃねェ」

ほんじゃまた、と手をあげて、三人の学生はいかがわしいネオンの点いた裏道から表通りへ消えていった。

見送った沙織が、平沢の顔を見上げた。

「主義に反するんじゃないの？」

「何のことだ？」

階段へ戻りかけた平沢が振り向く。

「どうしてあの子たちに彼女のこと教えてあげたの？」

「主義には反しちゃいないさ」平沢は手をひろげた。「今日限りでクビになったんでね」

平沢は階段を登りはじめた。

「まあ、最低の仕事ぶりだったからな。スポンサーに見放された。今週限りで無職になる」

「あれ？……こら、どこ行く」

自動券売機の前をぼんやりと通り抜けた榊に、真田が声をかけた。

「JRの切符はこっちだぞ」

「オレ、もう一度厚木に行く」

ふらーっと小田急線の券売機の前に立った榊が、スリットにコインをほうり込んだ。ボタンを押そうとする腕を、沖田がつかむ。

「行って何やる気だ？」

「着くまでに考える」
「やめとけ」
沖田は払い戻しのボタンを押した。小銭がじゃらんと戻ってくる。
「一人で何が出来る？　徹夜明けに軍警（MP）ともめてブチこまれるほどヒマ人じゃないだろ」
「――けどな」
「やめとけって」
榊の肩をたたいて、沖田は歩き出した。
「帰ってひと寝入りしたら作戦会議だ」

「この非常時にどこで無断外泊してきたのよ！」
「あ……また……」「とっとっと……」
「最悪の頭痛のネタが残っとった」
白々と明けた朝の男子部正門で、沖田は頭をかかえていた。トレーニングウエアにどてらを着て木刀を握ったつばさが、ハイトーンの金切り声で喚（わめ）き散らす。
「酒臭い息して！　どこで遊んで来やがったあ!!」
「ど、どこでと、申されても…」榊はたじっと後退った。「えーと、厚木行ってから新宿の…」
「ずいぶんとまた余裕があるじゃないの」
校門の門柱に追いつめられた榊のみぞおちを、つばさは木刀の先で軽く突いた。徹夜明けらし

い充血した目で沖田をにらみつける。
「どーゆー事なのか説明してくれるんでしょおねえ」
ちらりとつばさを見た沖田が目を覆う。
「誰が主人公だよ、ったく」
「んじゃそーゆーこって、沖田、おあとよろしく」
つばさにへらへらと愛想笑いをして、榊と真田は脱兎の如く逃げ出した。
「てってめぇら裏切り者！」
「君の尊い犠牲は忘れない」
「一人残ってりゃ事情聴取には充分よ」
つばさは木刀の切っ先を沖田に向けた。ニッコリと微笑む。
「何してきたの？　それと、どうするつもり？」
沖田はやけになって喚いた。
「こっちが訊きたいよ！　知ってんなら榊に教えてやれ、どーすりゃいーのかな！」

四時限目の終了を告げるチャイムが鳴り終わった。人っ子一人いない男子寮金紺館の廊下を、制服姿のつばさがずかずかずかと歩いてくる。
つばさは、405号室の前で止まった。ぶつぶつ文句を言いながらルームナンバーを確かめ、ブレザーのポケットから百円ライターと爆竹の束を取り出す。

「助けに来て……」
闇の中にノブがゆらめいて見える。
わかってる――
榊はしっかりとノブを見定めたまま、返事をした。
待ってろ。すぐ行く――
「早く来て」
幻のように、ノブが口を動かす。
「でないと、遠くへ連れてかれちゃう」
待ってろ……もうすぐだ――
言いながら、榊はきつく奥歯をかみしめた。手をのばせば届くはずなのに、絶望的な距離がある。
だしぬけに、榊はノブの強烈な拒否と反抗の意志を感じた。闇の向こうで、ノブは必死に首を振ってもがいている。
「！」
銃声が響いた。機関銃が立て続けに火を噴く。
「やめろお！」
榊は飛び起きた。ぷーんと火薬の匂いが漂ってくる。

「ど、どうしたの？」
榊の予想外の反応に、ドアを開けたつばさがびっくりしている。
「まなんて過激な起こし方だと」二段ベッドの上段から沖田がだらんと足をたらした。「放火魔め、部屋ん中に爆竹ほうり込みやがったろ」
「水撒いた方がよかった？」手にドアを閉めた。
部屋に入ったつばさは後ろ
「もう昼よ。午前中全部サボッたんでしょ」
「るせー」
沖田がベッドから床に飛び降りた。爆竹の残骸をつまんでゴミにほうり込む。
「あち……どした榊、妙な顔して」
「夢みた……」
ぼんやり答えた榊の脳裏に、ノブの言葉の感触が甦った。悲鳴のような生の感情が、あざやかに聞こえてくる。
「夢――じゃないのか？」
「何言っとんじゃ」
ベッドの上段に手をかけて、沖田は榊の顔を覗きこんだ。
「そーいや、何ぞ妙なこと喚いとったな」
「夢じゃ、ない」

頭を振って、榊はベッドから這い出した。寝不足気味の頭にかかったもやが、少しずつ晴れてくる。榊はあわてて枕元にあるはずの目覚まし時計を探した。

「おい沖田、今何時だ？」

「昼だって言ってんでしょ」つばさは腕時計に目を落とした。「今、十二時半……どしたの？」

時間を聞いた榊は、頭を押さえたままベッドに座りこんだ。

「探偵、ノブは昏睡状態のままで基地の病院にいるって言ったよね」

沖田はうなずいた。

「聞こえるんだよ」

「なんだって？」

「聞こえるんだよ、あいつの声が」

「聞こえるって……」唖然としてつぶやいた沖田が思いあたる。「……まさか、テレパシーか？」

「小牧ちゃんもテレパスだったっけ？」

向こう側のベッドから出てきた真田が首をひねった。

「ではない、と思うけど」榊は顔を上げない。「だけど、あいつなのは確かだ……くあー、たまんねえ！」

榊はいきなり立ち上がった。

「顔でも洗ってくる」

タオルをひっつかんで部屋から出ていく。

蛇口から冷たい水が迸(ほとばし)っている。タオルでぬれた顔をふいていた榊は、手を止めて流れる水に目を向けた。

息をついて、ごしごし顔をふく。覗きこんだ洗面鏡の中に、夢で見たノブの顔がオーバーラップした。

水を止めて、廊下を歩きだす。タオルをひっかぶったまま、榊はおよそ不可能としか思えないことを考えていた。

部屋に戻ってドアを開ける。沈滞した空気の中で、三人が入ってきた榊に顔を向ける。

榊は口を開いた。

「こっちから、起こしてみようと思う」

「あん？」

沖田が訊き直した。

「向こうの声が聞こえるんなら、こっちの声も向こうに届くはずだ。こっちから呼びかけて、眠ってるノブ起こしてやる」

「起こすって、おまえ……」

「眠ってるから、ノブ、超能力も使えないんだ。こっちから起こしてやれば……」

「一発であの転校生にばれるな」沖田が身を引いて腕を組んだ。「だいたい、具体的にどーやるつもりだ」

「基地の外へ戻って、それでも組んで宙に浮くか」
「パイプのピラミッドで座禅」
沖田がニヤッと笑った。真田が頭の上に手を組んでベッドに倒れこんだ。
「また根も葉もない作戦だこと」
「で、いつやる？」
沖田は身を乗り出した。

ACT・3 接触

外から見た限りでは、基地内には前夜と変わったところは見えなかった。遠く星空の下に基地の明かりが瞬(またた)いている。

「動きませんな」

愛用のニコンの双眼鏡をあてた真田がつぶやいた。沖田は夜光塗料の浮かび上がった腕時計の文字盤を見た。

「もうすぐ二時間」

フェンス際に座りこんでいた沖田は振り返った。草むらの中に両足を組んで首を落とした榊が、しきりにぶつぶつぶやいている。

二五〇〇メートル級の厚木基地主滑走路、離昇コースの真下。今も大型ジェットの音を響かせて、KC－10らしい機体が下部衝突防止灯を赤く旋回させながら頭上を通過した。

「どーもわからんなー」

イヤホンの航空無線に耳を澄まして、沖田は首をひねった。

「昏睡状態の病人運ぶんだから、ハーキュリーズでも使うと思うんだが……」
管制塔と飛行機同士の、雑談混じりの誘導が続いている。正規軍関係の哨戒機や各種戦闘機、給油機などが大部分で、極秘扱いの組織に所属する管制など聞き分けられそうにない。
遠くから、聞き慣れた二ストロ単気筒の排気音が聞こえてきた。接近してきて、止まる。
双眼鏡を覗いたまま、真田が振り向いた。
「編集長、戻ってきたよ」
「――なんだありゃあ？」
はるか彼方で着陸態勢に入った飛行機に、沖田は目を細めた。
「真田、ちょっと双眼鏡」
「あいよ」
航空無線に聞き耳をたてながら、沖田は双眼鏡を目にあてた。小型のレシプロ双発機が両側のエンジンナセルから主脚をおろしてタッチダウンしようとしている。
「アンドーバーか？　……じゃねえ、DC－3だぞありゃ」
沖田は声をあげた。
「じゃない、輸送型だからC－47か――また何つークラシックな」
「何のこっちゃ」真田が妙な顔をする。「C－47？」
「どうしたの？」
買い出しから戻ってきたつばさが草のうえにポリ袋を置いた。

「相当昔の型の飛行機が降りてきた」
沖田は双眼鏡から目を離した。
「軍のやつじゃないらしい――だいたい今どきの米空軍(U.S.A.F)がどれだけ経費削ってるったって、第二次大戦で使ってたよーな飛行機は現役じゃないぞ」
「すると、あれが？」真田は、短い距離で着陸してタキシング・ウェイに入ったC－47を指差した。「平沢氏が言ってた、ＳＣＦの専用機？」
「多分な」

C－47といえば、ダグラスＤＣ－３を原型とする輸送型の軍用機で、第二次世界大戦でひたすら量産された往年の名機である。しかしながら原型初飛行が一九三五年となると、これはもう骨董品に近い。
「イエローサーチはまだこんな機体を使っとるのか」
タキシング・ウェイから誘導員の指示に従ってステアリングしてきたC－47を見たジルベスター博士は、露骨に顔をしかめた。
「この程度で驚いてちゃＳＣＦのパイロットは勤まりませんぜ」
博士と同じく、この機体で日本を離れる予定のマイクは旧式なレシプロエンジンが止まる音を聞きながら機首のコクピットを見上げた。
「アフリカの方じゃ、まだメッサーのギガントなんて化け物抱えこんでる基地があります。確

か、ヨーロッパじゃ連絡用に最終型のスピットファイア使ってる奴に会いましたし……」
「宇宙(そら)の上にばかり金を使い過ぎて、下にまではまわって来ぬか。エアバスとは言わんが、せめてガルフストリームぐらいまわって来んのかね？」
「無理でしょうね」
マツキは十字を切ってみせた。
「だいたいＳＣＦの機といえば、テストも終わってない最新型か、でなければ最旧式と相場が決まってます」
「墜(お)ちるんじゃないだろうね」
「スビック基地でＢ整備を終えたばかりだそうですが」
マツキは、フィリピンの空軍基地からＣ－47を空輸(フェリー)してきたパイロットのノエル・ボーから渡されたフライト・マニュアルをめくった。
「本当ならとっくに払い下げになってるはずの機体だがな、代替機の予算が三年連続でポシャッとる」
「空飛ぶスクラップだね、まるで。よーノエルちゃん、元気だったー」
ひょいとマニュアルを覗きこんだマイクはノエルに声をかけた。ノエルは笑って挨拶(あいさつ)を返す。
構内用の救急ワゴンが、とろとろと走ってきてＣ－47のそばで止まった。リヤゲートを開けて、基地の看護兵がきゃしゃな車付きベッド(ストレッチャー)を降ろす。続いて、白衣の軍医がおりてきてジルベスターに手を上げた。

ジルベスターは、ストレッチャーの上の小牧ノブを見た。
「一時間ほど前からα波がちょくちょく出るようになりました。今はごく浅いレム睡眠の状態です」
軍医はジルベスターにカルテを渡した。
「いつ目を覚ましてもおかしくありません」
「ふむ」
博士は、時々うなされるように頭を揺らすノブの寝顔を見た。ノエルに声をかける。
「ノエル、機の中の電子機器の中に、指向測定型のＥＳＰセンサーはあるかね？」
マッキにフライトプランを聞いていたノエルは、博士の横へ来て首を振った。
「とにかくゴチャゴチャしてて、何があるかわかんないんです。――えーと、超長波（オメガ）の通信機と、対地用のセンサーがいくつかあるみたいですけど」
ノエルはノブの顔を覗きこんだ。
「どう思うね？」
「あの、測定不能の指数を出したっていう女の子ですね」
ノエルは首を傾（かし）げた。
「何か、苦しそうですけど」
ターボプロップの音とともに、空母へ戻るらしい艦載輸送機Ｃ－２Ａが頭上を通過した。

「どーすんのよ」缶コーヒーを飲んだつばさが、基地内を指差した。
「来てるんでしょ。殴り込みかけんなら早い方がいいんじゃない？」
「仰せの通りなんでごぜえますがね」
沖田は、背後で一心に精神を集中している榊を見た。
「探偵だって失敗して追ん出されて来たんだ。今回はどーしたって失敗するわけにいかねぇんだから。――しかしあの榊、本気で小牧ちゃんに届くと思ってんのかね」
「思ってるからやってんでしょ」
つばさも榊に目をやった。
「普通の人間でも、エスパーになれるの？」
「さあね」
沖田は航空無線に耳を傾けて、目を戻した。格納庫前へ誘導されたC－47は、今は補給をうけているらしい。
「俺としてはあの転校生に気づかれるんじゃないかと、その方が気になるんだが」
旅行用のトランクをキャスターでがらがらと引きずって、結希は地上へのエレベーターに乗った。
軽い加重をかけて、エレベーターが上昇をはじめる。パネルの旧式な階数表示が上昇していくにつれて、結希は目を閉じた。トランクのストラップが手から離れる。結希はのろのろと両の耳

を塞いだ。
浮遊感とともに、エレベーターが止まる。結希はうつむき加減のままトランクを引いて、リノリウムの床に足を踏み出した。
迷彩色の上に航空クラブ風の塗装をして、しかも全体的にはげて古ぼけた感じの旧式なレシプロ輸送機は、機首を上げた駐機姿勢のままライトに浮かび上がっていた。最新型のジェットや大型のレシプロの輸送機を見慣れた目には、旧式な双発プロペラ機は貧弱に見える。結希は、コンクリートの上にトランクを引きながらC－47に近づいた。
誘導路に出た結希は、二五〇〇メートルの滑走路の先を見た。夜間滑走路灯の彼方、パースのかかった消失点のあたり――
心を開けば、表情まで見えてくる。しかし、結希は見る気はなかった。結希はC－47輸送機に向けて歩き出した。
「！」
結希はつかれたように顔を上げた。C－47の右の三枚プロペラが、セルスターターできゅるきゅると回りはじめた。続いて左。
「ふむ……」
機内のコンピューターユニットの後ろに固定されたベッドの上のノブの左腕から脈をとってい

たジルベスター博士は、その顔を見やった。腕時計と見比べるまでもなく、脈搏がかなり速くなっている。

博士はノブの額に手をあてた。

「う……ん」

ノブはうなされてかぶりを振るように博士の手を払いのけた。

「……まさか？」

博士はストレッチャーの下から、固定用のフックをはずしてジュラルミンのケースを引き出した。素早くケースを開け、ディスプレイとコードを引き出してバッテリーに接続する。汎用の高性能ＥＳＰセンサーである。

生理食塩水の用意はない。博士はデータが粗くなるレーダーアンテナでの測定を避けて、直接ノブのこめかみに電極を貼りつけた。

とたんにディスプレイに波型が出た。レベルを最小にセットしてあったため、スクリーン一杯に激しい波型が出る。指数に直せば一桁と十台をいったりきたりの弱いものだが、その振幅の激しさは普通ではなかった。

「何が起きているのだ？」

機体後部のハッチから、トランクをかかえた結希が乗り込んできた。はしごに毛が生えたくらいのささやかなタラップがはずされる。結希は開いたままのドアから顔を出して、滑走路の先の一点をみつめていた。

「乗り遅れはいませんね」
機長席から後方のキャビンへ首をまげたマイクが叫んだ。
「行きますぜ！」
スロットルレバーを上げてフットブレーキをゆるめる。後部ドアを開けたまま、C－47は滑走路に向かって動きはじめた。
「離陸許可（クリアランス）が出た」
航空無線のイヤホンをおさえたまま、沖田は舌打ちをした。腰をあげる。
「しゃあねえ、行くぞ。滑走はじめる前に何とかして……」
「届いた！」
それまで黙りこんでいた榊が声を上げた。フェンス際の三人が一斉に榊に向く。
「届いたって……おまえ」
沖田は戸惑いながら滑走路に目を戻した。
「もうすぐ滑走はじめるぞー」
「届いた……聞こえてる」沖田の声を聞いていないように、榊はうなずいた。「そうだ、起きろ」
「滑走路に出たぞ！」
双眼鏡を目にあてた真田が叫んだ。

「どうも妙な感じだな」
機長席のマイクは、ヘッドホンに手をやった。
「ノエルちゃん、おかしな感じがしないかい？」
「する」
右側操縦士席（パイロットシート）のノエルが、肩越しにキャビンを向く。まだ尾輪が滑走路についているため、上に向かって傾斜している機内後方のキャビンに、博士と結希が見えた。
「どうしたのかしら？　何か、圧迫感みたいな……」
「博士ェ！」
機内電話などという高等なものはない。マイクはスロットルをアイドルまで絞って後ろに喚いた。
「実験でもはじめたんスかあ？」
「実験ではない」
激しい波の振幅を見せるディスプレイに目を据えたまま、博士は答えた。
「どうします？　飛行（フライト）を延期しますか？」
「いや――悪い予感でもあるのかね？」
「そういう訳じゃありませんが」
博士は結希を見た。
「どう思うね？」

結希は首を振った。
「管制塔（コントロール）がうるさいんで行きますよ」
マイクはスロットルを押し込んだ。ほとんど最大離陸重量一杯のフル・ペイロードのため、C－47はのろのろと動き出した。
「ノエルちゃん、速度の読み取り頼む」
「はい」
「滑走はじめた……」
双眼鏡を目にあてたまま真田がつぶやいた。沖田が榊に振り向く。
「いいのかよ！　飛んでっちまうぞ！」
「大丈夫だ、心配いらない」
「なにが！」
「オレがいる、安心して来い！」
「おい沖田」
真田は、双眼鏡を握ったまま沖田と顔を見合わせた。
「榊の奴、まさか……」
「ありうる」沖田はうなずいた。「だいたい、この土壇場でまともでいられるはずねェんだ」
「バカ言わないでよ！」

つばさが瞬く間に二人に平手をとばした。
「なに考えてんのこんな時に！」
榊は、じっと滑走路の先の小型輸送機を見つめていた。両の翼のプロペラを全開にして、走り出した機体の前照灯や翼端灯がかすかに揺れている。
「来い！」

腰部を固定されたストレッチャーのベルトを引きちぎろうとするように、ノブが体をひねった。もがくように頭を振って髪を散らしながら、うわ言のように口を開く。
「まずい……」
博士は、ルナベースで解析したノブのサイコキネシスに関するデータを思い出して顔をしかめた。シャトルを振り回すのに要するエネルギーは、このちっぽけな輸送機のエンジン二つをあわせたよりはるかに大きい。
ディスプレイに現れる数値そのものはあまり上昇していない。ほとんど常人と変わらないくらいのレベルだから心配するほどのものではないのだが、波は相変わらず異常な振れ方を示している。
離陸速度に向けて加速する機体に、滑走路からの振動が次第にピッチを上げて伝わってくる。
離陸時の、機体が不安定な時間である。
博士は、目の前で起きようとしていることを理解しかねて結希を見た。

結希はノブの顔から目を離した。閉じようとしても至近距離から純粋な意識が流れ込んでくる。

拡大しようとする意識と思い通りにならない肉体の中で、彼女自身の意思がもがいている。流れから身を起こし、流れに逆らおうとする明確な意思。

自分がかつてまったく同じ意思を持っていたことに気づいて、結希はノブの顔を見た。正視出来ずに顔を覆う。恥ずかしくなるような生の感情が激しく流出してくる。

「速度三五マイル、――四〇」

ノエルが、後ろを気にしてキャビンに振り向いた。

「V1……もうすぐVR」

「重い！」

厚木からイエローサーチ基地へ一気に飛ぶため、機体内に増設された燃料タンクまで一杯になっている。重い機体のためじりじりとしかスピードが上がらない。

「はい、VR」

「了解」

尾輪が滑走路から離れ、機体と滑走路が水平になる。後部キャビンがふわっと浮かび上がった。

「五〇……五五」

「ったくトロい飛行機だぜ」

マイクは、旧式な操縦桿を握った手に力をこめた。

「離陸するぞ！」

真田が声を上げた。いささかのんびりしたレシプロ機のエンジン音がゆっくり近づいてくる。

榊はじっとC－47をにらみつけていた。

「目を覚ませ……」

「V2」

「あいよー！」

やっと離陸速度（V2）に達したことをノエルに告げられて、マイクは操縦桿をひいた。一度滑走路を離れた車輪が、上昇角をとりすぎてバウンドする。

「おし、行ける」

C－47は滑走路から離れた。スロットル全開のまま車輪を格納し、ゆっくりと上昇する。

「離陸（テイク・オフ）した……」

沖田が唖然とつぶやいた。ゆったりと翼を広げた輸送機は、高度を取りながら頭上に接近する。

「いいのかよ榊」

SOL MAR
STAR
RECTROIC

「そうだ、起きろ！」
榊は叫んだ。びくり、と体を硬直させたノブが目を見開く。とたんにディスプレイが真っ白に輝いた。
「なに!?」
博士は目を見開いた。
「うわ！」
星空に影をおとして、榊たち四人の頭上を超低空でC－47が通過しようとする。その瞬間、沖田は自分の体が浮いたような感覚をおぼえた。
「な、なんだァ？」
スローモーションのように風が止まる。上に向かって落ちるように景色が回り出し、四人を眩が襲う。ESPセンサーが火を噴き、ディスプレイが爆発した。
「うわっと」
まるでエアポケットに落ちたように、C－47の機体がずんと垂直に高度を下げた。
「うわっ、墜ちる！」
二〇〇フィートも高度がないのに、エアポケットなどあるはずがない。ローレベル・ウィンドシアに巻きこまれたように瞬間に高度を落として墜落もせずに、まだ何事もなかったように上昇を再開した機体に安心しながら、マイクはキャビンを振り返った。
「どーもすんません。上空から尾部にハンマーでも落とされたよーで……え？」

マイクはぎょっとしてキャビンの奥を見直した。機体後部から落ちるように振られたのは確かであるが、ささいな爆発のあとの薄い煙の中に必要以上の人数が見えた。

「な、なんだなんだ、何が起きた」

くらくらする頭を振りながら、沖田は周囲を見回した。とたんに目の前三〇センチで上下逆になったつばさの顔がどアップになる。

「わ、わあ！」

「重いぞー、どけ！」

背中の下から真田の声がした。せまい所に落ちて折り重なっているらしい、と現状を認識した沖田はあわてて付近を手探りした。

「何事だ……？」

聞き慣れない英語が聞こえた。スイッチ音がして明かりが点いた。

「……」

数秒の沈黙が流れた。

「――え？　……うそ、やだあ！」

逆さになって、スカートが腰までまくれ上がっているのに気づいたつばさが、あわてて沖田の上からはね起きた。

「ねえどしたの？　何が起きたの？」

「あた！」

スカートを押さえて降りるついでに榊の頭を蹴とばしてしまう。頭を押さえて顔をあげた榊の正面に、壁ぎわのストレッチャーから半身を起こしたノブがいた。

「やあ」

榊はぎごちなく手を上げた。とたんにノブが榊の首にかじりついてくる。

「わたし……聞こえたの、榊くんの声――だから……だから」

あとは声にならない。

「てってめえら！」起き上がった沖田が榊の背後で大声を上げた。

「転校生！　それにあの博士！」

事前に逃げていた結希は、ほんとうに困った顔をして沖田から目をそらした。もろに巻きこまれたジルベスターは、ディスプレイの破片を払いながら天を仰いだ。

「何ということだ……」

「そりゃこっちのセリフだ。いったい何なんだこりゃ!?」

「ちょっと失礼」

せまいキャビンの中で沖田の前を通り抜けて、真田が窓の外を見た。

「うえ……沖田、空飛んでるぞ」

「空だ？」

「うそでしょ？」

髪をかきあげながら、つばさは真田と反対側の窓に首を伸ばした。

「あらやだ、ホントに飛んでるわ」
「飛んでるって……おい榊！」
沖田はとりあえず事件の張本人と思われる男を呼んだ。榊はストレッチャーに肘をついたまま動かない。
「何をやっとるんじゃ？」
「ん？」
榊が肩越しに振り向いた。ほっとしたような笑顔を見せる。
「寝ちゃった」
榊の腕の中でノブは安らかに寝息をたてていた。

ピンライトをばら撒いたような鎌倉の夜景を越えて、太平洋に出た。計器盤に新しく追加された衛星航法装置（GPS）に南下するコースをとらせ、マイクはヘッドホンをはずした。
「あと、ちょっと見ててくれ」
ノエルに言ってシートから立ち上がる。
「キャビン（しろ）を見てくる。お客さんが増えたらしいからね」
操縦席の後ろにある、非常用（エマージェンシー）の赤いツールボックスを開けて、マイクはワルサーPPK／Sを取り出した。グリップから弾倉（マガジン）を引き出して装弾を確かめ、戻してチェンバーを引き安全装置を解除する。ノエルが心配そうな顔でパイロットシートからマイクの顔を見上げた。

「撃つの？」
「殺しゃしないよ」
マイクはチェックリストを持って、機体中央に据えられた電子機器の間を通って後部キャビンに歩いていった。

「つまり、ノブが俺たち四人をテレポーテーションとかで、このポンコツの中に引っぱりこんだってわけか？」
沖田は壁際のベンチシートで頬杖をついて博士をにらみつけていた。博士は反対側のシートですすだらけになった顔をふいている。
「学問的に説明すると、そうなる。だが……」
博士はストレッチャーにもたれて話を聞いていた榊に目をやった。
「その引き金となったのが、そちらの学生の思念だとすると――二人の間にテレパシーが通じたことになるが、その理由はわからん。テレパスでもない者同士の間でこんなことが起きるはずはないのだが」
「ったく……」
沖田は苦い顔を榊に向けた。
「どーして全員呼び寄せてくれちゃうんでしょーねェ。榊一人だけ呼びゃいーものを……だいたい、同じテレポなんとかするなら、小牧ちゃん俺たちの所に呼べばよかったじゃねェか」

「オレとしてはそのつもりだったんだけども」榊は申し訳なさそうな顔をした。「いや、まさかこんなことになるとは予想外だった、ははは」
「ははは で済む問題じゃないと思う」
真田は四角い窓の外を気にしながら言った。
「で、次はどうやって逃げるの？」
つばさがあっけらかんと訊く。沖田はわざとらしく腕を組んだ。
「とりあえずそいつが問題だ。行き先はどーせ例の南の基地だろ。イエローサーチったっけ？」
沖田は前の方のコンピューターユニットに浅く腰かけている結希に目をやった。ぶしつけな視線にびくっと肩を震わせた結希が、かすかにうなずく。
「んなとこまで連れてかれたらたまりませんな」
「んだ」「当然よ」
「ほんじゃま、パラシュートの五つも用意してもらいますか」
「残念だが、それほどの持ち合わせがない」
コンピューターユニットの間から、ＰＰＫ／Ｓを構えたマイクが姿を現した。
「あ、きたねー、飛び道具」
真田は反射的に内懐の手裏剣に手をかけた。マイクはわずかに銃口を動かして真田の胸に狙いをつける。
「妙な気は起こさないでくれ。投げナイフよりこちらの方が速い」

手持ちの武器を見透かされた真田は動きを止めた。マイクはくるりとPPK／Sを回してみせた。

「安心しろ、実弾は入ってない。即効性の麻酔弾だ」

「麻酔弾……うえ」真田は顔をしかめた。「まさかアルコール系のなんか使ってんじゃ……」

「CB－RAY系だ。さて、まず……」マイクは機内に不法侵入した四人の顔を見渡した。「みんなの体重を聞かせてもらおうか」

「体重？」

予想外の質問に、四人は顔を見合わせた。マイクは書類ばさみのチェックリストを上げてみせた。

「今日のフライトはかなり重くなっている。これだけ無賃乗車にたかられたから、燃料計算をやりなおさなきゃならん。一人五〇キロとしても四人で……」

「失礼しちゃう！　わたし五〇キロもないわよ！」

「服着てても？」

沖田の一言で、つばさはふくれて黙り込んでしまった。

「俺は一四五ポンド」「オレ六二……三キロかな」「拙者は十五貫じゃ」「そちらの女性はフライ級だそうだ」

「ドクター、ポケコンありますか」

ささやかな抵抗とばかりに単位をばらばらに言った一同に、マイクはげんなりした顔で博士に

助けを求めた。
「合計で二四〇というところじゃな」
「あら、あっさり」
「どーも」
結希のポケットコンピューターを渡されて、マイクは計算にかかった。
「どうかね？」
「全部でピアノ一台分くらいの重量にはなりますからねえ。最経済速度で大圏コースの最短距離を飛ぶとして、貿易風で結構ガソリン喰われますから……」
マイクは答えをはじき出した。
「はあ……ただでさえ最大荷重で燃料満載ですから、ギリギリですな。一つでも低気圧を迂回(うかい)すればガス欠で墜ちます」
マイクは四人の学生の顔を見た。
「なんなら戻ってこの連中置いて来ますか？」
「是非そーしていただきたい」沖田はちらりと榊を見た。「できればそちらで眠ってる小牧ちゃんと一緒に」
「できんだろうな」
博士は首を振った。
「あ、そ。そりゃ残念」

「もう一つ訊いていい？」
榊がノブに目を落とした。
「昏睡してたんでしょ。どーしてまた眠っちゃったの？」
「今は熟睡しとるよーに見えるが」
「疲れたんじゃろ」
博士はあっさりと言ってカルテを取った。
「四人分――合計二〇〇キロ以上の物体を地上から飛んでいる飛行機の中にテレポテーションさせたんじゃ。疲れないはずがあるまい」

沙織は水晶球から目を上げた。
「行ったわ」
「ホントに？」
ターフルの後ろに立っていた平沢は、タンブラー片手に水晶球を覗きこんだ。何も、見える訳がない。
「あの超能力少女が起きたか――つまり、めでたく再会は果たされたわけだ」
乾杯、とグラスを上げかけた平沢は手を止めた。
「なんて顔してる」
うつむき加減に昏(くら)い瞳を水晶球に落として椅子に身をまかせていた沙織は、平沢の顔を見上げ

た。肩をすくめて笑ってみせる。
「どうやって帰ってくるのかしら、あの子たち」
沙織の後ろにまわった平沢は、肩に腕を回した。
「何を心配してる。あの連中なら大丈夫だよ。ノブって娘は、並の超能力者じゃないんだろ」
「どうなるかしらね」
沙織は目を閉じて、平沢の腕に頭をもたせかけた。
「これから……」

ディスプレイの上に、各国の情報網から集められ、拾い出されたデータが高速で打ち出されていく。
「なに……？」
その内容のあまりの異様さに、マッキはあわてて飲みかけのコーヒーを置いた。
一九七五、カトマンズー、インド、一九六七、キブツ、イスラエル、一九六〇、カイロ、エジプト、一九五七、アルジェリア……
「そんなバカな……」
ディスプレイから目を離さず、マッキは通信回線をひらいた。
「ブルーサーチへ緊急レーザー通信だ。キーラー司令官殿を呼び出せ。暗号フィルターは三重、今の時間は直接つながるか？」

マッキはそこで一度言葉を区切った。
「衛星や地上施設の中継は入れたくない」

ACT・4　降下

「またしても揃って消えやがった」
二時限目の休み時間、朝から主人の出てこない空の机を見た南部が椅子に肘をついた。
「編集長も無断外泊して帰っていないそーな」和田がメモをめくる。「おかげで霧野さま一人でさびしーって」
「行方はわからんのか？」
「昨日の夜、厚木の米軍基地に行ったまではわかってんだけど、そっから先ぷっつり足取りが消えてる」
「MPか警察にでも捕まったんでねーの？　過激派か何か似たよーなことして」
「やっぱそー思う？」
和田はぴらぴらとメモをめくった。
「神奈川県警にあたってみたけど、そーゆー騒ぎないんだよね。おとといは何か爆発事故あったみたいだけど」

「欠席届どーする？」南部は机の中から次の授業道具を引っ張り出した。「今度は病欠ってわけにいかんぜ」

「とりあえず忌中と危篤と…もう一人は留置場にでも入ってもらう？」

「凶兆じゃ」

「あほ」

「凶兆が出ておるぞ、神は怒っておる」

「だから何じゃっちゅーんじゃ」

「ニエじゃ。ニエを捧げるっきゃない」

真田は病的な目付きで機内を見回した。

「汚れを知らぬ処女を捧げるっきゃあるまい」

沖田はちらりとつばさとノブを見た。

「無理だな。あきらめろ」

「なに？」

思わずつばさが牙をむく。口許を押さえて顔を赤くしたノブにかわって榊が沖田に飛びかかった。

「てめーどーゆー意味だ、ンのやろお！」

「この狭いとこで騒がないでよ！」

つばさが喚いた。沖田と榊がぴたっと動きを止める。
「ったく何考えてんの？」
「ヒマなの」真田がふわあくびをする。「いつまでもトロトロ飛んでんだから」
「まあ無理もない」沖田もふわあとあくびをしながらハイライトの箱を出した。「高度いいとこ六千フィートで一五〇～一六〇ノットしか出してねェんだ。あ、くそ……」
久しぶりに取り出した煙草は箱ごとつぶれていた。
「ここんとこ吸ってなかったからなあ」
「ついでに禁煙すれば？」
「いや、ここんとこをちょいと」
つぶれた箱からひっぱり出した一本のねじれを直してフィルターをちぎろうとした沖田の頭に懐中電灯が命中した。
「しみったれたことするなってーの」
「このやろー！」
沖田が懐中電灯を投げつけたつばさに飛びかかる。
「わあ、このやろ何しゃあがる！」「何しゃあがるじゃねェ、この疫病神！」
「よく飽きませんな」
真田が溜め息をついた。榊は窓の外に目をやった。
「ずーっとこのまんまだかんねえ」

夜が明けてから、ずっと海の上である。水平線の彼方まで続く濃い青の水面が太陽光を反射しており、時々薄い雲がぽっかりと浮いている。C－47は高度ほぼ二〇〇〇メートルで経済巡航速度である時速二二〇キロを保って飛んでいた。

「ろくな状況じゃないですよ」

イエローサーチの管制センターからの気象通報を衛星回線で聞いたマイクは、苦い顔で進路上の水平線を見た。

「アレキサス諸島を含む硫黄海域（サルファー・ゾーン）に熱帯性の大女が居座ってるそうです」

「大女？」

ノエルがきょとんとする。

「大型の低気圧だ。あそこはただでさえ火山の噴煙と乱気流で飛びにくいんだけれども」

言いながら、マイクは書類ケースから航空地図を取り出した。

「まぁ、そばに寄ったら気に障（さわ）らないように目一杯上昇して。着陸の時には神に祈るとしても」

燃料計と地図を見比べながら計算する。

「どこかに降りた方がいいのではないかね？」

航法装置が電子化されたために、実際には使われていない機関士席に腰を下ろした博士が言った。

「そうすれば乗り物酔いしないことは確かですがね。今から進路変更すると辿りつけるのは南洋諸島のどれか……だいたい丸一日飛んでなきゃならないようなフライトじゃ、すぐ天気が変わり

ますからねえ。どうしますか……」

メナシー島への到着予定時刻は日が暮れてからになっている。ジェット機やターボプロップなら日暮れ前どころか午前中に到着するのだが、大戦時の旧式機など使っているからこんな長時間飛行になる。

これも最近になってから追加装備された気象レーダーの範囲（レンジ）一杯に、遙か彼方でのたうっている低気圧の外縁分が入ってくる。

「んじゃ、ぼちぼち上昇（あが）するか」

エンジン出力を上げて、ゆっくり操縦桿をひく。

「あ、だめ」

突然ノエルが声をかけた。

「だめって何が？」

ノエルは備品リストから顔を上げた。

「酸素マスクもボンベも足りないわ」

「あた……」片手で頭を抱えて、マイクはC－47を水平飛行に戻した。「そうでした」

「どういうことかね？」

「フライトプランには高空飛行は入れてませんでしたからねえ、ボンベは標準しか積んでないんですよ。乗員が倍になりましたから、こりゃ足りませんわ」

「ボンベなしでも窒息するわけではあるまい？　低気圧上空をかすめるくらいの高度で飛べば

……」

「皆さん高山病でダウンしますね」マイクは博士の言葉をさえぎった。「ノエルちゃん、メナシー・コントロールに通信を入れといてくれ。あそこの手前に潜水艦用のちっぽけな補給基地があったろう、あそこに一時避難する」

「了解」

「う……おえっぷ、気持ち悪い……」

口許を押さえた真田が最後部の機内トイレに消えた。

「だから軍用機ってのは」

沖田は頭を抱えている。夜空にすさまじい光を放った雷が窓から一瞬、機内を照らし出す。わずかに遅れて、空が砕け落ちるような雷鳴がちっぽけなC－47輸送機を揺るがした。

「ひ……」

声にならない悲鳴をあげて、ノブが榊にしがみつく。ろくな顔をしていない榊はうぎゃと声をあげた。

「ツメをたてるなあ！」

「ご、ごめん、だって……キャ！」

またも稲妻がきらめく。

「ファーストクラスを予約しておくべきであった」

沖田は、乗員たちが乗っている操縦室へ顔を上げた。
「乗り物酔いの薬くらい救急セットに積んでないのか！」
ただでさえ、居住性より機能性を重視する軍用輸送機である。嵐の中での乗り心地はトラック並みにひどい。
「今忙しいんだ。自分で探せ！」
操縦室の方から声がして、救急セットのケースが床の上を滑って来た。暗い顔をしてベンチにうずくまっているつばさが足でケースを止め、のろのろと開ける。
「あるか？」
「二日酔いの薬ならあるわよ」
「いるか！」
C－47が暴風雨圏内に入ってから、もうすぐ一時間になる。また、空がひび割れたような雷が一瞬だけ浮き上がり、消えた。
「まったく……」
コンパスと回転計を交互にらみながらC－47を操るマイクは、首にかけたタオルで顔の汗をぬぐった。
「グレムリンが出るには絶好の天気だぜ」
乱気流と雨のおかげで、かなり余分なパワーをくわれている。伝説的ともいえる機体の頑丈さで知られるC－47だが、嵐の中を専門に飛ぶようには作られていない。

「あと三〇分もしないで着くはずなんだが」
マイクは対気速度計に目を走らせた。アベレージ一二〇ノットを保持しているが、それこそ秒刻みで風向きが変わるから正確な速度は推測するしかない。
せわしなく動くワイパーの向こう側では、闇の中に水滴だけが踊っている。また光った雷光に、折り重なってうごめく巨大な雲の谷間が青白く見えた。乱流に翼をとられて、機体がぐらりと揺れる。
「ユキちゃん、どっかの通信入ってこない？」
マイクは、後ろの通信士席の結希に訊いた。ヘッドホンをしている結希は首を振る。
目の前で空が裂けたように光が爆発した。
「うわあっと、しまった！」
とっさに機体を傾(バンク)けて、直撃を逃れようとするC－47の動きをあざ笑うように、細い稲妻が右翼にからみついた。
「！」
とっさに身をひいた結希の目の前で無線と気象レーダーのパネルが火を噴いた。機内灯が消えて右翼から鈍いショックが伝わる。右側第二エンジンの回転計の針がすとんと落ち、いくつかの航空計器が死んだ。
「あちゃー……ノエルちゃん、右の羽根、見える？」
「短胴(ナセル)がめくれかえっちゃってる」

エンジン近辺が黒く焦げつき、激しい風雨に抵抗して完全に停止したプロペラを見たノエルが口許に手をあてた。
「フラップや補助翼（エルロン）、大丈夫？」
「今のところは。再始動出来そうか？」
推進力の半分が失われて、操縦桿に伝わる機体の動きが一気に重くなる。全部のパネルをざっとチェックしたマイクは舌打ちした。
「電気系統が全部おしゃかになってる。翼の中の燃料タンクが空（から）になってたから、火を噴かなかっただけめっけもんか……」
「大丈夫かね？」
目に見えて速度の落ちたC－47を心配して博士が訊く。
「大丈夫、こいつは片肺でも離陸できます。第一エンジンはまだぴんぴんしてますから……ノエルちゃん、右のペラのねじり（ピッチ）、風に取られないように直しといてくれ。さてと……」
マイクは機にゆるい降下姿勢をとらせた。
「下に降りて巣を探します。滑走路灯つけてくれてるはずですから」
ワイパーまで止まった風防の上で踊る水滴が、操縦室の非常灯に照らし出されている。時折光る稲妻に、嵐のようにわきたつ雲海が見えた。
「なんだったんだ今のは……」
一連のショックで天井に頭をぶつけた真田が、よたよたとベンチシートにしがみついた。

「おーお」窓の外を見た沖田は、額に手をかざした。「エンジンが死んどるわ」
「なに!?」
びっくりして、榊が右の窓にとりついた。続いてつばさも窓を覗く。沖田は入れ違いに反対側へ動く。
「やだ、ちょっと、落ちてんじゃない?」
「着陸すんだろ」
「着水の間違いじゃなくて?」
「アホ。おー、左側は元気なもんだ」
「ちょっと、落ちる、わあ」
沖田は、左の窓からめんど臭そうにつばさを見た。
「騒ぐんじゃねェよ。飛行機ってのはエンジン一発止まったくらいで墜ちるよーには作られとらん」
「だって落ちてんじゃない!」
「降りてんの。言葉は正しく使え」
機は雲を抜けた。闇が視界に開けてくる。また光った大きな雷に、荒れる海に浮かぶいくつかのちっぽけな島のシルエットが照らし出されて消えた。
「相当降りたな」
稲妻のフラッシュに、ストップモーションのように白く砕ける波頭が見える。

「ひでェ天気だ……」
相変わらずの暴風雨の中を、C－47は悠々と片肺飛行を続けていた。標高五〇〇メートルくらいの火山島の上空にかかる。
「よっこらっと」
マイクは山腹からC－47を離した。
「山際に寄ると乱気流がかわんな。ノエルちゃん、下の島の名前わかる？」
「えーと」ノエルは飛行地図と眼下の島の形を見比べている。「ミグレトリーかマンゴー列島の一つだと思うんだけど……」
名前もついていない、記号だけで呼ばれるような島が数知れず浮いている海域である。
「計算だと、もう見えてきてもおかしくないんだがね」
マイクは燃料計に目を走らせた。電子航法装置が使えれば、とっくに誘導ビーコンをキャッチしているはずである。マイクは残存燃料から残りの飛行可能時間を暗算した。
「このそばのはずだ。――行き過ぎたかな」
マイクは機をゆるいバンクに入れて左旋回をはじめた。島中央の休火山をまわりこむ。
「この島を基点にして渦状に飛ぶ。ガス欠まで見つからなけりゃ不時着だ、がんばって探しとくれ」
C－47は島の上空で旋回して、再び荒れた洋上に進路をとった。
「迷ったな」

窓から外を見ていた沖田は、機内に目を戻した。つばさと目が合う。
「おい……」
言いかけて、やめる。
「なによ」
「いや、いい」
「言ーかけたんなら言ーなさいよ」「いらねーって言ってんだろが。おめェじゃ相談するだけムダだ」「なぁによぉ」
いらついているつばさが、いいヒマつぶしとばかりに詰め寄ってくる。沖田は額に手をあてた。
「いや、な」窓の外を顎で指す。「あそこに降りられると思うか？」
「あん？」
窓の外を見てから、つばさは沖田に横目をくれた。
「こら、何を考えとる」
「だからいらねェったろ」
沖田はちらっと操縦室の方を見た。
「あのな、パラシュート持ち出して、チャンス見てドアを開けて逃げ出そーと思うんだが」
「……正気？」
「てめェを目の前にしとると狂いたくなるがな」

「パラシュートなんかどこにあんのよ」
「前のコンピューターや通信機の下に四つ」
「人数分ないじゃない。第一、食べ物や何かは？　何もなしで漂流するつもり？」
「サバイバルキットならシートの下に詰まってる。ボートや救命胴衣（ライフ・ジャケット）もある。パラシュートは二人で一つ使えばいい。どーだ？」
「勝手にやれば」
行きかけたつばさの襟首を、沖田はぐいとつかまえた。
「このままあの基地連れてかれるのと、逃げ出すのとどっちがいい」
「……えーと」
「ついて来いなんて言わねーよ。おい榊、逃げよう」
「この飛行機を乗っ取ろーなぞと言い出さなければ賛成する」
「言い出すか。真田、ちょっと来い」
「はいな」
乱気流のために、機体がぐらりと揺れた。
「ちょっと待ってよ！」つばさが喚く。「どーやって転校生出しぬくのよ!?」
「次から次へとよく心配事思いつく女だな、おまえは。悩んでいる前に動き出せ、この！」
男三人は頭を寄せてよからぬことを企みはじめた。

「いかんなー」
なんとか生き残っている左第一エンジンの回転計(レブカウンター)をちらちら見ながら、マイクはスロットルをゆるめた。これまで連続運転してきたところへ過大な負担を強(し)いる片肺飛行である。エンジンの調子がおかしくなっても不思議はない。
「こりゃガス欠より先にエンジンが死ぬかな」
小声でつぶやく。視界に滑走路は見えてこない。
「おわ！」
いきなりふわっと体が浮いた。機体が垂直に五〇メートルばかり落ちる。
「何事だ！」
危うく天井に頭をぶつけた博士が叫んだ。
「エアポケットです」
答えるノエルの横で、マイクはあわててスロットルを開いた。エンジンの回転が今のショックでばらつきはじめた。
「や、やばい、止まる」
高度はほぼ八〇〇フィート（約二四〇メートル）、下は大時化(おおしけ)の海面である。
「止まるな、こら」
機体を左へ傾けて燃料をエンジンに跡切れずに送りこもうとする。マイクの努力もむなしく、二、三度バックファイアをおこしてエンジンが止まった。エンジンなしで滑空をはじめたC－47

の操縦室に風の音だけが伝わってくる。
「！」
結希ははっとして後ろを見た。
「な、なんだ!?」
あわててエンジンを再始動させようとしたマイクが操縦桿を押さえる。
「いきなり空気抵抗が増えたぞっ」

「早く行け！」
「行けと言われましても」
どさくさにまぎれて後部のドアハッチを開けた沖田は、真田に小型のパラシュートを手渡した。開け放したハッチから雨と風がシャワーみたいに吹きこんでくる。
「パラシュートって、着けてから飛び降りるものでは」
「うまい具合に高度も落ちてる。下は海だから死にゃしねえ」
「しかし」
「このヒモひきゃカサが開く。行けー！」
安全も確認せず、沖田はパラシュート・バッグを持った真田を押し出した。続いて機首へ逃げようとしたつばさの首根っこをつかまえる。
「何か言い残すことは？」

「バカ！　死んじゃえ！」
「んじゃ、ついでにこれも持ってってくれ」
非常食糧の段ボール箱を押しつけ、横なぐりの雨の中へ突き飛ばす。悲鳴が風にかき消された。
「あのー」
パラシュートを持った榊が恐るおそる口を開いた。
「なんだよ。早く言え」
「どーしても行かにゃならんのか」
「すぐあとから救命ボートを落とすからな」
「し、しかし、心の準備というものが……」
「行け」突き飛ばしかけた榊の腕を、沖田は一度つかみなおした。「忘れもの」
事の成り行きに対応し切れずほけっとしていたノブを押しつけ、二人まとめて外へつき飛ばす。続けて床のサバイバルキットと非常食糧、救命ボートを外へほうり出し、沖田はハッチに手をかけた。横なぐりの雨の中から、確認のため機内に振り向く。
「！」
とんで来た結希と目があった。沖田は軽く手をあげた。
「じゃあな」
空中に飛び出す。姿勢を整えてパラシュートを開くひまはなかった。あっという間に海面にぶ

つかって二、三回水面上を転がってから海の中へ飛びこむ。
「ぷは！」
水を蹴って海面上へ浮かび上がる。激しい暴風雨の中、やっとエンジンの再始動に成功したらしいC－47が頼りない排気音とともに遠ざかっていく。
奇跡的にはずれなかった眼鏡をポケットに押しこみ、沖田は抜き手をきって泳ぎ出した。
大音響とともに雷が落ちた。雷光に照らされて、意外なほど近くに島のシルエットがそびえていた。方向を確認したと思う間もなく、高い波が押し寄せてきて波の谷間に呑みこまれる。
「これじゃ、落としたもん探すどころじゃねェな」
しばらく、島に向かって波間を泳いでいるうちに、足先に柔らかいものが触れた。
「ん……？」
沖田は立ち上がった。とたんに張りつめていた気がゆるむ。
「遠浅かよ」
足のうらに海砂の感触がある。波は激しいが、水深は楽に背が立つほどだった。
時折、高い波が頭の上から降ってくる。半分は波に乗るようにして、沖田は水を吸って重くなった服のまま海岸へ海の中を歩いていった。
大粒の雨の中、ぬれて、よく締まっている砂浜へ上陸する。水から上がると同時に、沖田は前日からほとんど眠っていないことを思い出した。波打ち際から離れた所へ手放さなかったパラシュートのバッグをほうり出して空を見上げると、重い雲が、枕代わりに倒れこむ。寝返りをうっ

どんよりと渦を巻き、雨粒が顔を打った。
沖田はそのまま、海底へ引き込まれるように目を閉じた。

ACT・5　漂流

「あじー……なんでこんなに熱いんじゃ」
日除けに上着を頭にかぶった真田は、早くも東の空でギラついている太陽を見上げた。
「当然でしょ、赤道直下の南海の火山島なんだから」
裸足(はだし)で砂浜の上を歩いてきたつばさは、頭に汗どめのバンダナを巻いている。
「ふーむ。キングコングやモスラの二、三匹いてもおかしくないな」
ズボンの裾(すそ)をまくりあげて歩いて来た榊は、上着を肩にかけてついてくるノブを振り返った。
「つかれたぁ」
「文句言わないの。沖田はまだ見つからんか」
「見つかりませんな」
先頭の真田が島の内部へ続く森林へ目をやる。つばさは前日と打って変わって穏やかな海を見た。
「鮫(さめ)にでも食べられたんじゃない」

「鮫の方で願い下げると思うが」
「あ、ねえあそこあそこ、いたよ」
ノブが目敏(めざと)く手を上げた。
「おー、沖田見っけ」
沖田は、白い砂浜でパラシュートバッグを枕代わりにぐでーっと寝ていた。
「ま、このクソ暑い中でよく安らかな顔して寝とれるなあ」
「起きな。こら、起きんかこの！」
つばさに枕代わりのパラシュートバッグを蹴とばされ、沖田は眠そうな目をあけた。藍(あい)に近いような深い青空と、春の日本とは比べものにならないような強い陽光をバックにして、四人の顔が沖田を覗きこんでいる。
「お前らか……」
陽光に手をかざして四人の顔を確認した沖田は、のろのろと枕(バッグ)に手をのばした。
「あと五分……」
「だって」
榊と真田は顔を見合わせた。
「無人島漂流の元凶たる不埒(ふらちもの)者め、どうしてくれよー」
「海水でもぶっかけてやりゃいいんじゃない」
榊は、静かな南の海へ目をやった。低緯度地方特有の突き刺さるような陽光の下に、鮮やかな

エメラルドグリーンの海がおだやかに凪いでいる。
「よくこの天気で寝てられんなあ」
「るせー」沖田は薄目をあけた。「ここんとこずっと寝不足だったんだよ。妙な騒ぎばっかりやってきたから」
よっと起き上がる。
「全員無事か」
「荷物もね」
榊は、沖田の上にたたまれたままの救命ボートをほうり出した。
「知ってる？　救命ボートって、空気入れなきゃ使えないの」
「バルブつけたままほうり出したんだもんね、膨らむわけないよね」
つばさを無視して、沖田は深呼吸をして立ち上がった。
「どーせボートが必要な水深でもなかったろ。とにかくこれで……」
沖田はよっと背のびしながら全員の顔と、白い水浜、蒼い水平線を見渡した。
「久しぶりに何の気兼ねもなく羽根をのばせると、こーゆー訳だ」
つばさが天を仰ぐ。残り三人は顔を見合わせた。
「言われてみればそのとーり」「確かに」「そーね」「遊ぶか」
「あたしゃどーやって帰るのか、その点が非常に気になるんだけども」
「つくづく嫌な女だな、おまえは」

沖田がつばさを横目ににらみつけた。
「緊急信号用の通信機や信号弾くらいサバイバルキットの中にあるぜ、この規模の島なら泉や川の二つや三つ楽に見つけられるし、手持ちの非常食糧だけで少なく見積もっても……」
沖田は飛行機から落とした非常食を人数分で割ってみた。
「一週間は遊んで暮らせる」
「いっしゅうかん！」榊が歓喜の声をあげた。「この授業もテストも目覚まし時計もない島で一週間！」
真田と榊はがっちりと握手した。
「極楽じゃあ」「これをパラダイスと呼ばずして何としょお」
「男って気楽ね」
「そーゆーことなら」榊は、持っていた上着をほうり出し、腕まくりしていた制服のワイシャツを脱ぎ出した。「泳ごーぜ」
「昨日の晩に落ちたばかりだろーが」
「沖田は若くない」
真田もシャツのボタンをはずしはじめる。
「こんな南国の海を借り切りなんて、そーチャンスあるこっちゃないもんねー」
「あ、待て、こら」
波打ち際へ駆け出した二人に、沖田は声をかけた。

「この陽気でサンオイルもなしに泳いだりしたら――行っちまった。あいつら今夜寝れねェぞ」
「こら」つばさは沖田の足を蹴とばした。「この無人島のどこにサンオイルなんかあるってーの」
「熱帯じゃ、日焼けもケガになるからな。赤道あたりを航路にしてる飛行機なら、日除け止めくらいサバイバルキットの標準装備だ」
「ほんと？」
「うそ」
沖田はつまらなさそうにあたりを見回した。
「さてと……どこぞにキャンプ作らにゃならんが」

「参ります」
榊は、救命ボートのバルブにつながれているロープを勢いよく引いた。開放されたボンベが圧縮空気を吹き出し、コンパクトにたたまれていたボートがむくっと起き上がる。
「おーやったやった」
真田がぱちぱちと手をたたく。
ムボートが姿を現した。あっという間に形を整え、白い砂浜の上に小型乗用車ほどのゴ
「おーい、行くぞー！」
波打ち際へボートを押し出そうとして、榊は森の中へ声をかけた。
「はーい！」「ちょっと待っててー」

持ってるはずもないのに、水着を着てくると称し、覗くなよの台詞とともに森の中へ消えた女性陣二人から返事が返ってきた。ノブが勢いよく飛び出してくる。

「おっとォ」

いったいどんな格好で出てくるんじゃと興味津々だった男性軍の眼が釘付けになる。

サバイバルナイフで切ったパラシュートの化学繊維をワンピースの水着みたいに身につけたノブが、はにかんだように立ち止まる。続いて森から飛び出してきたつばさは、赤い布地をビキニ風に器用に巻きつけていた。白い砂の上でくるりと回ってみせる。

「どーだ♡」

「派手な奴……」

沖田が頭をかかえる。ただでさえ緊急脱出用のパラシュートのあざやかな赤の布地で、背景は深い緑と、サンゴか貝殻が砕けたような石灰質の白い砂浜である。色白のノブと小麦色のつばさのコントラストは、相当に強烈であった。

「おーきた」

思わず目のやり場に困ったりなんかする榊が沖田をこづいた。

「なんか一言どーぞ」

「――えー」

沖田は、駆けてくる二人から目をそらしてボートの縁に肘をついた。

「榊よ、早まった真似だけはするんじゃないぞ――うわっこのやろ！」

つばさが、砂浜の上のボートへダイビングしてきた。ボートの中でくるりと寝返って沖田の前に腕と顎を乗せる。

「うりうり、早く押さんか」

「あのな」

言いかけて、沖田は深い溜め息をついた。

「おい榊」「なんじゃ」「手ェ放せ」「あいよ」

うりゃあと気合を入れて、沖田は砂浜からボートを押し出した。波打ち際からうまくボートを波に乗せ、いくらも沖に出ないうちに体ごとひねってボートをひっくり返す。つばさは頭から海中にほうり出された。

「うわっはっは、ざまァ見ィ」

「ぷはあー」

髪の毛を振り乱し、つばさが浮上してきた。ぬれた髪をかき上げて沖田をにらむ。

「よーもやってくれたな、てめえ」

「きゃー、こわい」

逃げようとする沖田に、水中からジャンプしたつばさが飛びかかる。

「ま待て、お落ちつけっぷ」「このやろー！　死ねっ死ねっ、死ね！」

残された三人は、海岸から二人のどつき合いを眺めている。

「はあー……よく飽きませんなーあの二人は」

「もはや条件反射だね。こんな南の島に来てまでやることたねーと思うけど」
「気が合うんでしょ。ね、行こ」
ノブが榊の腕をひっぱる。
「んじゃ行こーぜえ、真田」
「あいよ」

熱帯樹林の中を榊がッタにつかまってターザンよろしくすっ飛んでいく。あとから真田が、器用に枝から枝へ飛んでいく。
「まるで猿だな」
「あーアあーっと!」
素っ頓狂な声をあげて、上を追い越していった二人を見送った沖田がつぶやく。山刀で道をつくりながら歩いているが、さほど密集していないため、散歩に毛がはえた程度の気楽さで歩ける。
「食いもん探しに来たんだぞ! 忘れんなよ!」
揺すられた枝に驚いたように、ぎえーっと殺されそうなしゃがれ声をあげて、極彩色の熱帯の鳥が飛んでいく。
「今、沖田何か言ってなかった?」
木というよりは岩みたいに太いブルセラの木の根元に着地した榊が、声の聞こえた方向へ振り返った。

「そのうち来るだろ」
飛び降りてきた真田が、来るべき方向を見る。案の定、森林の静寂はいくらもしないうちに破られた。
「てめえこのやろお！」
「ほらやった」
「ちょ、ちょっと先行ってるね」
二人に手を振りながら、つばさがものすごい勢いで駆けていった。あっという間に木々の陰に消えたつばさを追い、額にこぶをつくった沖田がヤシの実を抱えて出現する。
「あのバカ、どこ行きゃあがった！」
「あっち」
「今度こそ殺してやる！」
猛然とダッシュして密林に消える。
「どーする？」
榊と真田は顔を見合わせた。
「ありゃ、追っかけるの大変だぜ」
「ついてけない……」
息をきらしながら、ノブが駆けてきた。榊がうなずく。
「まあ、並の体力じゃ無理でしょー」

「わあっ、冷たい」
山腹にこんこんと湧き出ている泉に手をつけたノブが声をあげた。
「とにかく、これで飲み水の心配はなくなったわけだ」
泉のわきの火山岩にあぐらをかいて大きく息をついている沖田が言った。
「はあー、ちかれたあ……」
つばさは、岩肌でぐったり死んでいる。
「こんなとこまで一気に駆け登ってくりゃあね」
榊は、黒い玄武岩の山肌を見上げた。積層型らしい火山は、消え残った焚き火よろしく一筋の細い煙をたなびかせている。
「いい景色、ねえ」
ノブが嘆息する。すぐ足元には深緑の森林、それが切れた縁には真っ白な砂浜が広がり、遠浅の砂浜は南の海に沈んでも、海のあざやかなエメラルド色に呑みこまれるまで透き通って見えている。
岩礁や、小島らしいのが近海にいくつも見えた。遠くにも、島が連なっている。
「天国ですなあ」
真田は、海風に吹かれながら、大分傾いてきたもののまだまだ熱い太陽を見上げた。
「これでクーラーでもあると何も言うことがないんだけど」

小さなガスコンロの上で、フライパンが油の焼ける音と、肉の焼けるいい匂いをたてている。
「んー、いい匂いだ」フライパンを覗きこんだ沖田が、手をのばす。「ちょいと味見をば……あぢー！」
つばさは、のばしてきた沖田の手の上に軽くフライパンをのせた。すましてコンロにフライパンを戻す。
「出来るまで待ちなさい」
「くっそー、けち」
「おーい」
ビニールのバケツを持った真田が、焚き木を拾ってきた榊、ノブと一緒に森から出て来た。
「水汲んで来たぜー」
「さー飯だ飯だ」
夕陽はもう沈んでいた。西の空にはまだ赤い雲が残っている。
その夜は、満天の星空だった。
水平線の彼方から立ち上がった天の川が斜めに天頂を横切り、北の空へ落ちていく。日本では見られない大マゼランと小マゼラン星雲が淡いかたまりのように、水平線そばの天の川近くに漂っていた。

「よー見えるもんだなー」
真田のあまりの寝相の悪さと、沖田の歯ぎしりに耐えかねて男子用のテントから出てきた榊は、水筒片手に砂浜に出てきた。泉から汲んできた水を野戦用らしい水筒から飲む。
「――ん？」
静かな波打ち際に、小さな人影を見つけて、榊は水筒を口から離した。見覚えのある、妙に頼りない後ろ姿――
ノブが星空を見上げていた。
「何やってんだこんな時間に」
びくっとして振り向いたノブが、ほっとしたように息をつく。
「飲む？」
素足に制服のスカートをつけたノブに水筒を渡し、榊は隣に腰をおろした。
「ありがと」
キャップをあけて、一気に飲む。
「何やってたの？」
「何となく……眠れなくて」
ノブも腰をおろして水筒を榊に渡す。榊は自分も一口飲んでからキャップを締めた。そこらへんに水筒を置き、頭の後ろで手を組みながら砂浜に倒れこむ。粗い砂の感触が心地良い。
しばらく黙って夜空を見上げていたノブが榊を見た。

「ね、星空って詳しい？」
「詳しいってほどのもんじゃないけど――天の川なんて久しぶりに見たなあ」
「天の川？」
「そっちからずーっと行ってあっちまで行ってるやつ」
榊は寝っ転がったまま、宙天を横切る細かい光の雲のような帯を指差して腕を動かしてみせた。
「これがわが銀河系宇宙」
「ふうん」
ノブはゆっくりと天の川を目で追った。前に習った地学の知識と重ね合わせてみる。直径約十万光年、円盤型の渦を巻いた約一千億個の星の集団――島宇宙。
「日本あたりの空ならわかるんだけど、南半球の空なんて見るのはじめてだもんなー」
榊は、うろ覚えの知識を引っくり返してみた。南の空高く輝く四つ星を指す。
「確か、あれがかの有名な南十字星」
「わあ……」
「んでもって、その上で派手に光っている白いのがあるでしょ」
榊は、のばした手をわずかに動かした。
「あれがケンタウルス座アルファ星――俗に言うアルファ・ケンタウリってやつ」
「――って？」ノブは首を傾げた。「なんなの？」

「地球に一番近い星。太陽系に一番近い恒星だ」
「へえ、どれくらい離れているの？」
「四・三光年……だったかな」
「ふうん」
ノブはもう一度、星を見上げた。静かな波の音だけが、ゆっくりと耳に入ってくる。やがて、ノブは口を開いた。
「ねえ」
「ん？」
「ね、あそこに行ってみたいと思う？」
「あそこ？」
榊は身を起こした。ノブは上を指している。
「あそこって……宇宙（あそこ）か？」
ノブはうなずいた。榊は、少々めげたような顔で宇宙（そら）を見上げた。
「……笑うなよ。子供（ガキ）の頃、宇宙海賊になるのが夢だった」
「うちゅうかいぞくー？」
ノブは目を丸くした。榊が横目でノブを見る。
「だからガキの頃の話。超光速宇宙船で星から星へ、なんて、もうとっくにあきらめたよ」
「どうして？」ノブは笑っている。「素敵な夢じゃない」

榊は肩をすくめた。
「先が見えてきたからねえ。現代技術じゃ、超光速宇宙船なんて相当先のことになりそうだし」
「ね」
ノブは、目を閉じて榊にもたれかかった。
「今でも行きたいと思ってる？」
榊は苦笑いした。
「まあな」
ノブは小さく肩を揺すらせて、声をたてずに笑い出した。
「いいなあ……そういうのって、大好き」
榊は溜め息をつく。
「勝手に笑ってくれ」
ひざに頬杖をついて、榊は沖へ目をやった。気のせいか波が荒くなっている。
「なんじゃ……？」
榊は、夜の海へ目をこらした。海面が泡(あわ)だって、渦を巻いている。
「クジラでもいるんかいな」
浜からでもそれとわかるほど、渦が一気に大きくなった。海面が大きく持ち上がり、割れる。
「……まさか……」
顔をひきつらせる榊の横に、森の中から沖田が飛び出してきた。

「潜水艦だ！」
「せんすいかん⁉　ちょっと待て沖田、貴様なぜここにいる⁉」
「んなこた問題ではない。ありゃSCFの潜水艦だぞ」
あわてて立ち上がった榊に、沖田はまくし立てた。
「この前乗った、カサンドラとかゆー型だ！」
「何であんなのがこんな所にいるの」「もー見つかっちまったんでねーかい」
「なんでお前らまでいるんだよ⁉」
「細かいことは気にするな」
「それより逃げなくていいの？」
沖の潜水艦へ目をこらし、つばさは額に手をあてた。流線形の船体の上のスマートな司令塔から、獲物を狙うようなサーチライトの光が一直線に浜へのびる。
「キャ！」
夜にはまぶしすぎるサーチライトの照射に、ノブは思わず首をすくめた。遙か彼方に突き刺さった光は、目的のものを探すように移動をはじめる。
「に、逃げろ！」沖田はくるりとターンして駆け出した。「森の中だ！」
立て続けに二つ、新しいサーチライトに灯が入った。森の中へ走り出した五人を追うように、光が迫ってくる。

ACT・6　離脱

大型の索敵ポッドを両翼下に下げた、超高速巡航型(スーパークルーザー)らしい武骨な戦闘機が、うんざりするような超低速で滞空(ホバリング)していった。

「どうしてお前ら、そー趣味がいいんだよ！」

榊は喚(わめ)いた。木々の間の草地に、五人が集まっている。

「毎回毎回、他にやること知らねーのか!?」

「黙っとれ。集音マイクに声拾われるぞ」

沖田は榊をどやしつけて、上空を見上げた。

「まっずいなー」

梢を透(す)かしてジェットエンジンの金属音が聞こえてくる。

「この島にいるっての、完全にばれてるぜ」

「どーしよー」真田は、幹の間から沖の潜水艦をにらんでいる。「逃げてみる？」

「無駄だろーな。多勢に無勢、武器(エモノ)もないし、逃げたって時間稼ぎにしかならん」

「稼がんよりマシでないか？」
「稼いだって結局捕まるんじゃ時間と体力の無駄だよ」
「んじゃ素直に捕まる？」
沖田はつばさを見て、目をそらした。
「アホ言え。降伏したいってなら行きな、止めねェぜ」
「行くわけないでしょ！」
「しかしどうしたもんか……」
会話が跡切れた。ジェットの音が、波の音や風までかき消してやかましく大気を震わせている。
黙ってじっとしていても、赤外線センサーや対人レーダーなどで発見されるのは時間の問題である。逃げたところで、小さな無人島の中で完全な装備もなしにいつまでも逃げきれるはずがない。
やがて沖田がぽつりと言った。
「逆襲かけるっきゃねェかな？」
真田がぽんと手を打った。
「それは良い手だ」
「で、具体的にどーする？」
「あのな」

五人は額を寄せ集めた。沖田は、サーチライトを振りまわしている潜水艦を指した。
「あそこ潜り込んで、飛行機かっぱらって逃げる」
数秒の沈黙の後、真田は夜空を見上げた。
「やー榊さん、今夜は星がきれーですなー」
「いやーまったく、風も涼しいし、いい夜ですなー」
「これで酒でもあると最高なんですが」
「ありますよ。一杯いかがです」
「やーすいません、おっとっと――」
「ちょっと待て」
コップ酒のパントマイムなんかはじめた二人の首に、沖田が手をかけた。
「てめェら、何が言いたい」
「何って、その……」「色々とあるけど」
「おー、言ってみやがれ」
「ゆーだけ無駄ってわかってるから……」
「やめなさいよ、こんな所で」
つばさが三人の間に割って入った。沖田は二人を絞めあげていた手をはなす。
「てめェら、やるのかやらねェのか！」
「やらない」「出来ればやめたい」

「あたし、行く」
ノブがぼんやり立ち上がった。榊はびっくりして腕をつかむ。
「ちょっと待てバカ、何考えてんだ！」
「だって……」
ノブがすがるような目で榊を見た。
「どこまで逃げたって、結局追っかけられるんでしょ。だったら……」
「だからって自首するなんて考えるんじゃねえ！」
「ち、ちがう！」「喚くなとゆーのに」
「最後まで聞いてよ！　直接行って断ってくるんだからあ」
「だめだこりゃ」沖田は目に手を当てた。「そら、おっしゃる通りでござんすけどね」
「月で司令官の親玉に面と向かって断ったろーがよ！　おい沖田、そのムチャクチャな作戦いってみよう」
「ムチャクチャでわるーござんしたね」
沖田は立ち上がった。
「えーと、飛行機から落としたキットの中に信号弾とか大工道具が入ってる箱があったな」
真田が、キャンプを作った方向に目をやる。
「確か、ボートの中にほうり込んどいたと思ったけど」
「上陸部隊が出てくる前に海に出たい。んじゃ、行きましょーぜ」

沖田は、森の中を動き出した。一応物音をたてないように注意しながらキャンプの方へ戻る。
真田があとを追い、続いてつばさが行った。
「ほれ、先行け」
榊に押されて、ノブは腰を上げた。行こうとするところを、もう一度腕をつかまれて止められる。振り向いたノブの顔を、榊が覗きこむ。
「二度と一人で行くなんて言い出したら、承知しないぞ」
「――はい！」
ノブは草をかきわけて歩き出した。少し先で待っていたつばさがノブの頭を軽くこづく。
「うらやましいわね」
「うん」

「まだ見つからぬか」
SCF太平洋艦隊潜水艦カサンドラの艦長オルコット大佐は、いらいらしながら戦闘情報室のディスプレイを見ていた。
南極大陸の氷山がそろそろ流れてくるかという南太平洋からイエローサーチへ帰還してきたカサンドラは、入港前夜になって艦隊司令部から緊急指令を受け取った。曰く――ミグレトリー諸島近辺に降下したと思われる日本の高校生五人を捜索、収容せよ。
アレキサス諸島の近海で対地索敵用の装備と、さらに詳しいデータ――分析によれば五人はミ

グレトリー諸島、コードSRX－6という名もない無人島へ上陸したものと思われる――を受け取り、カサンドラは目的の海域へ急行した。

入港が遅れるだけならともかく、収容を指示された五人の高校生というのが去年、他ならぬカサンドラがイエローサーチまで運び、しかも月から脱出してきた有名人である、と知らされた艦長は、頭痛を覚えながらディスプレイをにらんでいた。

「まあ、今回はあの探偵が無関係らしい、というのが不幸中の幸いだが……」

急なことで、イエローサーチでも機材の手配が間に合わなかったらしい。空中戦が専門の高速戦闘機FR－25Cニンフェットと、一機だけ稼働可能だった連絡用のヘリ、ツタンカーメンに三機分の索敵ポッドをくくりつけて出動させた。

「そろそろ半分は走査し終えるはずだぞ。――この島の地図はないのか？」

「衛星写真をラフ処理したものだけです」

オペレーターが、島の粗い地図を艦長の前に転写した。衛星高度からの写真をコンピューターで簡単に処理しただけのもので、地形とごく大ざっぱな植生区分くらいのデータしかない。

「洞窟にでも逃げ込まれれば、空からでは探し出せんな」

「ニンフェット・ベータが見つけました！」

壁面を占領している大型モニターの一つに、粒子の粗い赤外線映像が出た。木々の梢の間に、にわか作りのテントと焚き火のあとらしいものが見える。

「連中の姿が見えんではないか」

『近くにいるものと思われますが』
ニンフェットのナビゲーターが応えた。
『付近を重点的に捜索します』
「しらみつぶしに探せ。こちらも要員を上陸させる」
艦長は、メインブリッジに回線をつないだ。
「上陸をはじめろ。上陸要員に出動命令を出せ」
『了解、上陸を開始します』

「あいかーらず、バカみてーにでっけェ」
洋上から超大型原潜のシルエットを見た沖田はつぶやいた。
「前に乗ったやつと同じ型だ……ひょっとして同じ船かな」
「だといいね」静かになるべく波をたてないようにオールを漕いでいる真田が言った。「構造、覚えてる？」
「全部うろついた訳じゃねェが……」
遠目にも、司令塔後部の航空甲板が開かれて、イルミネーションの光でシルエットを形作っているのがわかる。
「ま、とりあえずあそこらへんに上がって……ん？」
沖田は、見当違いな方向にサーチライトを放っている潜水艦のシルエットに目をこらした。

「あ、まずい。出てきやがった」
デッキから海面へ、エンジン付きらしいゴムボートがいくつか落とされた。続いて、小さな人影がいくつも降りてくる。
「どーする？」
「予定通り行くよ。ボート捨てよう」
沖田は、信号弾他のキットが入っているパックをボートから海へ落とした。完全防水仕様だからぷかぷか浮いている。
榊は、一つだけあった救命胴衣をそのまま膨らませた。
「んじゃ、行きます？」
「行ってみよー。船の向こう側にまわりこんでから乗り込むぞ」
沖田は水に入った。パックに手をかけてゆっくり泳ぎ出す。榊と真田は平泳ぎで、ノブとつばさは浮輪代わりの救命胴衣につかまって後を追った。漕ぎ手を失ったボートが背後で流れていく。
「艦長！」
上陸部隊と連絡をとっていたオペレーターが顔を上げた。
「上陸部隊が、本艦より五〇〇メートルの洋上でC－47のものと思われる無人の救命ボートを発見しました」

「洋上でだと？　漂っていたのか？」
「オールは一つもないそうです」
「なるほど」
艦長は、ディスプレイ上の島の地図へ目をおとした。
「ボートを流したのなら、島から出ているはずはないな」

「妙に警備が手薄だな」
艦隊をはさんで島の反対側にまわった沖田は、海面上から甲板を見上げた。後部フライトデッキは、夜間離発着のため煌々と照明をつけている。例によって船体を最低必要深度にまでしか浮上させずにフライトデッキを開いているため、海面からはさほど高くない。
「そりゃそーでしょー」
榊が沖田の横に浮かび上がってきた。
「無人島近海じゃ警備する必要もないし、逆に乗り込まれるなんて普通考えないもんねー」
「上がるんなら早く行こーぜ」
艦首からまわってきた真田がいう。
「女性軍は？」
「そこらへんにおらんか？」
沖田が立ち泳ぎのままあたりを見まわした。

「昼間の調子では、お二人ともにあまり泳ぎは上手でない様子……」
「お、来たきた。何ちんたらしてんだよ！」
「速すぎんのよ！」
救命胴衣をビート板代わりに二人がかりで泳いできたつばさとノブは、息をきらしている。
「少しくらいあわせなさい！」
「知るか。上がるぞ」
沖田は、海面下からなめらかにつながっている舷側に手をかけた。船体の両側の斜め上に向かって大きく開いている、フライトデッキを覆っていた巨大な耐圧ハッチの下へもぐりこむ。
「受け取れー」
榊と真田が協力して持ち上げたサバイバルパックを沖田が引き上げた。耐水テープを剝がして開く。
「こんなもんか……」
海面から上がってきたつばさとノブをほうっておいて、男どもは中の道具の分担をはじめた。
組み立て式のオノを組み上げた沖田が、信号弾用のピストルをとる。
「あとは発煙筒とロープと……」
「大して量ないんだから、使えるもん全部持っていこーぜ」
榊が、これも組み立て式のシャベルと一緒に、こまごましたものを付属の麻袋の中にほうり込んだ。

「真田は何使うの？」
「拙者にはこれがござる」
真田は、ボートから背負って来たオールを握った。
「んじゃ行くか」
空になったパックを海面へ滑らせて、沖田は舷側からフライトデッキに顔を出した。
「あ、ちょーどいーのがある」
横から、榊がフライトデッキのはじに駐機している、武骨な感じの戦闘機を指した。島上空を飛んでいったのと同じ型で、電源用やら何やらのコードやチューブを甲板上からひきずっている。作業員はそのまわりにちょぼちょぼいるだけで、それも大部分は島側へ集まっていた。
「あれ、かっぱらおー」
「複座の戦闘機かっぱらって、どーやって五人で逃げるんだよ」
沖田は、夜の海面上でこだけ昼間のように明るいフライトデッキを見渡した。現在位置よりやや船体後部、フライトデッキのほぼ中央に、飛行機の昇降用らしい巨大なエレベーターがクレーンの下に二基ならんで設置されている。うち一基は下の格納甲板へ降りているらしく、フライトデッキの端に巨大な長方形の穴をぽっかりと開けていた。他にフライトデッキ上にある航空機はない。
「あそこ行こう、あそこ」
「あそこって、あの穴？」

「他にあるか、行くぞ」
タイミングも何もなしにフライトデッキの上にあがった沖田は、身を低くしてひょこひょこ走り出した。
「うわ、なんと無謀な」
榊がフライトデッキに飛び上がった。着艦ポイントやらタキシング用らしいマーキングや埋め込み式のライトの上を走る。
アヒルよろしく、待避所もないフライトデッキの上をぞろぞろと駆け抜ける。整備員や監視員に発見されなかったのは幸運としかいいようがない。とりあえず無事に航空機用の巨大なエレベーターまで辿りついた沖田は、フライトデッキから格納庫を覗きこんだ。
「ひええ」
格納甲板は二段になっていた。エレベーターは最下段まで降りており、AV－8Bハリアー２らしい単座機がスポットを浴びて載っている。すぐ下の格納甲板には、CCVの無人戦闘機のような高機動型ミサイルやビーム兵器らしいポッドなどの機外兵装と一緒に、見覚えのある艦載戦闘機群がぎっしり固定されている。
「どれにする？」
榊が格納甲板を覗きこんだ。余分なスペースのない潜水艦らしく、格納甲板の高さは垂直翼ぎりぎりしかない。
「戦闘機盗んだってしょーがねェんだよ、この際」

沖田は、舷側側の配管だらけの内壁に作り付けられているパイプの梯子(はしご)に手をかけた。
「大丈夫かな……」
格納甲板内には、見える限り人影はない。遠くからなら、これだけごちゃごちゃしていれば何だかわかるまいと腹を決めて、沖田は艦載機と機体だらけの格納甲板へするすると降りはじめた。

天井からの照明に、淡いネイビー・ブルーの塗装の航空機がたたんだ翼を触れあわんばかりにしていくつも照らされている。
「さて」沖田は、単座や複座の戦闘機群を見て頭の後ろをかいた。「どーしたもんだろかね」
つばさは、フライトデッキから梯子のステップに足をかけた。
「何やっ(ホワッ)てん(ファー)だ(ユ)?」
「え?」
いきなり訳のわからない言葉で話しかけられたつばさは、反射的に顔を上げた。赤ら顔の白人の巨漢と目があう。
「どこのセクション(ホワッチュアセクション)だい?」
「えー、あーと、あいきゃんのっとすぴーくいんぐりっしゅ、はは」
乏しいボキャブラリーの中からなんとか例文を絞り出したつばさは、ひきつった笑いを浮かべた。

「ぴーすぴーす、ざわーるどいずわん……み、見つかっちゃったあ！」
「なに？」
沖田はあわててエレベーターの上を見上げた。すぐに降りようとして慌てたつばさがステップから足を踏みはずす。
「きゃあー」「うわ！」「ひ……」
とっさに格納甲板へ飛びついていたノブと榊を巻き込んでつばさが落ちていった。三人でからまったまま第一格納甲板の沖田の目の前を過ぎて下の階まで落下する。
「あちゃ……おーい、生きとるか！」
重い衝突音を首をすくめて聞いた真田が、恐るおそる階下を覗きこむ。
「死んだ……」
榊は遙か階下で女性二人の下敷きになっている。
「おい早く行け！」
上で何か喚き出した甲板要員を見上げた沖田は、真田を梯子へ突きとばした。
「わっ、こら何をする！」
真田はびっくりして梯子に抱きつく。
「早く降りろ、ばれたらしい」

「所属不明の五人組？」
戦闘情報室に突然まぎれこんできたフライトデッキからの訳のわからない報告に、オペレーターは聞き返した。
「なんですかそれは？　――はあ、第二格納甲板（セカンドハンガーデッキ）にまぎれこんだ？」
「何かね、いったい？」
爆発をじっとこらえているオルコット艦長がオペレーターをにらむ。ちらっと艦長を見たオペレーターは、ヘッドホンに手をあてて、ディスプレイを読み取るふりをした。
「フライトデッキから格納甲板（ハンガーデッキ）へ、所属不明の五人組がもぐりこんだそうですが」
「どこかのセクションの連中がサボっているんだろう――待て、五人だと？　第二格納甲板へ回線をまわせ！」
艦長はインカムにかみついた。
「至急第二格納甲板をブロックごと閉鎖しろ！　保安要員を急行させろ、例の高校生どもがもぐりこんだかもしれん！」

「んで、どーする」
榊が、腰をさすりながら立ち上がった。
「ふむ……」沖田は、榊の耳に口を近づけた。「どっちが重かった？　あた！」
予告もなしに、つばさに後ろからはたかれる。

「つまんねーこと訊くんじゃねえ！」
「――もとはといえばてめェが見つかったんだろが！」
「痴話ゲンカは後にして、本当にどーすんのさ」
榊は二つ目の格納甲板を見渡した。上よりも、さらに化け物じみた艦載機や外部兵装らしいものの、分解整備中らしい戦闘機などが工場のような照明の下に詰めこまれている。
「ろくなのがねェんだよな」
ツタンカーメン級のヘリコプターの操縦は、前にコクピットを見て以来、あきらめている。沖田は、セスナに毛が生えた程度の連絡用の軽飛行機を期待していたのだが、そんな適当なものはない。
「ろくなのがねーで済むと思っとんのか、こら」真田が沖田をこづく。「言い出したのはおぬしだぞ」
「そりゃそーですがね、ウルトラホークやマットアローの操縦なんぞ俺は知らん」
対地攻撃機改造らしい対空ミサイル母機や高々度哨戒機らしい戦闘用の機体ばかりで、おだやかな汎用の機体は見当たらない。
「目当てのがない？　ならば、逃げた方がいーんでないですかい？」
真田は、艦尾方向にあるドアを指した。ゆっくり閉まりはじめている。
「閉じっ込められちゃうぜ」
「それがわかっててなぜ黙っとったあ！」

「いや、逃げ途なら上にあいてるから」
真田は、ハリアーを載せたまま動いていないエレベーターを指した。
「あ、そーだった」
「上から逃げるんだろ」エレベーターに乗った榊は、するする梯子を登りはじめた。「先行ってるぞ」

「整備ブロックから抜けた!?」
オルコット艦長は、連絡してきた保安要員に思わず怒鳴り返した。
「早く取り押さえんか！」
「あ、あの、艦長……」
戦闘機と通信していたオペレーターがおずおずと声をかける。
「ニンフェット・デルタがパラシュートらしいものを発見したそうですが――」
「呼び戻せ！」
艦長はキーボードに手を振り下ろした。ショートした火花を散らして、細かい部品が吹っ飛ぶ。
「出撃中の全機と上陸部隊を呼び戻せ！　まだわからんのか、あの高校生どもは向こうからこの船に飛びこんできたんだ！」

駐機中の翼の下を抜けて、とりあえず第一格納甲板から通路に出た一同は、うろ覚えの方向音痴と必ず裏目に出る野性のカンに加え、何も考えずに進もうとするつばさと、自分は正確だと信じる沖田、方向感覚は確かなのだが、それが構造と一致しない真田といった才能によって、船内をうろついていた。

「ここらへんはどこであろー？」

「司令塔の真下あたりのはずだが……」

区画ごとに取り付けられている監視（モニター）ユニットを気にしながら、沖田は暗い通路を見透かした。本来の照明は消えており、非常灯のような暗いライトだけが点々と続いている。

「場所だけわかってもしょーがないんだよね。どこ行く？」

榊は不安気に付近へ目をやっている。

「さて、どこへ行ったもんかねー」

「ねえ！」

つばさが声をあげた。沖田にぱっと指鉄砲を向ける。

「司令室行って、この船乗っ取っちゃおー」

沖田は頭を抱えた。

「素晴らしい。おまえもたまには建設的なこと言えるんだ」

「何よ……何か言いたいことあんの？」

「べつに。で、艦橋（ブリッジ）と戦闘情報室（C・I・C）と艦載機指揮所（ファイターダー）、どこになぐり込む？」

「ブリッジと……CIA……何それ？」
「他にもコンピューター室とか原子炉とか、いろいろあるが」
「どこがいいのよ」
「どこやっても似たよーなもんだ」
「じゃ、一番近いとこ」
「あのな……」沖田は頭痛を感じて、通路の隔壁にもたれかかった。「こーゆーバカでかい船の場合、一カ所おさえたくらいじゃ乗っ取り（シージャック）できないの！」
「なら、はじめっからそー言やいーじゃない！」
「あ！」
小さく声をあげて、ノブは後ろを向いた。と、いきなり通路の照明が全部点灯する。
「わ、なんだなんだ」「来たぁ！」
後ろから、軽機関銃（サブマシンガン）やら軍用ライフルやらを抱えた一団が出現する。
「に逃げろ！」「逃げろって、どこへ!?」「知るか！」
五人は駆け出した。艦内放送のスイッチが入り、日本語が各所の通話ユニットのスピーカーから流れ出す。
『そこの五人、逃げても無駄です。降伏して素直に捕まりなさい』
「誰が捕まるか！」
榊は艦内放送に喚き返した。返事をするはずがない。

『生命の保証はします。降伏しなさい』
「うるせっての。――あ、そーだ」
榊は、スピードをあげて沖田に追いついた。
「沖田、核ミサイル乗っ取ろう」
「核ミサイル？　あんなもん何に使うんだ。誰にも乗れんぞ」
「自爆するぞーっておどかすの」
「なるほど。おし、それ行こう」
つばさが追いついてくる。
「場所わかるの？」
「前の方にミサイル発射用のサイロみたいのがあった――うわ！」
通路の突き当たりに、これもピストルやらライフルを構えた一団が出てきた。
「んなろー！」
感嘆射撃の間もあたえず、背からオノをひきぬいた沖田が飛びかかる。とっさに警備兵が持ち換えて受け止めたM16ライフルを機関部ごとひん曲げて、続く横なぎで二人目の手からM10（サブマシンガン）をはじきとばす。
「やーやー我こそはあ！」
景気づけに喚きながら真田がオールを振りかざして突っ込んだ。二人目のみぞおちにくらわせ、四人目は振りまわしたが間に合わずに足を払って転ばせる。

「アーメン」
フルスイングした榊のショベルに、転んだ四人目がもろにジャストミートする。
後ずさりしながらウージーを乱射した五人目を、沖田と真田が両側から同時攻撃して黙らせた。
「やーうまいうまい」手をたたきながらつばさが走っていく。「その調子で後ろのもお願いねー」
「余分なのまで相手してられるか！」

「Dブロック突破されました。Cブロックに入ります」
「そんなことは報告されんでもわかっとる！」
オルコットは、目の前のディスプレイに表示された船体の拡大構造図をぶるぶる震えながらにらみつけていた。
五人分の輝点が、ひょこひょこと動きまわりながら艦首へ移動している。船内各所にある監視ユニットからの映像も戦闘情報室には来ているが、オルコットには頭痛のネタにしかならない。
「少尉！」
艦長は艦内放送（インターコム）パネルのオペレーターを呼んだ。
「手空きの乗組員全員に呼集をかけて連中を追わせろ。あいつらをほうっておくと、ひどいことになるぞ」

「なんか人数増えてない？」
真田は、走る片手間にちら後ろを見ている。
「気のせいだ気のせい」
気休めに答えながら、沖田も追う人数が増えてきているのを実感していた。
「目的地はまだかあ！」
榊は喚いた。ノブは榊に手をひかれてよたよた走っており、つばさも走りながら喋る余裕はないらしい。
「知るか！　あー！」
沖田は急ブレーキで立ち止まった。進路前方に火器を持った乗組員が大挙して出現する。
「やっぱ……」真田がたたらを踏んで立ち止まった。「どーするよ沖田」
「ダクトの中逃げよう」
榊は通路の天井近くに口を開けている通気口を見上げていた。
「この船のは人が動きまわれるほど大きくねェんだ」
「じゃどーすんだよ」
前からも後ろからも、乗組員たちが迫ってくる。沖田はオノの柄を握りなおした。
「強行突破しかねェだろな」
その時、軽やかな電子チャイムの音とともに目の前の部屋の分厚い自動ドアが開いた。エレベーターらしい。ドアの横でキーボードとパネルが点滅している。

「潜水艦にエレベーター？　――しめた、飛び込め！」
びっくりして立ちすくんでいたエレベーターの女性乗組員を突きとばし、沖田は中へ飛び込んだ。榊がノブをひっぱり込む。警備兵たちが殺到してくる。沖田は閉（クローズ）のボタンを押した。
「わ、置いてくな！」「裏切りもの！」
真田に続いてつばさが、閉まりかかったドアから身を横にして滑り込んできた。
「殺す気？」「ああ、殺したい」
行き先のボタンをパネル上に押そうとして沖田ははたと困った。壁に突きとばされたファイルを抱いてて、ひきつっている女性乗組員に振り向き、早口の英語で訊く。
「前部のＳＬＢＭ発射サイロは？」
「ＳＬＯＦのサイロならＢ－４ですが……」
「ありがと」
とっさに、しどろもどろに答えた乗組員に手を上げて、沖田はパネルのタッチセンサーに指を触れた。エレベーターが動き出す。
「ナンバー８のエレベーターに乗っただと⁉」
艦長はインカムに喚いた。オペレーターに指示をとばす。
「至急こちらから電源をカットしろ！」
「今配電室に人をまわしています」

今から行って間に合うはずがない。
「エレベーターが止まりました」
別のオペレーターが告げた。艦長のディスプレイにも示されている。
「フロアー4、至急保安要員を回します。――CブロックからBブロックへ入りました！」
「Bブロック？」
艦長はディスプレイから顔を上げた。
「SLOFのサイロがありません！」
オペレーターがデータを転送してくる。艦長は頭を振った。
「いったい何を考えとるのだ。あの連中は!?」

短い加重感の後、数階層分降下したエレベーターが停止した。
「じゃまして悪かった」
女性乗組員に愛想笑いなど浮かべて、沖田は通路に出た。
「えーと、どっち行くんだっけ……」
「前行くんだろ」真田はすぐに走り出した。「艦首はこっちだぜ」
「うわあ」
出てきた榊が声をあげる。通路の一方から数名の乗組員が出てきた。
「どっちみちあっちしかねェか。行くぞ！」沖田は走り出した。「いいか、SLBMの発射サイ

ロだ！」
角を曲がりながら、沖田はさきほどの女性乗組員の言葉を思い出して首をひねった。
「SLOF？——潜水艦発射弾道ミサイルじゃないのか？」
艦体の中央部とくらべて、通路の様相が変わってきている。メカむき出しのせまくるしい通路が入り組んでいて、現在位置などとっくにわからなくなっている。
先頭の真田がT字路に出た。その場で足踏みして回りながら喚く。
「どっち行くんだ!?」
「右行け右！」
真田がぴゅーっとダッシュしていく——なり、Uターンして反対側へ駆け抜けた。続いてT字路に入った榊とノブは、ためらいもせずに左へ行く。
「そっちじゃないってのに！　——わあ！」
後を追ったつばさに続き、沖田も左へ急カーブを切った。右側から棍棒や突撃ライフルを持った一群が、学生を追いかけてどーっと駆けていく。
「この先行き止まりだぞ」
先頭の真田がゆるいカーブの先から喚いた。立ち止まっていた四人に沖田が追突する。
「行き止まりって……」
沖田は、むき出しのライトが続いている通路の先を見透かした。保守点検用らしいパネルや配電盤、操作盤があるくらいで、使い古しのボンベや壊れた電子部品らしいものがネットをかけら

れて申し訳程度に固定されている。
「来る！」
来た方向に首を出したつばさが声をあげた。
「え、えーと逃げ道は……」「こっちだ！」
榊は、目の前にあった耐圧ハッチに手をかけた。大仕掛けなレバーを倒すと、ドアごと開く。
「早く！」「わ、ちょっと待って」
厚さ三〇センチもありそうな隔壁を乗り越えて、そこがどこかも確かめずに次々と飛び込んでくる。最後の真田が入り、榊は分厚いドアを沖田と二人掛かりで閉めにかかった。
ハッチが閉まる。分厚いハッチ越しに殺到してくる警備兵たちの気配を感じながらレバーを戻した榊は、つっかえ棒代わりにレバーのホルダーに分解したショベルの柄を突っこんだ。沖田は隔壁についていた自動開閉用の10（テン）キーボードをオノでたたきこわす。
榊はふうと息をついた。
「まずは一段落」沖田があたり見回す。「で、ここ、どこだ？」
「ＳＬＯＦの発射サイロ、ナンバー４に入られました！」
「つくづく行きあたり（アトラ）ばっ（ンダ）たり（ム）な行動をとる奴らだな。自ら袋のネズミになりにいくとは」
艦長は、ディスプレイに発射サイロ付近の構造を拡大投影した。
「――待て、ナンバー４にはまだ未使用のＳＬＯＦがあるはずだが？」

言われたオペレーターは、キーボードを操作してデータを呼び出した。
「ラーナⅢ型のオービタル・ファイターがありますが」
「待機状態は？」
「――A級待機（スタンバイ）です！」
「なんだと!?」
艦長は、思わず指揮シートから腰を浮かせた。
「すぐに発射サイロへ人員を集中しろ！　ハッチをこじ開けてでも、奴らをひきずり出せ！」

「何なんだこれは……」
一同は、焼け焦げた耐熱タイルで囲まれた発射サイロの中に立つ、飛行機とミサイルを合わせたようなロケットを見上げていた。
「ま、確かに地球上に仮想敵国もないのに、ＳＬＢＭみたいな戦略兵器は必要ないわなあ」
沖田は溜め息をついた。
普通の戦略潜水艦なら核ミサイルがあるべき発射サイロである。普通よりはかなり太いサイズのサイロに立っているのはミサイルではない。垂直に立った高揚力飛翔体（リフティングボディ）の戦闘機らしいものが、自分のサイズより大きな大推力のブースターユニットを抱えている――らしいのだが、実物はまるで巨大な白いドラム缶にとまったセミの化け物である。
「何なんだ、これは」

榊が訊く。沖田は首を振った。
「知るか。スペースシャトルと似たようなシステムらしいけど」
ドラム缶の両側に、固体燃料ロケットらしいブースターが二つずつ接続されている。機体にくらべてバカでかいブースタータンクが見かけ通りの容量を持っているとすれば、機体を衛星軌道あたりまで持ち上げることは造作もあるまい。
サイロの上の方にあったもう一つのハッチをぶち壊してきた真田が、内壁の配管を伝って降りてきた。
「沖田、これ飛べる？」
「これ？　そりゃ推力だけはあり余っていそーだから、燃料さえ入ってりゃ飛ぶだろーけど……」
「五人くらいなら乗れそうだぜ」
「なんてこと考えるんだ」
言いながら、沖田は天井に向いたリフティングボディの天井に開いたハッチからサイロ最下部までのびている昇降用梯子（ボーディング・ラダー）に手をかけた。
主翼はない。胴体それ自体が揚力を発生するように設計された機体は、紡錘形を半分に割って後部にエンジン用の膨らみを追加したようなグロテスクな流線形をしている。後部にささやかな双垂直尾翼と尾部に上反角を持った水平尾翼があり、簡単な認識番号がシールされている。国籍マーク及びそれに類するものは一切ない。

沖田は、装甲セラミックでぎっしりと覆われた機体へ足を入れた。内側の二重ハッチを抜け、垂直に切り立ったままの機内へ入る。外から想像していたより、キャビンは広い。基本的に黒でまとめられた内装が、前に乗ったCHC73ワルキューレ型シャトルを思わせる。

天井の計器パネルの間に付けられた取っ手を伝い、沖田は一番上に二つ並んで天を向いた操縦席らしいシートにもぐりこんだ。前面に分厚い曲面ガラスが大きく開いており、腹に抱えたブースターのすぐ先に丸く照明の並んだミサイルハッチが見える。

「えーと、これが操縦桿（スティック）でこれがスロットルで、フットバーは――と、あった」

目の前にはディスプレイやらデジタル表示やらが並んでおり、計器らしい計器というのは黒眼をむいている姿勢計と、どこかのジェット機から拝借してきたような気圧高度計、対気速度計、それにこれだけは生きて動いている時計だけであった。

沖田は、正副操縦席の間のパネルの主電源スイッチを入れてみた。サブスイッチを全部オンにする。キャビンをぎっしり埋めている計器が次々に甦る。

「どんなんだー？」

機の天井、沖田からは頭の下のハッチから榊が首を出した。

「すげェ機体だ」

沖田は、自分で勝手に飛行前点検（プリフライト・チェック）をはじめたディスプレイを見ながらうなっていた。サブディスプレイの上を、エンジン系統や機体コントロールシステム、航空電子システムなどのチェック項目がずらーっと流れていく。

「ラーナⅢのメインスイッチが入りました」
「まさか素人には飛ばせんとは思うが……」
SLOFこと、潜水艦発射型軌道戦闘機は今年になってから実戦テスト用に配備された新兵器である。ブルーサーチやルナベースによる高々度衛星軌道でのUFO迎撃が間に合わない場合に、待機中の潜水艦から宇宙戦闘機を打ち上げて低高度衛星軌道で迎撃しようという戦術思想で開発された。
システムそのものは既存のもの組み合わせである。機体はSCF現用の中でも古参に近く、旧式化しているわりには翼付き飛行機並みの素直な操縦特性で好評のラーナⅡ型シャトルを大幅改造、ブースターパックは前からあった艦対軌道多弾頭ミサイル・ファクションに固型ロケットブースター四基を追加したものである。
ところが、この寄せ集めのブースターに予定重量をオーバーしたシャトルの組み合わせがたたってか、第三宇宙速度に達するはずの最高速度がどうやっても第二宇宙速度のはるか手前までしか出ない。とりあえずカサンドラと、大西洋艦隊のアンドロメダに配備されてテスト中だが、ろくなテスト結果は上がっていなかった。
「出動した機は全機帰還したか？」
『今ニンフェット・デルタが着艦しました』
司令塔の艦載機指揮所から返事が戻ってくる。艦長はさらに訊いた。

「全機を格納甲板へおろすのにどれくらいかかる？」
『はあ？　三分あれば何とか』
「すぐにはじめろ。そちらの作業が終わり次第潜航する」
艦長はインカムを切り替えた。
「全艦潜航用意。潜航後、最速巡航で基地に帰投する」

全艦に、潜水開始予告のサイレンが鳴りはじめた。
「やばいですよこれは……」
ハッチから首を出してサイレンを聞いた真田がひっこむ。
「潜るらしいぜ。飛ばすんなら早い方が――」
「うるせェ」
コクピットのコンソール相手に空向いたまま悪戦苦闘している沖田が喚き返す。
「早いとこ全員乗せてハッチを閉めろ。いつ何で動き出すかわからんぞ」
「乗れってさー」
真田はハッチから首を出して、下へ降りていた榊と女性二人に喚いた。機内に引っ込み、せまいキャビンを見回す。
「けど、どこに五人も乗るんだ？　シート三つしかないぜ」
すでにその一つは沖田が占領している。

「つまらんこと気にしてないでこっち来い。えーと、弾道軌道で北へ飛べればいいんだが……」
「弾道軌道？」
「斜め上に地球から飛び出して、勢いついたら落ちてくの。三角航法だの大圏コースだのやるよりは目的地じかに見れる分確実だとは思うんだが――」
沖田は、月から帰ってきた時、大気圏突入のあと成層圏から見た日本列島を思い出してぞっとした。今度は、自分たちの手でシャトルを操縦しなければならない。
「飛べそうかい？」
上から上がってきた榊が機内に入ってきた。
「燃料（ガス）は満タンらしいが……」
ディスプレイ上を流れていく文字がやっと止まった。沖田はディスプレイに目をおとした。リストの最後に、全系統異常無し（オール・コンディション・グリーン）の文字が出ている。
「飛べることは飛べるらしいな」
沖田は、指示を待って沈黙しているパネル類に目をやった。
「問題はどーやって飛ばすか、だ」
「ラーナⅢがプリフライトチェックを完了しました」
「飛行甲板の方はまだ作業が終わらんのか」
艦長はいらいらしながらパネルを指でたたいている。

「ロケット機というのはまったくコントロールしにくいものだ」
これがジェット機やプロペラ機なら、エンジンを動かさない限り外部電源を使うため、外部からの電源カットは簡単にできる。ところがエンジンに発電機(ジェネレーター)を付加しないロケット機の場合、内部電源に強力な燃料電池を備えているため、外部から電源をカットするわけにはいかない。
「どこか故障でもしてくれるとありがたいのだがな」
艦長はラーナⅢの状況をモニターしているオペレーターに顔を向けた。
オペレーターは申し訳なさそうに目をそらす。
Ⅱ型にくらべて別物といえるほどの電子機器(アビオニクス)を詰めこんだためか、ラーナⅢの航空電子機器はしょっちゅう故障をおこしていた。本来なら南極圏からの帰途で打ち上げられているはずのラーナⅢがまだ発射サイロにおさまっているのも、電子航法装置に不調が続いたためである。それが、今回に限ってうんざりするほど調子がいい。

つばさがキャビンに滑り込んできた。ただでさえせまい定員三人のコクピットが五人で一杯になる。榊は腕をのばして外側のハッチを閉めにかかった。
「息、詰まりそ」
自他ともに認める機械オンチのノブは、水平飛行に入れば壁になるはずの床に立って辺りを見回した。一昔前のジェット旅客機や戦闘機にくらべればずっと簡単なのだが、素人目には圧倒されそうな複雑怪奇な計器パネルやコンソールが、壁といわず天井といわずキャビンを埋め尽くし

ている。

とりあえず、計器の表示を頼りにパネルの構成を読み取りにかかっていた沖田は、一通り見てからまたディスプレイを見た。

「どーもわからんなー、どーやって発進させるんだ？　えーと、燃料(フュエル)バルブを開けて点火装置(イグナイター)入れるのか――ん？」

沖田は、ディスプレイの最後の行でインプットを待つように点滅しているスペース・バーを見つめた。

「イグナイター・オン」

ゆっくりと言ってみる。バーは、発声に反応するような動きを見せて、すぐもとの位置に戻った。沖田はひょーっと口笛を吹いた。

「たまげたねこりゃ。音声(ボイス)コントロールでも使ってるんだ。おい、そこらへんにマイクないか探せ」

副(コ)・パイロット／ガンナー・シートの真田に言って、沖田はそこらへんを探しはじめた。

「いけそ？」

編集部でワープロを使っているというのを口実にしてつばさにナビゲーター・シートをとられた榊が、パネルの間から空を向いて座っている沖田と真田の間に顔を出した。

「なんとかなりそーだ。うまくコンピューターだまくらかせば」

飛行甲板上に最後まで残っていた艦載戦闘機ニンフェットが、数名の作業員とともにエレベーターで格納甲板へ沈んでいった。飛行甲板を覆う巨大な耐圧ハッチが、艦体の両側から持ち上がってゆっくりと閉じていく。

「機関室が、いきなり動き出すのは無理だと言っていますが」

「かまわん」

艦長は指示を飛ばした。

「艦体沈下だけでいい。急速潜航、メインタンク注水(インフロー)！」

艦体のまわりの夜の海が一斉に泡立ちはじめた。カサンドラは、推進力ゼロのままバラストタンクだけに頼って潜航を開始した。

ラーナⅢの機内が、ゆっくりとした浮遊感に包まれた。

「まずい！」沖田が舌を鳴らす。「潜航はじめやがった」

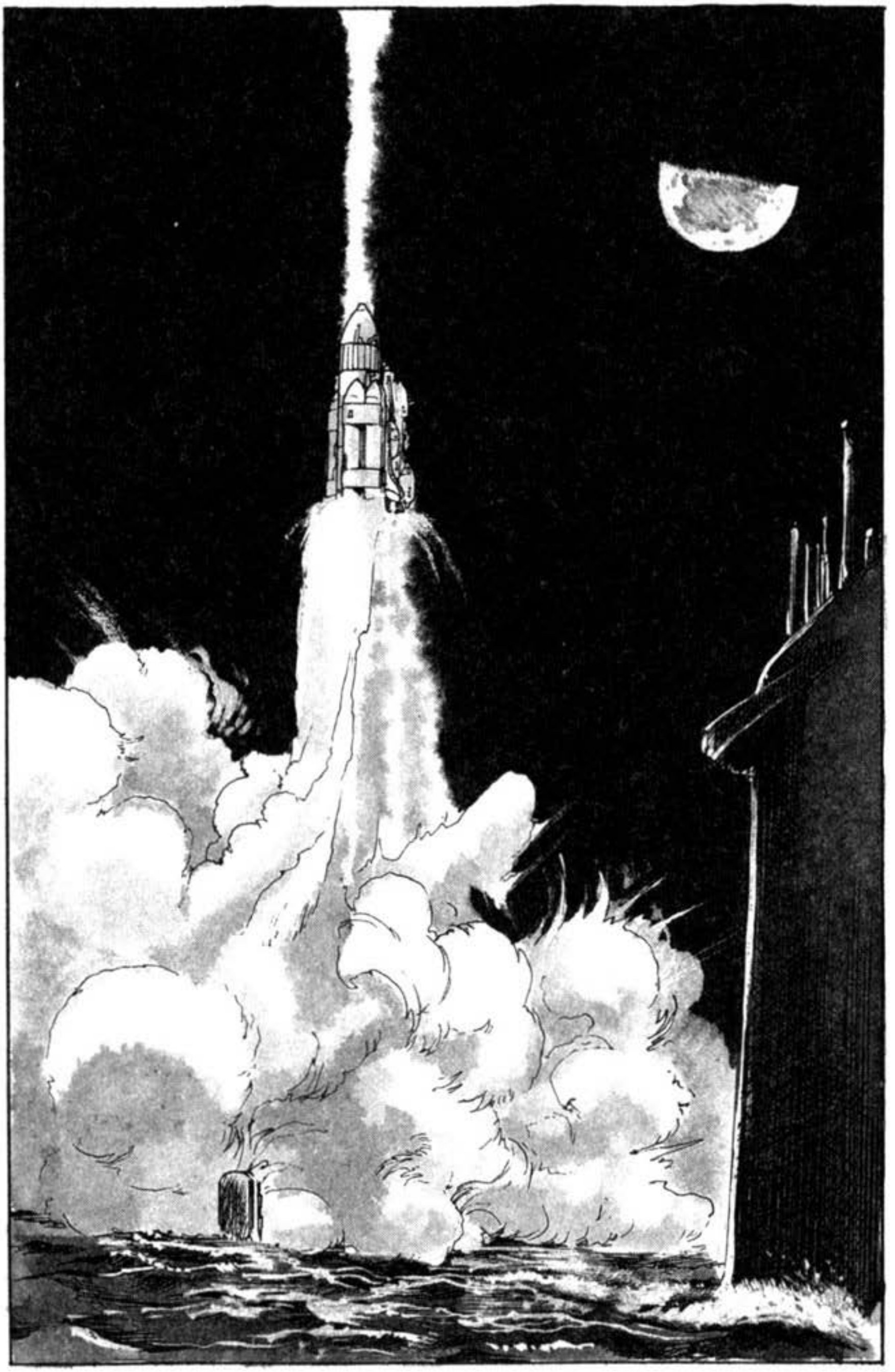
「ねえ沖田、マイクってこれ？」

沖田の後ろのつばさが、目の前のシートのヘッドレストからワイヤードのインカムらしいものを引っ張り出した。

「貸せ！」

沖田はつばさから、細長いマイクのようなインカムをひったくった。英語で喚き立てる。

「スクランブルだ！　緊急発進、今すぐに！」



ディスプレイ上に文字が流れ出た。現在位置及び目的ポイントをインプットせよ。
「あとでやる。今すぐ、全力で離昇(リフト・オフ)しろ！」
声の剣幕におされたように、ディスプレイ上をバー・コードだけが数行分流れた。再び文字が出る。カウントをセットせよ。
「カウント？　えーと……」
数を選びかけて、沖田はインカムにかみついた。
「このやろー！　スクランブルだと言ってるだろうが！　可能な限り早く、緊急発進だ！」
罵詈雑言(ばりぞうごん)は無視して、ディスプレイ上に必要な言葉だけを拾い出したコンピューターは、すぐにカウント15から発射準備を開始した。
すでに水中に没しかけている発射サイロの耐圧ハッチが、艦体から開く。発射サイロの中に、波頭を白く蹴立てて渦をまいた海水が流れこんできた。ラーナⅢの視界が泡と海水だけになる。
「SLOFの発射ハッチが開きました！」
オペレーターが声を上げた。
「バカな!?」
「カウント現在10、カウントダウン続行中！」
メインブースターの四つのノズルから、推進剤がわずかずつ水中に吐き出されはじめた。イグナイターが推進剤に点火する。
カウント5――イグニッションの文字が、ディスプレイ上で一度点滅してから停止した。

「点火しない？」
沖田はディスプレイをにらみつけている。一瞬カウント5で止まった発射手順が、もう一度繰り返される。メインブースターの巨大なノズルと、ラーナⅢ自身の二つのメインノズルの中で、点火装置（イグナイター）が流出する推進剤の中に高圧電流の火花を散らした。
小さな爆発とともに、推進剤に火がついた。カウントが再開されると同時にタンクのバルブが開き、推力が急なカーブを描いて上昇する。沖田は叫んだ。
「飛ぶぞ。つかまれ！」
カウント3、固型（ソリッド）ロケットブースター点火。
カウント2、推力最大（スラストマキシマム）まで上昇、総推力三五〇〇トンのロケットが唸りをあげる。
カウント1、固定ロック解除。サイロに流入する海水が噴射炎でわき立ち、機内からは白い水蒸気の泡沫が踊り狂うのしか見えない。
カウント0、離昇（リフト・オフ）。はじめはゆっくり、そして突然、蹴とばされたようにして、SLOFラーナⅢは巨大なブースタータンクごと発射サイロから海中に躍り出た。カサンドラ沈下の大渦の中を大推力で海面に向かって上昇する。
潜航のあとの荒波でかきまわされていた海面が、突然、海底火山のような爆発を起こした。水蒸気の爆発とともに高さ百メートル近い水柱が立ち、その頂点から宙天めがけて軌道戦闘機（オービタル・ファイター）が飛び出す。真っ白い噴射煙を夜空に残し、のぼってきた半月（ハーフムーン）を横に見ながら矢のように垂直上昇

を続ける。
「し……死む」
急速発進の高Gが、五人をがっちりと押さえこんでいた。シートに押しこまれて進路上に向いている沖田は、Gに対抗して膝の間の太い操縦桿（スティック）に手をのばした。
「う……動かん」
「至急浮上だ！」
オルコットはパネルをぶっ叩きながら指示を飛ばしていた。
「艦載機指揮所（アイランダー）！　ラーナⅢの操縦装置をロックして、こちらコントロールしろ！」
非常用の外部遠隔コントロールシステムはまだ生きているはずである。軌道戦闘機（オービタル・ファイター）を乗り逃げされても、機体コントロールはカサンドラの艦載指揮所（アイランダー）から出来る。
海を割って再浮上したカサンドラは、ラーナⅢをレーダー追尾しながらコントロールを取り戻そうとした。
「まったく……」
指示を終えてシートに沈みこんだ艦長は、ラーナⅢの現況を示すディスプレイを目を細くしてにらみつけた。
「操縦の簡略化も、度が過ぎると問題だな。セットさえしてあれば、小学生でも打ち上げられる——か」
艦長は、ラーナⅢの操縦系統を開発した技術者の言葉を思い出して、苦い顔をした。

「その通りになってしまった」
『戦闘情報室（C・I・C）、こちらアイランダー』
指揮所から連絡が入った。艦長は身を起こした。
『えー、その……申し訳ありません。ラーナⅢの電子航法装置（アビオニクス）が、またぶっ壊れました』
「なに!?」
艦長は思わず声を上げた。
『テレメーターはまだ動いてますんで、状況追跡は出来ますが――水の中から離昇するなんて無茶やったので、電子装置がいくつか死んだようです。故障個所は不明。この調子じゃこっちから（リモート）だけじゃなくて、向こうでも操縦不能になっているはずです』
艦長は頭を抱えた。

「うっ、動かん！」
Gに耐えて手を動かしている沖田は、インカムに喚き立てた。
「上昇を中止、水平飛行に移る――こら、メインブースターカットしろってんだよ！」
ディスプレイ上の文字は、沖田の音声入力を無視した。燃料を使いきったらしい四本の固体ロケットが立て続けに沈黙したが、ブースターはまだたっぷりと残っているらしい推進剤を全開のまま燃焼させている。スピードや加速度が落ちる気配はまったくない。
「何……沖田、どーなってんだ……」

ノブごと後壁のパッドに押しつけられている榊が、息も絶え絶えに訊いた。
「どーもこーもねェ」
沖田は手近のパネルをありったけいじくりながら答えた。声を出すのも苦しい。
「どっかぶっ壊れたらしい。操縦がまるっきり効かん」
「どーなんのよ」
ナビシートのつばさが、押しつぶされた声を出した。
「――エンジンは調子いいから……」
沖田は、風防（キャノピー）の前面に広がる星空を見上げた。
「このままひたすら上昇だろ」
「上昇ってどこまで」
つばさの問いに答えるものはいなかった。ややあって、沖田は、渋々口を開いた。
「衛星軌道まで」
一瞬の沈黙。機内がロケットのかすかな震動だけに満たされてから、榊は叫んだ。
「詐欺（さぎ）だあー！」
ラーナⅢは、一直線に上昇を続けている。

ACT・7 回収

和紗結希は、沈黙に身を任せて漂っていた。今、彼女はすべてのものから隔絶されている。地球より、はるか七〇万キロ――ほぼ地球重力圏の外縁一杯。太陽によって作られる地球の影にいるため、ヘルメットのサンバイザーは必要ない。うすいピンク色のごつい宇宙服の中で、結希は目を開いた。ゆっくり回る結希の視界に、太陽を隠した地球の夜の面が金環蝕をまとって入ってくる。七〇万キロ彼方の、直径一万三千キロの小さな星。その表面に薄く張りついた大気圏はとっくに消え失せ、その強大な重力の鎖もここでは今にも切れそうである。

月は、ハーフムーンだった。地上で見るより四分の一にも小さくなった月が、夜の地球の向こう側にぽつんと浮いている。

自分を中心にして星空が回っているような錯覚を覚えながら、結希は腰の、バックパックの機動ユニット（マニュヴァ）の制御パネルに手をかけた。

遠い星々の中に、ひときわ大きく輝いている木星を見ながら制動をかける。慣性航法装置（INS）がマイクロコンピューターと連動し、バックパックの小さなノズルから小刻みに窒素ガスを噴出させ

る。結希、及び宇宙服の装備を含めた総質量の運動エネルギーを相殺するように。
数回の修正噴射の後、星の回転が止まった。宇宙空間で、結希は完全に静止した。オープンになっている無線に向かって口を開く。
「博士、準備完了しました」
「了解、こちらも機材のセットアップを終了した」
宇宙の結希から直線距離にして約五〇〇キロ。早期哨戒衛星ダイアナ一〇号とランデブーしているCC-104型のルナ・トランスポーターに接続されている実験室の複合ディスプレイの前で、博士はワイヤレスのインカムに答えた。
有効半径はせまいものの、外宇宙用のシルヴィア・シリーズの哨戒衛星のものよりずっと高い分解能を持つTW二〇〇〇型の重力検知機は、結希を中心とした空間へ向けて目一杯絞りこまれていた。マイクロガル単位の小さな空間偏移も見逃さないように。
結希は目を開いた。ボール型の誘導ミサイルを改造した実験機材が、目の前にふらふらと漂ってくる。ミサイル用の高機動バーニアでは推力が高すぎるために窒素ガス噴出式に改造された姿勢制御装置を絞りながら、直径八〇センチほどの球型ミサイルは、結希の目の前で相対速度ゼロになり、静止した。
「機材の配置、完了っと」
本職はCC-104〝タバック〟の主パイロットなのだが、例によって人員不足のために実験に駆り出されてディスプレイを二つ三つ受け持たされているイタリア人が博士に告げた。

「テレメーターもINSも、調子よく稼働してます。いつでも開始どうぞ」
博士は、三面ある液晶複合ディスプレイを見やった。結希の脳電図、二メートルにまで接近した球型ミサイルの弾頭の代わりに積み込まれたテレメーターからの各種信号、太陽や地球などによる重力の影響を補正された重力検知機からのデータ。結希の身体状況を伝えるディスプレイ以外、すべてのデータが静止している。
博士は、結希の静かな息づかいすら聞こえるような無線のマイクを握りなおした。
「はじめてくれ」
『了解』
結希は、目の前のメカニックな球体を見つめた。離れた物体に向けて心を集中し、力を加える。
――突き放す
結希の脳波を示すディスプレイに、α波の振幅が大きくなる。
「動きはじめた！」
パイロットが叫んだ。ダイアナ衛星の調整のために来ているメカニックが、モニター上の結希の望遠映像をズームアップする。
「秒速五〇センチ――七〇、一〇〇、どんどん加速してる！」
球型ミサイルのテレメーターからのデータが、激しく変化していく。しかし、他のデータはまったく変化しない。結希は静止したままであり、重力検出機はどんな異常も認めていない。

「空間は動かず――か」
球型ミサイルの運動ベクトルだけが増加していく。反作用及び作用点なしの作用――力学法則の基礎すら無視した力学上の奇跡が複合ディスプレイ上で進行している。球型ミサイルは、どんどん加速されながら結希から離れていく。
球型ミサイルの秒速が十メートルに達した時点で、博士は結希とスタッフに実験の終了を告げた。
「手間をかけたな。戻ってこい」
返事をして、結希は機動ユニットを分厚い手袋越しに操作した。スラスターノズルが窒素ガスを噴き出し、結希の体にゆるやかな加速度がかかる。
結希は、機動ユニットに体をまかせたまま、遠い地球へ首を巡らした。シャトルなどの低衛星軌道上では視界の半分を占領する地球もここでは、地球上で見る月の倍くらいの大きさにしかならない。
実験室のモニター映像は、加速しながら飛んでくる結希を捉えていた。博士は実験結果を記録したディスクをドライバーのスリットから抜いた。靴を床のマジックテープからはずして、ドアに飛ぶ。
「あー、博士」
インカムでブリッジと何か話していたパイロットが顔を上げた。博士はドア枠の手すりに手をかけて体をとめた。

「当直（ワッチャー）からの連絡で、帰りはちょいと寄り道をします」
「またどこかの衛星が故障したのかね？」
「いえ、ブルーサーチが、誤射で地球を飛び出して来た小型シャトルを拾ってくるようにと……」
静止軌道の内側を漂ってるようなんで、ちょっと遠回りになります」
博士は腕時計のカレンダーを見た。
「大した手間はかかるまい？」
「と、思いますがね。お急ぎでしたら各駅停車の定期便とランデブーするようにしますが」
「その必要もなかろう。しかし――シャトルの誤射？」
「よくわからんのですよ」
裸足にサンダルをつっかけたパイロットが泳いでくる。
「ラーナ型の実戦テスト用で、赤道近辺の潜水艦から飛び上がってきたらしいんですが――回収依頼はイエローサーチあたりが出所でしょうが、何やっとんですかねえ」
ハッチを抜けて、パイロットは主骨格のジョイント通路へ泳いでいった。
「はあー……」
誰かの重い溜め息が流れた。エアコンディショナーは正常に作動しているのに、機内の空気は淀んだように停滞している。
頭に腕を組んで漂っている榊の声が聞こえた。

「へー……真田さん、今どのあたりですかねえ」
「そーですねえ。さっき東海岸だったから、そろそろ大西洋なんじゃないですかねえ」
「フン」
再び、沈黙だけが流れる。しばらくして、榊はまた口を開いた。
「国際援助隊は、まだ来てくれませんかねえ」
「まだ、来てくれませんねえ」
現在位置、赤道上約二万キロメートルの衛星軌道。すべての推進剤を使い切るまで上昇を続けた軌道戦闘機（オービタル・ファイター）ラーナⅢは、メインブースター切り離しのショックでゆるい回転運動をはじめたまま、燃料切れで動けずに軌道上に漂っていた。
「おーきたあ」
榊が、うらめしそうなイントネーションで沖田を呼んだ。
「今、この飛行機どこへ飛んでんだあ？」
「くおこはどこ？　うわたしは誰!?」
「錯乱して事態をごまかせると思うか」
冷ややかに言って、つばさは機首と反対の方向にシートを回して沖田に背を向けた。
「何とかしろ」
「ほんじゃどこぞと連絡とってみるかい」
沖田は、こと操縦に関する限りまったく言うことを聞かなくなったパネルをたたいた。

「バッテリーはまだ生きてるし、通信機までぶっ壊れたってことはないだろう」
「どこと連絡とるの」
榊が沖田を横目でにらんだ。沖田は一度は出したヘッドホンをクリップに戻した。
「決まってんだろ。ここらへんうろついてる連中だよ」
機内に沈黙が戻ってくる。実際には、ラーナⅢが燃料切れで軌道上を漂流しはじめて以来ずっと、自動的に緊急信号が発信されている。しかし、沖田たちはそんなことは知らない。
「あー、気持ちわる……」真田が声を上げた。「この宇宙船、救急セットかなんか積んでねーんかい」
「キャビネットでも探してみな」
目を閉じて、無表情に沖田が答える。
「傷薬くらいあるだろ」
「んなもん役に立つか。あー、胸がむかつく、気持ちわるい」
「あたしゃ頭痛がひどくって」
機内の雰囲気が停滞しているのはこのためである。騒ぎにならないのも、沖田とつばさが小康状態を保っていられるのもこれのおかげである。
無重力飛行に入って以来、全員が宇宙酔いになっていた。無重力状態に混乱を来した平衡感覚担当の三半規管。無重力に慣れずに地球上と同じように血を送り出し続け、血圧上昇やら頭に血が昇るような事態を招いている心臓。

薬がなくても、早ければ二、三日で治るこの宇宙酔いも、それまでは二日酔いもかくやという地獄である。

薬探しの他に定期的な生理的欲求もあって、つばさは機内をひっかきまわしはじめた。せまいキャビンの後ろにあるキャビネットを片っ端から開けて、中のものを機内にほうり出す。無重力だからして、ほうり出されたものは落ち着かずにふわふわ漂う。

「何をやっとるんだ」

漂ってきたハンマーを頭にぶつけた沖田がパイロットシートから振り向いた。

機内には頭を抱えて丸くなっているノブとハッチ近くで横になっている榊以外にも、機載工具だの予備部品だの宇宙食のパックだのがざわざわと浮いている。

「引っ越しでもするつもりか」

「家探(やさが)ししてんの。――何だこれは」

つばさは、新しく開けたロッカーの中から太めのホースを引っ張り出した。先に掃除器のようなじょうごらしきものがついており、終わりはどこかにつながっているらしい。

「ああ、そりゃトイレだ」

「トイレ？　――これがあ？」

つばさは憮然とした表情で吸引口をにらみつけた。

「どーした？　使わんのか？」

「使うか！」

ホースを投げ捨てたつばさは、手近に漂っていたドライバーを沖田に向かって投げつけた。沖田の耳をかすめて正面のキャノピーにぶちあたる。
「わ危ねェ！　何しやがる」
はね返ったドライバーをキャッチして投げ返す。とっさにつばさが両手で盾にした宇宙食のパックに、ものの見事に突き刺さった。
「危ないじゃない！」
パックごと投げ返す。
「誰がはじめたんだ、だれが！」
「この狭いところで乱闘をはじめるなア！」
「うぎゃ」
真田が二人の投げ合いも無視して妙な声をあげた。
「おい、ちょっと待て――あた」
つばさの投げたレンチが連鎖反応的にパックをとばして副パイ席の真田を直撃する。
「待てっちゅーのに、こら！」
「なんだよ」
シートの背もたれ（バックレスト）をバリケード代わりに身を沈めた沖田が、飛んできた電子部品のケースを受けとめた。同様にシートにかくれた真田がゆっくり回っている機体のキャノピーを指す。
「来たぞ、どこぞの宇宙船」

「宇宙船？」
「ルナなんとかの、えーと、トレーラーとかトラクターとかいうやつ」
「あたー……やいつばさ、ちょっと待て！」
「何よ！」
「見っかったらしい。一時休戦！」
宣言してから、沖田は首を出して操縦パネルの上に身を乗り出した。機体がゆるくスピンしているため、元の視界に戻るまでしばらくかかる。
「スキありィ♡」「いて」
つばさが放ったボックスレンチが沖田の頭に命中した。沖田は頭を押さえて振り向く。
「このやろ――！」「きゃ」
自分で飛んでいった沖田がつばさにアックスボンバーをくらわせた。そのまま首を絞め上げる。
「事・態・を・認・識・し・ろ！」
「わわわかった、ロ、ロープ」
絞められたまま、つばさは目を見開いた。ゆっくり回るキャノピーの視界に、主骨格にむきだしのメカをつけたおよそスマートとは程遠い宇宙船が入ってきた。そのまま機体の回転に従って流れていく。
「――ルナトランスポーターとかいうやつだ」

沖田は唖然としてつぶやいた。

「ターゲット確認」

船体先端部の操船区画（ブリッジ）でナビゲーターがパイロットに告げた。無重力状態でしか使用されないルナトランスポーターのメインブリッジは、床だけでなく壁や天井にまでナビゲーション用のシートパネルが付けられている。

「認識ナンバーCAS34－703、ラーナの最新型――そばに間違えそうなシャトルがいるわけでもなし、緊急信号（エマージェンシー）も発信してるからあれですな」

「誰が乗ってるのかね」

実験終了後はひまになったので、ブリッジで運航を手伝っていたジルベスター博士が訊いた。パイロットは目視スクリーンやデータセンサーでラーナⅢの現状を確認している。

「どーもよくわかりませんな。ブルーサーチに乗員リスト頼んだら、去年レッドバグとかと一緒にルナベースひっかき回したっていう学生のリストが来まして――スピンしてるのが厄介だ。回収（リカバー）索でも打ってひっぱりこむか」

「学生が？　まさか？」

博士はキーボードでラーナⅢの乗員リストを呼び出した。信じられないことに、小牧ノブをはじめとする知った名前がディスプレイに並び出す。博士は笑い出した。

「なんと、ここまで来てしまったか」

「ドッキングするよりは飲みこんだ方が早いな。小型機のコンテナドックにあれ入る余裕があるか？」

パイロットの頭の上から、コンピューター担当の女性オペレーターが返事をした。

「大丈夫です。1万マイルくらい下のブースターユニットを一緒に入れても余裕があります」

「そっちはいい。どうせ電波標識がぴかぴか言ってんだろう、次の引き揚げ船にでも頼む。ロープ用の大砲とコンテナ開ける用意を」

「了解しました」

CC－104は、大型サイル母艦や補給、回収までどんな任務にも使えるよう、先端の操縦、居住区画と尾部の高出力核融合エンジンユニットの間の長い竜骨に各種ユニットを組み込む構造になっている。出力軸線やバランスを考えて取り付けないと操艦特性がムチャクチャになるのは当然だが、CC－104の宇宙船乗りには多少の特性変化なら手動操作でカバーできるという猛者が多い。

回収ミッションが多いCC－104は、主骨格全長の約三分の一を占領している整備ドック下面のメインドアを開いて、職人らしい無駄のない動きでゆっくりスピンしているラーナⅢに接近していった。

「これは間違いなく捕まりますな」

「まず捕まるでしょうな」

榊と真田は天井のハッチの窓から二人並んで接近してくるCC-104を見上げていた。
「何とかして逃げられませんかね」「どーですかねえ」
「仕方ねェだろ、もーこれっぽっちも燃料残ってねェんだから！」
沖田が操縦パネルをたたいた。
「いいわよ、このさい」
つばさは、前方キャノピーの曲面ガラスから宇宙船を見ていた。
「この状況が何とかなるんなら、とりあえず何でもいい」

一見無造作に放たれた回収用のフックをつけたロープは、実はスピードや発射角をかなり慎重に計算していたらしい。先端のフックがラーナⅢの尾部エンジン部に命中したショックで、機体のスピンがぴたりと殺されておさまった。
続いてもう一本のワイヤーロープが撃ち込まれ、ラーナⅢはCC-104のコンテナ型ドックに向けてゆっくりと引っ張られ始めた。
「どーします？」
後ろから引っ張られているため、直接宇宙船を見ることはできない。榊は、仏頂面でCC-104に背を向けて操縦パネルに肘をついている沖田を突っついた。
「逆襲してみる？」
「さあねえ」

機体の動きに伴って、一度波のように機首方向へ押し寄せてからまた漂い出した浮遊物をうるさそうに払って、沖田は頭の上で手を組んだ。
「無駄なよーな気もするが、黙って捕まってやるのもシャクだし――暴れるだけ暴れてみるか」
ラーナⅢは、整備工場のようなコンテナ内へ引き込まれた。汎用フックががっちりと機体を固定し、機体下面側の巨大なメインドアがゆっくり閉じていく。
やがて、機外に音が戻ってきた。ドック内に空気が充塡(じゅうてん)されたらしい。
「相変ーらず、すげェメカだこと」
パネルに肘をついたままの沖田が言った。
正面キャノピーからでも、各種補給や整備、予備の部品や兵装まであるらしいコンテナ内のメカの集積の度合いがわかる。到底、素人に手が出せるレベルではない。かといって何もしないでおとなしく黙っているのも趣味ではない。
「誰か出てきた」
天井のハッチに顔をつけて上を見ていた真田は、ポケットから愛用の一文字手裏剣を取り出した。ドックのパイプやアームだらけの天井の隅でハッチが開き、宇宙船よりヨットに乗るような恰好の男が出てきた。慣れた様子でラーナⅢの機上へひと跳びしている。
「先行くぜ」
真田はいろいろなものが漂っている機内でハッチの手すりに手をかけた。すぐ飛び出せるよ

う、手裏剣を逆手に持ってハッチにとりつく。
「ケガだけはするなよ」
沖田はパイロットシートから出てきた。ハッチの下で、真田が出たらすぐ飛び出せるよう位置を占める。
「何人来てる？」
「一人だ――開くぞ」
外側のハッチが一杯に開かれた。インナー・ハッチのレバーが動く。
「ひの、ふの、みーッ」
向こうからハッチが開かれると同時に、真田は腕一本で飛び出した。
「うりゃ！　――あ？」
ハッチを開けた男は、飛び出してきた真田をあっさりとよけた。
「あ、あば、あば、あば」
無重力でバランスを失った真田はそのまま漂いはじめる。
続いて飛び出してきた沖田を軽く蹴とばしてドック内にほうり出し、三人目の榊は出てくると同時に自分からハッチの上に握られていたスパナに頭をぶちつけて反動で機内へ落ちていった。
目を見開いて口に手をあてているノブの前で床に尻持ちをつく。
「元気なガキどもだな」
パイロットは、無重力状態での行動に慣れ切った体でスパナをベルトに戻した。

「0(ゼロ)Gでケンカをふっかけようなんて大した度胸だよ」
「何だよ、これは！」
ふわふわと漂わされて、やっと壁面のフレキシブルジョイントに手をかけて体を止めた真田が声を上げた。なんとか足から壁に着地することに成功した沖田が頭を抱える。
「これが有名な無重力状態ってやつだ――くっそ、全然慣れてないってのを計算に入れておくべきであった」
つばさがひょいとハッチから首を出した。エンジンの後ろの壁面でめげてる沖田を見つけて、縁に肘をつく。
「最近、低調ね」
「厄日が続いてんだよ」
つばさはハッチから体をひっぱり出した。
「さてと――ねえ沖田、トイレの場所訊いてくんない？」
「あいよ。よー、にー(イブラ)ちゃん(ザー)」
英語で訊きかけたら、なまりのある日本語で返事があった。
「トイレなら船首だ」
「あー、じーさん！」
天井のすみのハッチから顔を出したジルベスター博士に、沖田が声をあげた。
「やはりお前たちか。よく会うものだ」

「――待て。あのじーさんがいるってことは……」
沖田は、機のハッチから顔を出した榊と顔を見合わせた。
「ひょっとして――」「うん……」
「どーしてこう知った顔ばっかりでくわすんだ」
沖田は額に手をあてていた。榊は胡座(あぐら)をかいて肘をついている。
「運命なんじゃない？　沖田おまえ、結ばれてんじゃない？」
「誰とだ、だれと！」
CC－104の先端部、居住ブロックの一室である。宇宙酔い止めの薬をもらった一同は、パイロット立ち会いの簡単な事情聴取を受けていた。
「つまり、音声コントロールだけでラーナⅢを離昇させたわけか」
博士はテープレコーダーを止めた。
「機構の簡略化も、度が過ぎると問題だな。しかし、よく何の予備知識もなしにすべての発射手順を突破できたものだ」
「あれは緊急迎撃用の機体ですからね」
艦内通信機(インターコム)を片手に持ったパイロットが答えた。
「発射前のチェックは全部自動化されてます。――確か発射位置の入力(インプット)と目標高度の選定、迎撃ポイントの指定くらいで発射できるはずです。前にも、潜水艦が座礁したショックだけで作動し

て、SLOFが無人のまま飛び出した事故があるようなことを聞きましたが」
「なるほどね――さて」
博士は、五人の学生の顔を見渡した。
「以上で終わりだ。申し訳ないが、ブルーサーチに到着するまでは、この部屋でがまんしていただく」
「へーへ」「たいくつしそうだが……」
「何か用事があれば、そこのインターホンを使いなさい」
「船内で騒ぎをおこしたら、命の保証はできないぜ」
笑ってみせて、パイロットは部屋から出た。博士は気密ハッチ式のドアを閉める。
榊は、壁にうずくまって床を見ているノブを見た。無重力でしか使われないことを前提に設計された部屋だから、本当は床とか天井、壁などの区別はない。榊はノブの隣に動いた。
「どーしたんだよ」
「――別に」
わずかに榊に顔を向けたノブは、笑みを浮かべてみせた。
「何でもない」
「ふーん」
「さて、動かねェかな」
沖田は閉められたドアへ軽く飛んだ。回転式のレバーに手をかけて体を止める。

「電磁ロックか。針金くらいでは歯がたたんな」
ドアレバーの上に、電卓のような表示窓と10(テン)－キーボード、ICカード用らしいスリットがワンユニットになって設置されている。沖田がレバーを動かしてみた。
「ありゃま」
気密用のパッドからわずかばかり浮いたかと思うと、ドアはあっけなく開いた。
「カギかかってねェ。何考えとんだここの連中は――うえ」
細めにドアを開けて通路に顔を出した沖田は、左右に目を走らせると同時に予想はしていた人物を発見した。
「やっぱりいやがった……転校生」
ドアの横の壁に、半ば体を浮かせた結希がもたれていた。肩越しに沖田を見て、無表情を装いながら通路へ目を戻す。沖田の下から顔を出した真田がうぎゃと声をあげた。
「何で転校生がこんな所にまでいるんだよ!?」
「監視役――って訳か？」
結希はうなずいた。
「なるほど」
沖田はドアを大きく開けはった。半分開いた所でストッパーがかかる。
「どーせ、そのブルーサーチとかいう宇宙ステーションまでしばらくかかるんだろう」
結希は沖田へ顔をあげた。

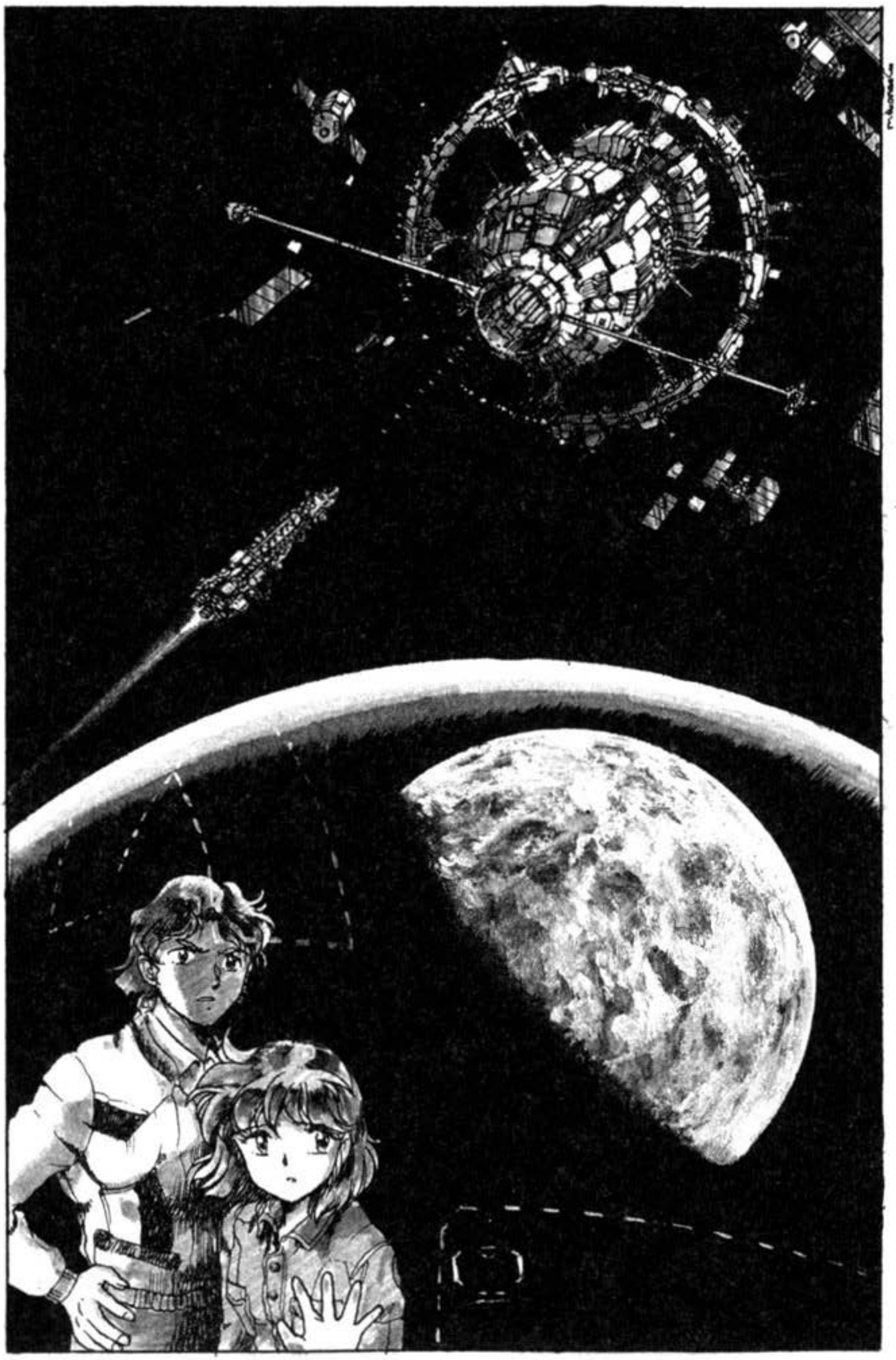
「ちょうどいい、案内してくれ」
結希は目を見開いた。
「もっと見晴らしのいい所まで」

高度衛星軌道上の機動要塞ブルーサーチは、俗に〝フランクフルトをくわえこんだドーナッ〟と呼ばれるスタイルをしている。ゆっくり回転する遠心力による、地球上と同程度の重力を発生している巨大なリング状の居住区と、スポークと呼ばれるエレベーター用などのチューブでつながれた中央部に回転しない巨大なセンタードックがあるためである。ドーナッは居住区、センタードックがフランクフルト・ソーセージということになる。

現実には、幅広い居住リングとセンタードックは、共に度重なる規模増大と改装で、通称の上に〝腐りかけの〟がつくほど複雑怪奇な形になり、回転する居住リングにしても内側・外側双方にいろんな張り出しをくっつけたデコレーションだらけである。

色は、基調は黒系統らしいのだが、表面の大部分を占める改装・増大部分は色が間に合わないらしく、紺や濃緑色などのとにかく暗い色でまとめられていた。このくらいのサイズだと地上からでも簡単に目視されるので、それを避けるためらしい。

CC-104の居住ブロックにある半球型の観測ドームから対各種宇宙船用の防護フィルターを通して見るブルーサーチは、その統一のとれてない不気味な塗色もあって到底宇宙ステーションには見えなかった。



「冗談みたいな形だ」
直径六メートルはある展望ドームに手をついて、沖田は巨大なステーションを眺めていた。ドーム内をゆっくり漂う真田がうなずく。
「まるで出来損ないのチクワですな」
榊が床を蹴ってドームに浮かび上がってくる。天頂部で体をとめて、感覚的に後ろにある地球を見た。四万キロ彼方の地球――青い半月みたいに太陽に照らされている地球が小さく見える。
「とーとーこんな所まで来ちまった……」
榊の横にノブが上がってきた。遠い地球を見て、それから首を巡らせてブルーサーチを見やる。
「遠い、ね」
消え入りそうな小さな声だった。その表情のあまりの硬さと声の暗さに、榊は思わずノブの顔を見直した。
「……帰れるのかしら」
「おい」
榊はノブの両肩に、反動をつけないように慎重に手を置いた。視線をそらしがちになるノブの顔を正面から見つめる。
「帰るの」
右手をはずし、榊は肩ごしに地球を指した。

「あそこに、絶対」
ノブは目を落とした。
「どーすんのよ」
沖田は、つばさに突っつかれた。ドームに手をついたつばさは二人を見ている。
「大丈夫なの？　本当に帰れんの？」
「あのな……」
沖田は息を吸いこんだ。
「ここまで来たら、あとは帰るしか残ってねェだろうが。安心しろ。連れて来たんだ、責任持って帰してやる」
「顔あげて、ノブ」
榊は、ノブにぎごちなくウインクしてみせた。
「ここまで無事に来れたんだから、きっと――絶対帰れるさ」
ノブは、肩におかれた榊の手を握った。目を閉じて、自分の頬をもたせかける。
結希は、展望ドーム入り口のドアにもたれて、五人の様子を見るともなしに見ていた。
「はしけ（バージ）に乗り換えなくていいのかね？」
船をブルーサーチのセンタードックへの進入軌道に乗せたパイロットに博士が訊いた。CC-104のような全長三〇〇メートルを超える大型船は、多くの場合、ステーションとランデブー

して連絡用のバージで人員の移送をするか、あるいは連絡通路(ボーディング・ブリッジ)を介して直接ドッキングする。

「C整備と、いくつか換装の予定が入ってるんでセンター・ドック(ジャンク・ヤード)に船を入れます」

パイロットは、ブルーサーチからの誘導ビーコンにあわせて進路を微修正した。回転するリングの突出部分やセンタードックの要所要所が衝突防止用の航空標識を点滅させている。

「八番ゲートから入ります。まァ、問題は、ジャンク・ヤードがどれだけ片付いてるかってことですね」

ACT・8 要塞

ブルーサーチ、セントラル・コアの戦術情報司令部。
地球衛星軌道上のダイアナ・シリーズの哨戒衛星、地球から数千万キロにも及ぶ惑星軌道上に大量に配置されているシルヴィア・シリーズの人工惑星群などから送られるデータ解析、SCF宇宙船団の大部分を統括する、ルナベースと並ぶ〝最前線〟の司令部である。
平常時なら、太陽系外から迷い込んでくる惑星や空間をゆがめて割り込んでくる正体不明の飛行物体を二四時間体制で監視している司令室は、今、宇宙空間のただ一点に焦点を絞り込んだ観測を続けていた。
この一カ月で司令室が戦闘態勢に入ったことは二、三回しかない。そしてこの間にSCFは、ここブルーサーチ戦術司令部を中心として、地上基地や艦船まで動員した南天——南半球側の外宇宙——の走査をしていた。結果は、ほぼかたまりはじめている。
「南十字(サザンクロス)のアルファ(アルファ)星方向、約七二億キロメートル——ほぼ間違いありません」
オペレーターの一人が、バミューダ本部に降りたブルーサーチ司令官に代わって司令代理を務

めているキーラーの前のディスプレイにデータを転送した。
平均直径約一二〇億キロの太陽系宇宙。最も太陽から離れる時点で太陽から直線距離七四億キロにもなる冥王星軌道を外縁部とする太陽系平面より、ディスプレイの下方――南天に向けて垂直に七二億キロも降りた空間の一点。太陽系の半径ほども離れた空間座標が、SCFがその全探査機能を駆使して探し出した最大の成果だった。
「七二億キロか……」
キーラーは、コンピューター作図によって示された空間図を見据えた。
「レーザービームでも、カウント・ダウンに六時間四〇分か」
現在、SCFが最遠部に到達させている有人宇宙船でも、やっと木星軌道の内側に辿りついたところである。それとて太陽から七億八千万キロ、十分の一にしかならない。到底手の届く距離ではない。
「実映像は出せるか?」
キーラーの指示で、ブルーサーチ近辺の艦船の管制状況を映していたディスプレイが星空に切り替わった。
「バックベアードからの映像です」
CC-104に急拠各種探査機器を組み込んで調査船とした〝バックベアード〟の七メートル反射望遠鏡からの直接映像である。
天の川の中でひときわ明るく輝く南十字星頂点のアルファ(エイクルス)星――白色亜矮星のすぐ横に、けぶ

るような小さな白い影がかかっている。画像全体の粒子が粗れたように揺らめいているのは、映像を限界一杯まで拡大しているからしい。

「調査区域をこの空域に集中させろ」

インカムをとったキーラーは、映像を中継している管制指揮所に命じた。

「囮かもしれん。定時の全天走査も手を抜くな」

もう一度、ディスプレイに目をやる。四百光年彼方の星に重なる白い影――

「少なくとも、今はまだ奴らはそこに留まっているわけか」

つぶやいてから、キーラーはその直接映像が光速度の関係で七時間近くも前のものであることに気づいて苦笑いした。手を伸ばし、映像を切り替える。ディスプレイに管制データが戻ってきた。

誤射で大気圏離脱後、漂流していたラーナⅢを回収したCC-104〝タバック〟が、ジャンク・ヤードに入港したらしい。

「ま、すげぇところだね」

CC-104の展望ドーム内で肘をついている沖田が嘆息した。

一言、うげと言ったきり、隅で頭を抱えてうずくまっている。

「なんちゅーごちゃついた所じゃ」

胡座のままふわふわ漂っている真田が顔をしかめた。

とにかくメカが苦手なノブは

以前に見たことのあるルナベースの主格納庫（メインハンガー）に似た雰囲気だが、無重力で上下左右の制約がない分、一層雑然としている。救命ポッドからワルキューレ級（クラス）の超大型シャトル、CC－104のような宇宙船まで揃（そろ）っているのは同様だが、他にも核融合エンジンブロックだけとか、外板をひっぱがしたらしい用途不明のメカの集積体などがふわふわ漂い出さないようにロープ二、三本だけで係留されていたりする。

ブルーサーチ・センタードック、別名廃品置き場（ジャンク・ヤード）。

広大なスペースと、整備から建造、補給、格納、保存まで何にでも使われる多用途性のため、開発初期のテスト機やらとっくに廃棄処分になったような宇宙船を後生大事に抱えこんでいるため、この名がある。

宇宙服を不要にするため、地上と同じ一気圧の空気で満たされた巨大な無重力空間を、壁のガイドレールのフックに固定されたCC－104〝タバック〟はレールのリニアモーターによって動いていた。ドック内を、ツナギの作業服やランニングシャツに草履（ぞうり）といった軽快な格好のメカニックが飛び回っている。

「脱出するとしたら、ここらへんの宇宙船で手ェ打たにゃならんのだな」

「どれ選ぶか決めとけ」

沖田の横でドックの中を見渡している榊が言った。

「えーと――地球まで降りれて、大気圏突入できるのがいい」

「軽く言ってくれるな」

沖田はげんなりとした気分で息をついた。
「静止軌道の外側から地球までっつったら、結構長旅なんだぞ、誰が動かすんじゃ」
「おまえ以外、誰がアレルギー反応なしで操縦席に座れるっちゅーんじゃ」
「あのな、突入軌道つーのは水に石ほうり込むよーなのと訳が違うんだぞ。天井から目薬落とすくらいの精度が必要なんだから」
「それならさ」真田が漂ってきた。「沖田、おまえ、女性パイロットを誰かたらしこめ」
「うー」
沖田は目を覆った。
「あんたたちいったい何考えてんのよ！」
ドームの下からつばさが喚いた。
「もっと作戦らしい作戦、考えられないの！」
「では編集長、作戦らしい作戦をどーぞ」
ぽろっと真田に言われて、つばさは思わず考えこんでしまった。
「えーっと――司令室にいって、人質とって……ダメ？」
「それしか思いつかんのか、おまえは」
「悪いかバァロー」
「こちら〝タバック〟こらァ、そこふらふらしとるCI-40（エリアル）、どかんとひっかけるぞお」

CC－104〝タバック〟の操縦室から、パイロットが進路上にふらふらとさまよい出てきた宇宙戦闘機に無線で叫んだ。

『機動用の電子機器（アビオニクス）がパンクしちまって、手動で動かしてる。ちょっと待ってくれ、今なんとか――』

タバックに背を向けた戦闘機の開け放たれたコクピットから、TシャツのTの整備員がブロックサインを送る。

「言い訳なら管制局に言え。今〝タバック〟はあそこに動かされている」

パイロットは操縦席の中から、船体の主骨格をくわえこんでいるフックを指した。

『しかしね――えい、コントロール！　八番のゲートのでか物を二分ばかりストップさせろ』

「ぶつかるな、これは」

船首上部の展望ドームで沖田が腕を組んだ。

フックに固定されたCC－104が、ショートしたように断続的に機体各所のバーニアをふかすエリアルにゆっくり近づいてゆく。やっと進路上からはずれかけたエリアルを船首の操縦区画が引っ掛けた。弾かれた宇宙戦闘機は、ドックを横切って固定されたワルキューレ型シャトルの機首をかすめて、反対側の壁面でロープに仮固定された小型飛翔艇と衝突する。再びドック内に飛び出したところで器用にバーニアをふかし、幾分傾（かし）いだままドック内に静止する。

一部始終を見ていた沖田は顔をしかめた。

「ひでェ所だ」

ガイドレールのCC－104が止まった。定位置についたらしい。
『こちらコントロール。〝タバック〟どうぞ――聞こえてるか？』
「聞いてるよ」パイロットはヘッドホンに答えた。「中をうろついてた小型機を引っ掛けたぜ。誰だレールのコントロールをしていたのは」
『ジャンク・ヤードの中で高機動戦闘機のテストをやろうなんて奴にまで構っていられるか。あー、〝タバック〟、予定の西三番作業台（ドリー）は〝アスコット〟の改造が手間取ってるんで、おまえの〝タバック〟は半日ほどそこで整備を待ってくれ』
「〝アスコット〟？　あのボロ船を？　例の宇宙艦隊の調査用か？」
『らしいな。――以上で係留終了、上がってこい』
ちょっと考えてから、パイロットはコントロールに言った。
「乗客の中に無重力（ゼロG）ははじめてっていう素人が五人もいる。ポートからここまで舫い（ムーリング）用のロープでも張ってくれ」
『わかった。手空きの奴をそっちへやる』
ドック内は、一気圧の空気のまま無重力が保たれている。無重力帯での行動に慣れた乗組員やメカニックはスーパーマンよろしくドック内を飛び回っているが、素人はそういうわけにはいかない。
結希の先導で一同は内側（インナー）も外側（アウター）も開け放したエアロックに来ていた。リサイクルシステムのためか、どこか薬品くさい船内の空気にくらべ、ドック内から流れてくる空気は機械工場のような

オイルと推進剤の刺激臭が混じったようなにおいがする。
「あそこまで行くの」
エアロックに立った沖田は、外側のパイプにヨット風の結び方をされて、はるか先に続いているナイロンロープを目で追った。ふわふわ漂う中型の推進剤タンクの向こうに突き出た監視用のタワーまで続いている。
「どーすんの？」
沖田の後ろからつばさが顔を出す。
「逆襲かけるの？」
「こんなところでやってもしょーがないような気がするが……」
沖田は巨大な無重力の工場を見渡した。
「早く行きな」
どこか別のハッチから出たらしいパイロットが、斜めに飛んできてロープに足をかけた。他の乗組員たちは、慣れた感じでそこらへんを飛び回っている。
「こっちも用事が詰まってるんだ」
「んでは、先に行くぜ」
プールに飛び込むような感じで、沖田は宙に向かって飛び出した。
「あれ？」
瞬間、上下が逆転したような錯覚をおぼえて、沖田はあわててロープに手をかけた。先の——

上、にある監視タワーを見上げる。
「――無重力だから上下も何もないんだ……」
不思議に違和感のない自然な浮遊感覚に身を任せたまま、沖田はロープを伝って身を運びはじめた。前の月旅行では、無重力状態はせまいシャトル内でしか体験していないので、このような広い空間にぽつんとほうり出されるのは初めてである。
「わ、わぎゃー、なんなんだこれは」
後ろから出てきた真田は綱渡り風にロープの上を歩こうとして失敗して、ほうり出された。平泳ぎで空気をかいて、何とかロープのところへ戻ってきてとりつく。
「え、上と下がわからん」
「気にするな」ロープに沿って勢いをつけて、沖田は体をふわりと浮かべた。「慣れりゃ楽しめるぜ、しゅわっち」
「ほんと、気楽なんだから」
エアロックから出たつばさがロープにつかまった。
「先、行ってるぜ」
アウターハッチから軽くジャンプした榊は、反応がないので空中で振り向いた。ハッチから半分身を乗り出したノブは、宇宙船の後方――入ってきたゲートを見ている。
行き過ぎかけた榊は、片手でロープをつかまえた。ノブが見ている方向に地球があるのを思い出すのに、しばらくかかった。

中天の半月は赤かった。排気ガスと都市の明かりのせいかくすんだ暗い星空をバックにしてそびえ立つ超高層ビル街が、その頂上のアンテナで赤い航空標識を点滅させている。

日の暮れない黄昏(たそがれ)地域、歌舞伎町から離れた新宿駅西口側の超高層ビル街を過ぎると、アベックの夜の溜まり場として知られる新宿中央公園である。六車線道路を隔てた双子の超高層ビルを見上げた平沢は、中央に大噴水のある〝水の広場〟で、くわえたマルボロにオイルライターで火をつけた。すでに真夜中を過ぎ、片方の高層ホテルにも明かりのついている窓は数えるほどしかない。

街灯の光の中で、タバコの煙が冷たい夜風に流されていった。まだ春というには早い季節だが、各所に配置された石造りのベンチには空きがないほどカップルがいる。

「ったく……」

平沢は、よく使いこんだ革ジャンパーのポケットにライターをほうり込んだ。内懐(うちぶところ)に手を入れ、ショルダーホルスターのストッパーが外れているのを確認する。

「何の因果で、この寒空に男と待ち合わせにゃならんのだ」

平沢は正面の道路からの階段に目をやった。コート姿の男が、街灯の光の中に現れた。親しげに手を上げる。

「寒空に呼び出して済まない」

「ほお」

平沢は、両手をポケットに入れて噴水のへりに腰をおろした。
「誰かと思ったら、怪物シーフューリーで二連覇のリノのチャンピオンか。どこぞの博物館の震電を再生して出場するって話はどうなった？」
「君たちのおかげで仕事が忙しくてな、いつになったら機体が組み上がるやら」
極東地区ＳＣＦ地上部隊のチーフ、Ｃ・マッキは、平沢の前で武器を持ってないことを示すように両手を上げた。平沢は笑った。
「マッキ・サーカスのボス自らお出ましとはね。――下手（くさい）な演技はよせ、小細工はお互い承知の上だ」
「どうも、腹芸ってのは苦手でね」
マッキは苦笑いしながら平沢の隣に腰をおろした。平沢はマルボロの箱をマッキに向けた。
「何の用だ？　クビになったのは知っているはずだろう」
「でなければコンタクトなど取らん」
礼代わりに手を上げて煙草を取ったマッキに、平沢は火をつけてやった。
「今夜はどんな仕掛けを見せてくれるんだ？　地下道からＦ－15（イーグル）で飛び出してくるのか？」
「キラー衛星に狙撃を依頼した――こら逃げるな」
「対衛星ミサイル（フライング・トマト・キャン）を取って来るだけだ。――用件は何だ？　協力の依頼なら断るぞ」
マッキは肩をすくめた。

「最前線へようこそ」
回転するリングの遠心力によって疑似重力を生み出している居住区の一室で、キーラー司令官はいつかと同じ言葉で五人を迎えた。
「へーへ、おかげさんで無事につけましたぜ」
司令官用の個室らしい。実用一点張りのインテリアと、大がかりなコンピューターの端末などの電子機器に囲まれた部屋で、一同は久しぶりに地に足がついた感覚を味わっていた。
「で、なんで月面基地にいるはずのおたくまでこんな所(とこ)にいるわけ」
無造作に床に置かれた金属地むき出しのケースに、椅子代わりに腰をおろした沖田がしかめっ面で訊く。ジルベスターも同席している。
「こちらの事情でな。ここの責任者が今地上に降りているので、私が代わりに来た。しかし、よく事故も起こさずにここまで来れたものだ」
「どーせ若葉マークもつけられないほど素人の初心者ですよ」
宇宙船を飛ばしてしまった張本人の沖田はふてくされている。
「今回は君たちだけか。ミスター平沢は元気かね」
「美人の占い師とよろしくやってるぜ」
「なるほど」キーラーは笑い出した。「地上部隊がてこずるわけだ」
「あのねえ!」
さっきから黙って話を聞いていた榊が喚き出した。

「そーゆー話しに来たわけ？　他に何んか言ーことないの？」
「その様子では相変わらず考え方を変えていないようだな」
「たりめーだ！　何かってーとすぐ重火器持ち出す連中相手に、考え方もくそもあるか」
「まァな」
沖田は、つい先日の市街戦を思い出した。
「あれじゃ、考え方どーのこーのってのは無理だわな」
「他に用事ないんなら、おい！」
榊は、黙りこくっているノブに振り向いた。ノブは誰の声も聞こえないように床を見つめている。榊は腕をつかんだ。
「帰ろう。司令官さん、連れて来たんだから帰りの面倒も見てくれるんでしょうーね」
「待て」
静かな声で、キーラーが呼び止めた。ぞろぞろとドアに行きかけた一同が足を止める。
「帰してもよいが、その前に現在の地球が置かれている状況をもう一度考える気はないかね」
「――なにを！」
榊が振り向く。キーラーは、突然に疲れたような表情を見せて、シートに体を沈みこませた。
「先日――といっても、かなり前のことになるが、敵〝宇宙人〟からのメッセージが、何の前触れもなしに我々の星間通信回線にまぎれ込んできた。それも、完璧な英語で、だ」
キーラーは博士に目を向けた。

「博士にも、この機会に聞いておいてもらおう。奴らが、どういう意図を持って、何を言って来たのか――」
「ファースト・コンタクトやったの!?」
榊が声を上げた。キーラーは首を振る。
「コンタクトではない。一方的なメッセージだ」

マツキは、星の見えない夜空を見上げて煙を吐き出した。
「レッドバグ、お前は今度の仕事を誰から受けた?」
「新宿の職業安定所からだ」
「最近の職安はエスパーのガード役まで斡旋するのか。では、依頼人は誰だ?」
平沢はマツキの顔を見た。
「おまえらの情報網の方が詳しいだろう。民間、軍・官を問わずにどんな情報機関とも連携できるんじゃなかったのかい?」
「知っているのか、知らないのか、どっちだ?」
平沢は、煙草の灰を地面に落とした。
「スイス銀行大手に口座を持つ資金源――それ以上は知らん。いったい何の話を……」
マツキは手を上げて平沢の言葉を遮った。
「本題に入ろう。ブルーサーチに、異星人からのコンタクトがあったのは知ってるか?」

平沢はその後の状況を情報屋のマスターから聞いていないのを思い出した。タバコをくわえる。

「それで？　休戦協定でも結べるようになったか」

マツキは首を振った。

「とんでもない。その逆だよ」

「波長は通常の通信に使われるUHF、発信源は南天ケンタウルス座の方向、デジタル音声信号で、我々が使っている暗号変換回路を苦もなく突破して通信室から流れ出しおった。音声は合成らしく、距離は約三〇〇億キロ以上――それしかわかっておらん。文面が知りたければ通信室で聞かせてくれるだろう」

沖田は、だれたように肘をついたまま、キーラーの話に全神経を集中していた。真田はよくわからないまま、つばさは事の重大さを理解できずに流暢な日本語を聞いている。

榊は、じっとキーラーの顔をにらんでいた。そしてノブはうつむいたまま話を聞いて――いるのかいないのかわからない。

「文面は、法律のように複雑で多岐にわたっていた。彼らなりの皮肉かもしれないな。細かい内容は省く。要点は三つ――

地球人の宇宙開発の即時中止と、それに伴うすべての人員、設備を持って地球へ引きこもるか、あるいはすべての設備と指揮系統を奴ら――異星人に無条件で引き渡し、彼らの監視・監督

下に入るか。
そして、三つ目だ。即時撤退か、無条件降伏のどちらも我々が拒否した場合、異星人たちは惑星破壊を含む全面攻撃をもって地球に対するという」
「惑星破壊……？」
沖田はぼんやりとつぶやいた。理屈はわかっても実感は湧かない。
「つまり、地球そのものをぶっ壊すってのか」
「そんなところまで進んでいたのか……？」
ジルベスターの声はかすれていた。彼はエイリアン・メッセージの具体的な内容を聞かされていない。
「数日中に、全軍に対する統合作戦司令部の発表があるはずだ。宇宙空間にある大部分の基地や艦船の活動は、すでに新しい局面（フェーズ）に入っている」
「そ――それで、バミューダは？　君たちはどうするつもりだ？」
デスクに歩み寄る博士に対し、キーラーはかたく手を組み合わせてデスクの上に置いたまま、表情も変えなかった。
「決まっている。他に選択の余地はない。全面戦争だ」
キーラーは、不意に微笑んだ。
「当然の結論だ。今までも、そうしてきたのだ。今さら正式な宣戦布告があったからと言って、何も変わることはない。今までと同じように、奴らと戦う。考えるまでもなかろう」

「そんな……」
つばさが頭を振った。
「戦いはこれからはじまるのではない。宇宙開発の当初からはじまって、今まで続いてきたのだ」
「地球をぶっ壊すつもりかよ！」
沖田は叫んだ。キーラーは、目を細めて学生たちを見た。
「何のために、我々が宇宙にいると思っているのだ？」
「はん」沖田は肩をすくめた。「戦争やるためだろ」

「とーとー全面戦争か」
夜空を見上げた平沢は、ぷかーっと煙を吐き出した。
「ご苦労なこった」
煙草を口から離してマッキに顔を向ける。
「――で？　そんなスクープ聞かせるために、わざわざ呼び出したわけじゃなかろう」
「今度のメッセージで、奴らの尖兵が地球に潜入していることがほぼ確実になった。つまり、宇宙人が地球人に混じって生活しているらしい」
「ユーフォロジストってのは、突拍子のないことを言い出すからつきあいたくないんだ」
「それらしい活動グループが地球の中に混じっているらしいことは、以前からわかっていた。S

ＣＦへの敵対工作の中に、どうみても地球側勢力と同一視できないものが混じっていたりしたからな。――もっとも、何光年離れているかもしれぬ母星から地球まで宇宙船を飛ばして来る連中だ。地球圏内に入りこんでいない方がおかしいし、現に大気圏内でもＵＦＯはいくらでも目撃されている」

「言っとくが、おれは地球の生まれだぜ、親はどうかしらんが」

「スイス、ミッターマイヤー銀行、口座番号Ｄ－１４６３――君のスポンサーの口座だったな」

「スイス銀行相手によく調べたもんだ。さすがＳＣＦ」

「奴らの資金源の一つだ」

前を向いたままのマッキの手から、長くのびた煙草の灰がぽとりと落ちた。

「奴ら？　――〝宇宙人〟の？」

マッキはわずかにうなずいた。

しばらくの沈黙の後、平沢は耐えかねたように笑い出した。

「マスターの奴、何が信用できる人物だ――だ。それにしちゃ金払いがよすぎると思ってたぜ」

「レッドバグ」

こめかみを押さえて笑っていた平沢は、呼びかけたマッキに顔をあげた。

「君はそうと知らずに宇宙人に協力していたというわけだ」

「それがどうした」

「なに？」

マッキは思わず立ち上がった。平沢はまだ薄笑いを浮かべている。
「俺はただの壊し屋だ。当座の活動資金と、酒が飲めるだけの報酬を払ってくれるのなら、スポンサーは誰だっていい」
平沢はニヤリと笑った。
「好きな仕事を選ばせてくれるなら、悪魔がスポンサーになったって、おれは一向に構わないぜ」

「地球の中だけじゃ物足りなくて、宇宙でまで戦争やろうってのか？」
キーラーは、喚いた榊に目をやった。不思議に柔和な笑いが浮かぶ。
「若いな。うらやましいよ、君たちが。――そう、我々は宇宙で戦争をしているのだ。すべての宇宙開発をあきらめて、地球へ撤退すべきかね」
「そりゃ……」榊は口ごもった。「そりゃあ、宇宙開発って好きだし、いつかは宇宙船で他の星へ行けるようになってほしいと思うけど――」
榊は、キーラーをまっすぐ見た。
「けど、宇宙に出てくのがあんたたちみたいなのばっかりなら、オレそういうのは嫌だ」
キーラーはくっくと笑い出した。
「つくづくうらやましいよ。若いということは――理想だけを追っていられる」
キーラーは、学生たちに顔を向けた。

「だが、我々は進化を止めるわけにはいかない。たとえどんな手段をつかっても、だ」
デスクのコンソールに組み込まれたインターホンが、電子チャイムの呼び出し音を鳴らした。
キーラーは待機(ホールド)ボタンを押さえた。
「話はこれで終わりだ。言いたいことがあるのなら、今のうちに聞いておこう」
五人は顔を見合わせた。沖田はもう一度司令官を見た。
「本気で勝てると思ってるのかい？」
「負けるわけにはいくまい。少なくとも、今までは負けておらんな」
「なら、一言だけ」
榊はキーラーに向いて顔を上げた。すーっと息を吸う。
「勝手にやってろ、この大馬鹿野郎！」

「待て、話はまだ終わっていない」
立ち上がった平沢を、マッキは呼び止めた。
「なんだ？」
「〝カウンター・ミラー〟の占い師はどうしている？」
平沢は肩ごしにマッキに顔を向けた。
「――そうか、彼女もスターボウ計画にひっかかったクチだったな。マッキ・サーカスの次のターゲットか？」

マッキは首を振った。
「新規のスカウトはしばらく休止になる。それよりも宇宙空間の方の騒ぎで人手を取られていてね。フィールドワークよりデスクワークで忙殺されそうだ」
「そのわりに資本力ゼロの私立探偵なんか相手にして、ヒマそうに見えるが」
平沢は、遠く離れているゴミ箱へ吸い殻をはじいた。
「忠告する。今のうちに手を引け。我々からも、あの占い師からも」
「いまいち何が言いたいのかよくわからんな。おれは今、失職中の身の上だぜ？」
「だからといって何もしないような男じゃないだろ、お前は。いいものを見せてやる」
マッキは、コートのポケットからグレーの封筒を取り出して、平沢に飛ばした。
「一つ一つの情報の出所は、全く別々だ。MI6、KGBになる前の赤軍情報部、華僑（CAM）の情報屋や旧日本軍の情報まで入っている。詳細は省（はぶ）いたが、それで充分だろう」
平沢は、封筒の中に入っていた薄手の紙を取り出した。コンピューターかファクシミリのプリントアウトをコピーしたものらしい。
「何だこれは？」
「スターボウ計画の初期調査で、どうしても経歴（プロフィール）を追跡しきれなかった女性がいてね。調査方法（プロセス）を変えてみたらとんでもない結果が出た」
「とんでもない……ね」
それはほぼ二〇世紀初頭にまで遡（さかのぼ）ったデータだった。一九〇〇年代のイスタンブールにはじ

まり、所々に抜けたデータがあるものの現代の日本まで続いている。世界中の都市、どちらかといえば暗黒街のイメージが強いような地区に現れる、奇妙な占い師の記録――

「なんのつもりだ？」

「それがすべて、一人の人間に関するデータだとしたら？」

「沙織が――あいつがそうだってのか？　バカ言え、こちとら三流ＳＦ映画には飽きあきしているんだ」

「それより以前のデータは、さすがに古すぎて追いきれなかったが――もう一つ、面白いものがある」

マツキは、ポケットから一枚の紙を出した。

「見てみろ」

平沢は、マツキの出した紙を見た。

「中国保安省の資料室に偶然に保存されていた。古いアングラ雑誌だよ」

『上海風俗』とかいう題名の、好事家（こうずか）向けの古雑誌の一ページをコピーしたものらしい。日付は一九二〇年の十月、広東語の記事と一緒に載っている粗いモノトーンの写真には、確かに見覚えのある顔が写っていた。ヘアスタイルや着ている服は似ても似つかないが、色白の憂い顔は幹本沙織に間違いない。

「ほお！」

平沢は写真に目を近づけた。

「彼女は大陸の生まれか」
「彼女がここに来るまでの足跡を追ってみたら、こんな結果が出ちまった。見ての通りだ、彼女はこの一世紀近く、あの姿のまま世界中に出没している」
「それで？」
平沢は、封筒とコピーをまとめてマッキに渡した。
「彼女は少なくとも地球人じゃない」
「それがどうした」
「なに？」
「その手の話は趣味じゃないといったはずだ」
平沢はマッキに背を向けた。マッキは立ち上がった。
「もう一度忠告する。手を引け」
平沢は、あいさつ代わりに片手を上げて歩き出した。
「力ずくでやってみるんだな。貴重な情報をありがとよ。じゃ、彼女が待ってるんで」
「……」
マッキは唖然としたまま、暗闇に消える平沢を見送った。

結希と保安要員とともに学生たちが部屋の外に出てから、キーラはインターホンの待機（ホールド）を解除した。

『こちら戦闘情報センターです』
「キーラーだ。何事かね？」
『エイクルス方向のＵＦＯ群に、新たな動きがみられます。先遣部隊と思われる編隊が、地球軌道へ向けて移動を開始しました』
「準光速でか？　第一次防衛圏まで到達するのにどれくらいかかる？」
『ほぼ二十四時間後と思われます』
すると、約七時間前には彼らは動き出していたわけだ――と考えて、キーラーはめまいに似た焦燥感を感じた。
「了解した。指揮系統へデータをまわしておけ」
『承知しました』
キーラーはインターホンを切った。壁際でデータを呼び出すまでもなく、コンソールをさわっている博士を見やる。
「〝大馬鹿野郎〟か。よくも言ってくれたものだ」
「珍しく反論しなかったの」
キーラーは顔をしかめた。
「今度のことを伝えるために、本部が各国首脳と連絡を取ったそうだ」
「それで？」
博士はキーラーに向き直った。

「売国奴の集まりの言うことなど、取るに足らんとよ。対地球非干渉の原則がなければ、奴らの上にミサイルを落としてやりたい」

元来、ＳＣＦには各国の軍部、政府機関出身者が多い。中枢や腕っこきがごっそり抜けて、地球上のどの国にも属さない組織を形成したため、大抵の者は母国機関から疎まれている。ＳＣＦのような、どの勢力にも属さない巨大組織というものは国際政治にとって幽霊のようなものらしい。

「いっそのこと、奴らが地球をぶち壊してくれればすっきりするのだが」

「そうなれば、国家の亡霊が砕けた地球の破片を取り合うだろう。だが――」

博士はキーボードを操作して、常時回線に流されている地球の実映像を出した。

「現在の地球でなく、未来の世界を守っていると思えば腹も立つまい」

「未来をね」

キーラーは、壁面に組み込まれている三〇インチのモニターに映し出された地球へ目をやった。

「何年先だ？　奴らがあきらめるか、地球人が自滅の可能性を拭い去れるまでに、何世紀もちこたえればいい？」

「現代の人類では無理だろう。だが、次世代の者たちなら――」

博士は、薄汚れた白衣のポケットからフロッピーディスクを取り出した。

「ちょっと借りるよ」

副電源スイッチを入れた博士は、ディスクドライバーのスリットにフロッピーを差し込んだ。モニターの地球に重なって、ずらりとデータが呼び出される。
「ルナベースにいる時からかかっていた研究というのは、それか？」
「まあそうだ。いわゆる超能力のうち、ＰＫと呼ばれるもの――サイコキネシス、サイコクラッシュのような物理現象の場合、それに要する力（エネルギー）はどのような伝達経路をたどるのか。早い話が、超能力者はどこから力を得ているのか」
「何のことだ？」
「学生たちが探偵に連れられてルナベースを脱出した時のことは覚えているだろう」
「ああ」
博士は、キーボードをたたいてサブディスプレイの一つにワイヤーフレームで描かれたスペースシャトルのモデル図を出した。
「Ｎ・コマキのサイコキネシスを計算してみた。百トン強のシャトルを、あれだけ俊敏に振り回すためには、二万馬力近いパワーをコンスタントに出す必要がある」
「二万馬力？　――推力六トンのロケットと同じパワーではないか」
「しかも、その力を放出しているのは体重五〇キロにも満たない、どこにでもいるような少女だ。そんなエネルギーを、どこから取り出したのか――」
キーラーはデスクから身を離して、シートにもたれこんだ。
「わからんな。高次空間を経由して伝達されるというような説を昔聞いたことがあるように思う

が」
「それを確かめるために、〝ダバック〟とダイアナ衛星を貸してもらった」
光学ディスクのデータから、実映像が取り出された。地球の代わりにモニターに映し出されたのは、タイプⅡの球型ミサイルと向き合って宇宙遊泳をしている宇宙服の静止映像だった。
「写っているのはカズサ少尉、彼女にちょっとした実験をしてもらった」
映像に重なって、細かいデータリストが出た。
「ダイアナ衛星の重力検出器を、彼女に向けて絞りこんだまで目の前のボールを動かしてもらった。少尉自身とボールの運動エネルギーは宇宙船側から常時モニターした。もし、サイコキネシスのエネルギーが他の空間から送り込まれて来るのなら、それがどんな微弱なものであっても空間の揺れとして検出されるはずだった」
「それが、どうなったね？」
キーラーは興味なさそうな声で訊いた。
「予想外の結果が出たよ。一キロワットもの力を放出するあいだ、彼女のまわりの空間はふらりとも揺れなかった」
「超空間ではない、ということか」
「それだけではない。彼女自身も静止したままで、サイコキネシスによる反動などをまったく受けなかった。では、ボールに加えられたエネルギーはどこから来たのだ？」
「彼女はエスパーだ。頭の中からでも出したのだろう」

「どうやら、そうらしい」
博士は認めた。
「サイコキネシスというものは、ニュートン力学を根底から無視しているようなところがある。作用点も、反動もないような物理現象など、存在するはずがない。――エネルギー恒存則というものを知っているかね？」
「初歩的な法則だな。閉じた系の中では、外から力を加えない限り、その中のエネルギー量の総和は一定である――」
「その法則を、わが全宇宙に対してあてはめてみようか。ビックバン以来、わが宇宙のエネルギーの総和は、一エルグたりとも変化していない。星になったり、光になったり、その形は刻々と変わっているがね」
「いったい何が言いたいのかね？」
科学者らしい無茶苦茶な話の飛び方に耐えかねて、キーラーは自分の前のディスプレイを消した。博士は、モニターに映っている球型ミサイルに手をあてた。
「この物体に与えられたエネルギーは、他のどのエネルギー系をも損失させずに発生している。言い換えれば、ビックバン以来変化していないはずの全宇宙のエネルギー量の総和が、このボールの運動エネルギー分だけ増加したことになる」
キーラーは、そっけなく言った。
「この宇宙が、たった一人の超能力者のために変化したというのか」

「とるに足らん、ほんのわずかな変化だがね」
博士は、壁ぎわの椅子代わりのコンテナに腰をおろした。
「だが、わずかなエネルギー量の変化でも、確かに〝無〟から、〝有〟を生み出しておる……有史以前に、それが出来た者が一人だけいたな」
「無から有を生み出す――神か」
キーラーは、ここしばらく教会に足を踏み入れていないのを思い出した。
「〝光あれ〟。すると光があった――」
聖書の文句をつぶやいてから、キーラーは皮肉な笑みを浮かべた。
「では、超能力者は神になれるのかね」
「わからん」
博士は疲れたように首を振った。
「だが、人が意思の力で物理法則すら超えることが出来るのなら――」
博士は顔をあげて、うつろな笑みを浮かべた。
「少しは人類の未来に希望が持てると思わんかね？」
キーラーは首を振った。
「人間は、超人ではない。まして、超能力者でも神でもない」
「人類学的な見地から言えば、超能力者と普通人の間に肉体的な差は全くない。これはつまり、誰もが超能力者になれる、ということだ」

不意に、博士はひどく絶望的な顔をした。
「誰もが、賢人になれるように……」
キーラーは、デスクのコンソールに手を伸ばしてモニターの映像を消した。
「次世代の者たちとは、超能力者のことかね？」
博士は、じっと床を見つめたまま首を巡らせた。
「違うと思う。もし何代か後に、新人類と呼ばれるような者たちが出て来るのなら――出て来ると思うがね――超能力者は、我々にとっての新人類ではあり得ない」
博士はキーラーに顔を上げた。
「超能力や超感覚というものは、特殊化しすぎている。もしこれが進化と呼べるものなら、もっと一定化したレベルのものとして現れるはずだ」
博士は、今までに会った超能力者たちの顔を思い出していた。
「超能力者の数だけ超能力の種類があるような、そんなばらばらで力も強さもみんな違うというのは進化ではあり得まい」
「では、なぜ超能力者などというものが存在するのかね？」
キーラーは鋭い目でジルベスターを見ていた。博士はぽつりと言った。
「彼らは切り札ではないかと思っている」
「切り札？　何のための？」
「進化、だ」

博士は目を閉じた。
「わたし個人の幻想かもしれんがね、そう仮定すると納得できるのだよ。ネアンデルタール、クロマニョン人から現生人類（ホモ・サピエンス）――進化というものが単なる環境適応なら、人類は進化する必要などない。今以上に前進するためにどうしようもない状況に落ち込んで、それでもなお前へ進もうとするから、あのような因果律を超えて見えないものを見たり、物理法則を超えてできないはずの事をできる者たちが生まれるのではないか」
「なるほど」
キーラーはデスクに手をついて立ち上がった。
「では、超能力者を戦いに投入することでしか生かせぬ我々は、滅びるしかなさそうだ。――指揮所に戻る」

「こうもりが四つ、ためいきが一つ、人魚が二人――」
「なんだ、それは？」
「呪文。うーむ、違ったかな」
「ドアあける呪文ならあれだろ。えーと――開けゴマ」
「やめんか！」
沖田は喚いた。
「声紋パターン認識のロックじゃないと、何度言えばわかる！」

「だってなー」
榊と真田は顔を見合わせた。
「いいから、しばらく黙ってろ！」
沖田は、潜水艦のものを流用したような形のドアハッチのロックに、ヘアピンを持ってかがみこんでいるつばさに向いた。
「――出来そうか？」
「話しかけるな、気が散る！」
一同は、資材置き場らしい小部屋に閉じ込められていた。無愛想な特殊建材のパッドがむき出しになった部屋で、空のコンテナケースが二つ三つ転がっている以外に家具らしいものはない。
「開きますかねえ」
ハンドルで、枠にドアを押しつけて気密を保つタイプのドアらしい。少なくとも、ドア本体には電磁ロックなどの電子錠の類は見られない。
「どーですかねえ」
榊は真田に相槌を打った。
「編集長、並のカギなら間違いなく開けられるんですがね」
「並のカギじゃないように見えますがね」
「まー、期待しないで待ってましょ」
榊は、真田から離れて壁ぎわでうずくまっているノブの所へ歩いていった。隣に腰をおろした。

「どうしたの？」
「ん？」ノブは顔を上げた。「何でもない」
「何でもないよーには見えないんだけど」
「……」ノブは、ひざの上で組んだ腕に顔を埋めた。「つかれちゃった」
目を見開いてから、榊はうなずいた。
「無理もないや。東京から飛行機で南海の無人島行って、潜水艦にもぐりこんで、今じゃ衛星軌道の宇宙基地だもんな」
榊はふわあとあくびをしながら、ドアの所でつばさの手元を覗きこんでいる沖田に目をやった。
「神経がもとからズレてないと、おかしくなりそーだ」
「こら」
くるっと振り向いた沖田が、軽金属の床の上をずかずか歩いてくる。
「誰に向かってゆーとる、誰に！」
「べ、別に誰とは……わ、迫らないで」
「開いたあ！」
つばさが声を上げた。
「やったね、これなら将来金庫破りで飯が食える」
「ホントかよ」

「なによ、あたしの腕、信用しないの？」
「いや、どっちかってェとおまえ破壊工作向きだから」
言いながら、沖田はハッチのハンドルに手をかけた。
「どーゆー意味！」
「お、開いてる、えらいえらい」
ロックされていた時は動かなかったハンドルが、簡単に回った。
「外、誰かいるんじゃない？」
ドアには窓一つ付いていない。無造作にハンドルを回し続ける沖田に、つばさが心配そうにたずねる。沖田は顔をしかめた。
「そんなことまで俺が知るか！」
ハンドルによって押さえつけられていたドアが、気密シールから浮き上がった。
「行くぞ！」
沖田はそろーっと内開きのドアを開けた。すき間から首を出す——とあわててひっこむ。
「どうしたの？」
「いた」
一言だけ答えた沖田に、つばさが喚き散らす。
「誰が！　警備兵？　どーやって逃げんのよ！」
「あーうるせえ！」

沖田はハンドルに手をかけた。
「真田、飛び出すぞ！」「ひええ」
「警備兵、どーすんのよ！」
「てめェのキャンキャン声より、マシだ、GO！」
沖田は一気にドアを開け放った。身を低くして通路に飛び出す。
「休んでるヒマもねーや」
ノブの手を引っ張って、榊は通路に飛び出した。
「とにかく、先に地球に帰ろう」
引っ張られて走り出したノブは、弱々しい笑みを浮かべた。

ACT・9　脱出

沖田は、飛び出したそのままの勢いで、とっさにサイレンサー付きのイングラムを構えようとした警備兵に体当たりをくらわせた。

吹き飛ばされてパイプむき出しの壁に背をぶつけた警備兵に、真田はとどめとばかりにドロップキックを見舞う。

「とりあえず一丁あがり」

立ち上がった沖田は、警備兵が床に落としたメタルストックのイングラム・マック10を拾い上げた。グリップから長い三〇発入りの弾倉（マガジン）を抜いて装弾を確かめる。

「あと何人片付けりゃいいのかねえ」

真田が来た。

「さあね」

「で、どこいくの？」

天井や壁の所々に、照明と一緒にパイプや電線が走っている通路を歩き出した沖田に、つばさ

が訊いた。沖田はサイレンサーで上を指した。
「来たところだ。ジャンク・ヤードとかいう宇宙船ドック」
「あんまり訊きたくないんだけどさ」
榊とノブが追いついてきた。
「そんな所いってどーすんの？」
「出航寸前の宇宙船でもかっぱらうか――」
「宇宙船かっぱらって、今度はどこに行くの？」
「決まってんだろ、帰るんだ」
「誰が動かすの――いや、答えんでええ」
「安心しろ、今回は動かすつもりはない」
潜水艦か大工場のようなせこましい通路を歩きながら、沖田は現在位置を確かめるようにあたりを見回した。
「地球行きのシャトルにでも密航しようと思ってんだが」
「それなら安心ね」
とりあえず沖田の操縦がない、ということでつばさは胸を撫でおろした。
「ちょっと待て」
榊が沖田の肩をつついた。
「地球行きったって、どーせSCFのシャトルだろーが。どーせ行き先はわけのわからん秘密基

地だろ」
「あ、やっぱ気がついた？」
沖田は笑ってごまかそうとする。
「やっぱねー。いや、行き先はイエローサーチか、でなけりゃ大西洋とかの基地あたりになってるだろーと見当つけてんだけど、大西洋ならいくらでも航路あるし、港へ着ければ何とかなると思ってんだが」
「それで？」
「問題は太平洋のど真ん中に降りちゃった場合だよなー。あそこらへんじゃヒッチハイクもできないし――」
沖田は榊に肩越しに振り向いた。
「どーしよー？」
「オレが、んな事まで知るか」
「大気圏に突入してからパイロットおどして行き先ちょっと変更してもらうとか、いろいろ考えてはいるんだけども」
沖田ははっとして声を止めた。通路の先の十字路を曲がって、メカニックらしい作業服の一団がわいわい言いながら現れた。
沖田は、とっさにイングラムをジャケットの裏側にかくした。
「平気な顔して歩いてろ。知らんぷりしてすっとぼけるんだ！」

「えー、知らんぷり知らんぷり」
つぶやきながら、五人はいっせいに平静を装った。相手が気づかないように、気づかないようにと祈りながら目を合わさないように一団とすれちがう。油汚れのあるTシャツやすりきれたジーンズの一団は、英語でやかましく喋りながら五人とすれ違った。
どん尻の榊が、最後尾の黒人の巨漢をよけるようにわずかに外側へ歩いた。すれ違い終わって、ほっと息をつく。
「おい、ちょっと……」
「うわあ！」
後ろからいきなり肩をつかまれて、榊は思わず殺されそうな声を上げた。びっくりした声の主があわてて手を離す。反射的に振り向いた榊は、黒人のメカニックとにらみ合う格好になった。
「ななな何か用ですか」
かろうじて日本語を絞り出した榊に、身長二メートルもありそうな黒人は困ったように顔をしかめた。
「どっから来たね？」
「すいません、こいつ地球から来たばっかりで、ちょいとノイローゼ気味で」
榊がつかまったと見るや、すぐ手持ちのイングラムを真田にほうって渡した沖田が、へこへこ笑いながら来た。
「しばらく寝かせとこーと思いまして」

相当ぶっちゃけた米語(スラング)で言いながら、沖田は硬直しちゃってる榊の手をつかんだ。
「おい、行くぞ」
短く日本語で言って、そのまま歩き出す。しばらく煙に巻かれたような顔で五人を見送っていたメカニックが、声を上げた。
「おい(ヘイ)、待(ウェイト)て！」
「誰が待つか！」
沖田は足を早めた。つられてみんなも早歩きになる。
「ヘイ」
メカニックの一人が五人に向かって駆け出した。走る足音が近づいてくる。
「まったく、余計なところまで気が回るんだから……」
沖田はつぶやいてから、手を上げた。
「逃げろォ！」
「うわあー！」
いいかげんプレッシャーをためこんでいた一同が、解き放たれたように走り出した。
「どっち行くんだ、どっちへ！」
先頭の沖田に、イングラム片手の真田が喚いた。
「とにかく上だ！　どっかにエレベーターか、階段ないか？」
乱暴に溶接されたようなパネルがあったと思うと、いきなり通路が一段高くなった。金属地む

き出しの今までのブロックにくらべて、こちらは突起やパイプがきれいにクッションでカバーされて洗練された感じの通路が続いている。ドアも、一定の規格品らしいものが壁の両側に整然と続いている。

増築に増築を重ねている居住リングの、別の増設部分に入ったらしい。前の通路にくらべて床がわずかに坂になっているように見えたのは、居住リングそのものが輪状に接続されているせいだろう。

「連れてこられた時は、こんな方、通らなかったわよ！」

「じゃ、てめェなら道わかるのか！」

後ろから追っかけてくる一団をちらちら見ている真田が、走りながらケンカをはじめた沖田とつばさに叫んだ。

「この非常時に論争はじめるな！」

「るせえ！　つばさ、てめェ道わかるってんなら案内してみせろ！」

「わかったわよ、こっち！」

つばさは、何も考えずに白い通路を左へ急に折れた。

「うわっ、急に曲がるな！」

行き過ぎていた沖田が急ターンして戻ってくる。

「おまえ、考えて走ってんのか！」

刻々と変化する、ドアや壁のブロックナンバーを横目で読み取りながら沖田が訊くと、つばさ

は間髪を入れずに答えた。
「考えてるわけないでしょ！」
「いー、生きてここから出られるのか、心配になってきた」
真田が息を切らしながら自分の首を絞める動作をした。

「五時の居住ブロックで、識別反応のないのが半ダースばかり動きまわってるようですが――」
コントロール・センターの一角で、居住リング全体をモニターしているセクションのオペレーターがグループ・リーダーに伝えた。
最大直径一・八キロに達するリングは、センターがあるブロックを零時として、時計と同じ要領で十二個の部分に分けられている。もっともこれは相当に大ざっぱなもので、原形が失われるほど居住リングに増設ブロックが増えた今では、一時ごとの境界線は明確なものではなくなっている。
「半ダースも？　この忙しい時に、何をやっているんだ？」
「わかりません。ジャンク・ヤードの連中と追っかけっこでもしているようですが……」
オペレーターは、対人レーダーや赤外線センサーで追跡されている五人分の輝点を、ブロック図と重ねてみた。
「やたら細かく動き回っています。呼びかけてみますか？」
「モニターに出せるか？」

「出ると思いますが――」
オペレーターは、五時の居住ブロックD－3の通路の要所要所に取り付けられている監視ユニットの広角カメラへ回路を切り替えた。
「映像、出ます」
ブルーサーチの全職員は、勤務中は認識（ID）カードを持ち歩くことを義務づけられている。このカードは常時、特定周波数の電波を発信しており、それによりステーション内なら誰がどこにいるかモニターできるようになっている。ジャンク・ヤード所属のメカニックたちに追われているらしい五人がゆがんだ広角レンズの視界を駆け抜けると同時に、どこかのブロックから緊急警報（アラート）が入った。
「何事かね」
サブパネルの一つに、六時のブロックからの管内通信（インターコム）が入ってくる。
「――五時F－5の空き倉庫から、ラーナⅢの誤射で地球から上がってきた学生たちが脱走したそうですが」
「脱走？」
チーフは慣れた手付きで目の前のパネルを操作した。関連データが出てくる。
「この連中か。モニターシステムもない部屋へほうり込むから……」
「あの、司令代理殿に伝えますか？」
オペレーターは、キーラの居場所を探した。IDカードの反応はすぐ見つかった。

「セントラル・コアの情報センターにおられるようですが」
「〝ベルネード〟は二〇万キロ地点で固定、〝フィシリアⅥ〟は、七五万キロまで前進しろ。ルナベースの戦術部隊はどうした！」
キーラーは、セントラル・コアの戦術情報司令部でUFOの先遣部隊に対する布陣を敷く指揮をとっていた。
「百万キロ・エリアの基地群は迎撃態勢を整えたのか？」
地球重力圏外に地球を囲むように設置されている太陽系周回惑星軌道上の人工惑星群にまで、常時臨戦態勢から迎撃態勢へのシフト変換をかけて、SCFはUFOに対する迎撃態勢を整えつつあった。
「司令」
室内の照明はすべて消され、モニターと計器の明かりだけになった室内で、メッセンジャー役のオペレーターがキーラーに向いた。
「リングのコントロール・センターから連絡が入っています」
「こちらに回せ」
キーラーは、司令官席のサブ・モニターの一つに出た伝文に目を落とした。すぐにインカムをとってキイボードに直通のナンバーをたたきこむ。
「キーラーだ。リング内で、必ず奴らを捕らえろ！」

「今、手空きの保安要員を総動員して追いかけますが――」
コントロールセンターのチーフは、五人の反応が消えたモニターに目を走らせた。
「モニター・システムが死んじまってるブロックに入ったようで、現在位置は不明です」
『今回はレッドバグ抜きなのだぞ。学生だけで、てこずるはずがない。早く捕まえろ！』
「もちろんです。――了解しました」
チーフは、キーラーに怒鳴られた耳を押さえてインカムを切った。
「ふー、奴ら、今どこにいる？」
「探してるんですが、見当たりません」
居住ブロック内のモニター・システムは完全というわけではない。増設部分や改装ブロックではモニター・システムの設置が間に合っていない所は多いし、設置されていても回線が具合悪かったり故障で作動していないブロックは二割近くに及んでいる。学生たちは、どうやらそうしたブロックの一つに入りこんでしまったらしい。
「五時のB－4か――」
チーフは、二つの居住エリアに挟まれたブロックの3D図をモニターに出した。昔は機械室、今は上のブロックからはみ出した水耕農場とリサイクル・システムの機械が詰まっている所である。
「また選りに選って、厄介なところに逃げこんでくれたもんだ」

「なんとか撒けたよーで……」
胸を押さえて息を切らせている真田が、今飛び込んできた半開きのハッチから非常灯しか点いていない通路を覗いた。遠くを駆けていく足音が薄汚れた金属壁に反響してくるくらいで、人影は現れない。
「で、ここはどこだ」
はあはあ息をつきながら、榊は天井にずらりと並んでいる太陽灯を見上げた。コンテナのような棚が何重にも並び、種々様々な緑の葉が一つ一つのコンテナの上に繁っている。
「農場か何からしいな」
むっとするような湿気と熱気に、入って来たハッチの横のパネルにもたれて手をぱたぱたやっていた沖田が広い温室内を見渡す。
「野菜か何か作ってんだろ」
「みたいね」
床にへたりこんで肩を上下させているつばさが言った。
「そこのキュウリの葉っぱやグリンピース、見たことある」
「で、ここらへんはどこらへんだ？」
「先頭切ってたのはつばさだ。どーぞ」
「知るわけないでしょ、とにかく振り切ることしか考えなかったんだから」
「まァ、あれだけ無茶苦茶走り回ればついて来れんわな」

沖田がしたり顔でうなずいた。
「とにかく上――うわ！」
沖田はあわてて真田をひっぱり、立ち上がりかけたつばさにラリアートをかけて床に押さえこんだ。
「な――むぐ」
喚き出そうとするつばさの口に手をあてて黙らせる。
「来やがったんだよ！　ぼんやり突っ立ってて見つかる気か――イテ！」
口許を押さえた手をつばさにかみつかれて、沖田は手を押さえた。
「そんならそーと言やいーじゃない！　予告もなしにいきなり押し倒しやがって！」
「喚くな。今度から襲う時はそう言ってやるから」
「襲うのは勝手にやっていいけどさあ」
身を低くしたまま、四つん這いで榊がノブと来た。
「ずらかった方がいいんじゃない？」
沖田はひざをついてひょっと首をあげた。緑の間から顔を出してあわててひっこむ。
「おまえのゆー通りだ。早いとこ脱け出そう」
「どっから？」
つばさはやっと身を起こして頭を振った。沖田は軽く、追っ手が入ってきた方のドアへ手を振ってみせた。

「あっち」「え？　ちょっと待って」「ついて来な」
沖田はプラスチックの床の上に身を伏せると、コンベア式にゆっくり動いている緑の載ったコンテナの下のスペースに滑り込んだ。
「待ってよー」
思わずスカートを押さえるつばさの横から、真田がコンテナの下にもぐりこむ。
「宇宙ステーションまできて匍匐前進やらされる羽目になるとは思わなかった」
「先行け――とゆーわけにはいかんか」
スカート姿で顔見合わせてる女の子二人を見て、榊は床に手をついた。
「んじゃ、先行ってるぜ」
つばさとノブはしばらく顔を見合わせていた。
「あ、あの、先どーぞ」
「いえ、ノブこそどーぞ、あ、そーだ、せーのっじゃんけんぽおん」
勢いにおされて、ノブは思わず手を出した。チョキを出したつばさに負ける。
「んじゃ、先にどーぞ」「わーん」
つばさに押されて、ノブはしぶしぶコンテナの下のすきまに潜り込んだ。
葉や根のかけらが落ちているようなプラスチックの床を這っていく。時々、すぐ近くをどやどやと足音が駆けていくが、立ち止まらないところを見るとまだ見つかっていないらしい。
「おい」

真田は前を行く沖田に小声で呼びかけた。
「おい沖田、こら、返事せんかい」
むんずと足首をつかむ。びっくりして頭を上げた沖田は、頭上のコンテナにしたたか頭をぶつけた。
「なんだよ、こんな所で呼びつけやがって。おーいて」
「向こう側のドアじゃ遠すぎんか」
進路方向を指す。
「向こうが一番いいの。追っかけてる方だって、自分が来た所から逃げられるとは思わねェ」
「そりゃいいんだけどさ、後ろ」
真田は後方を指した。榊以下三名は相当に遅れている。
「あの調子じゃ、いくら何でも着くまでに見つかるぜ」
「ったくあの連中はあ。何をとろとろとやってやがんだ」
「でさ」
真田は今度は左方向を指した。
「あっち行かない？」
「はじっこに行ってどーする？」
「見えない？　壁の所、ドアがある」
言われて、沖田はコンテナの下を見通してみた。三列ほど向こう側に壁があり、ドアの縁らし

いものが床にそって見える。
沖田は進行方向に目をやった。まだ三分の一も来ていない。
「どっちに何があるのかわからんのじゃ、どっち行っても同じだろーし……よし、あっち行こう」
沖田はコンテナとコンテナの列の間の通路に顔を出した。誰もいないのを確かめて、隣の列の下へ転がり、下でくるりと方向を変えた。
「先行ってろ。連中呼んでくる」
「あいよ」
沖田はさっさと今来た方向へ前進をはじめた。

「うー、つかれた、腕がだるい」
榊はぶつくさ言いながら、コンテナの下で匍匐前進を続けていた。
「沖田も真田も勝手に先行きゃあがるし、ったく友だち甲斐のない奴だ――ん？」
目の前にナスが転がってきた。手にとってみる。
「なんだ、このナスは」
「どうかしたの？」
止まってしまった榊に後ろから、ノブが訊いた。
「いやな、ナスが――うぎゃ」

低空をすっ飛んできた何かが榊の側頭部に命中した。思わず頭に手をやった榊の手に、ねっとりした赤いものがべっとりとつく。

「うわあー、血ノリだ、赤い絵の具だ、トマトケチャップだあ！」

手首を握ってのけぞった榊は、すぐ上のコンテナの底に頭をぶつけた。

「あれ、沖田くん」

びっくりして飛んできた方向を見たノブが言った。榊はうがあと頭を押さえたまま隣のコンテナの下を見る。もう二、三発投げてやろうかという姿勢でトマトを握っていた沖田が、頭上のコンテナにトマトを返した。手でこっちへ来い、のジェスチャーをする。

榊は訳のわからぬまま、うなずいてOKサインを出すと、コンテナの下から這い出た。

「あ、あのバカ、左右も確認せずに……」

「このやろー、何を考えてトマトなぞぶつけやがった！」

沖田の前に榊が滑り込んできた。

「ならナス一個で気がつけ。行き先変更するぞ」

「どこへ？」

「あっちだ、ほら、あと二人も」

沖田は、まだコンテナの下でぐずぐずしているノブとつばさに早く来いというように手を振った。何も確認せずに二人が転がり出てくる。

「あー」

またやったと沖田が目を覆う。
「止まれ！」
通路上で転がるつばさが、いきなり怒鳴られた。つばさは反射的に半身を起こして声のした方に振り向いた。AK47みたいな軍用ライフルをかかえた警備兵が通路を駆けてくる。
「……」
「何をぼけっとしとるんだ、このバカが！」
飛び出した沖田が、思わず動けなくなってしまったつばさをコンテナの列の下にひきずりこむ。
「いたぞ！」「こっちだ！」
「見つかっちまっただろーが！」「呼んだのはあんたでしょ！」
「そーゆーことやってるヒマないでしょ」
榊がコンテナの下ではじめた二人の間に割って入った。
「あっちってどっちだ？」
沖田は、つばさをひとにらみしてから反対側の通路へ転がり出た。
「こっちだ！」
「わっわわ」
沖田は一列目のコンテナを飛び越えた。水耕農場全体に散っていた警備兵が一度にこちらへ集まってくる。

「こっちでいいの？」
一つめの棚をダイビングしてくぐり抜けた榊が喚いた。つばさも飛びこんで下を滑り、そのまま勢いを殺さずに二つ目も抜ける。
「壁までいきゃ真田が待ってる！」
二つ目はコンテナを登って上に乗り、三列目ごとジャンプして沖田は壁際の通路へ飛び降りた。
「早くー！」
申し訳程度の気密性しかないように簡単なドアハッチを開けた真田が叫んだ。
最後のコンテナの列をくぐり抜けたノブが飛び降りてきた榊に引っ張られて立ち上がり、駆け出した。
「急げ！」
止まれとか何とか喚いているらしい警備兵を尻目に、ハッチの中へ飛びこんだ。待ちかまえていた真田がドアを閉じる。
「えーと、ロックはロックは」
とりあえずハンドルを閉じた真田が付近を探す。
「これでも差し込んどけ」
沖田は壁にたてかけてあった補修用部品らしい鉄パイプを、ストッパー代わりにハンドルに差し込んだ。

「――で、ここどこだ」
榊は息をつきながら薄暗い照明しかない空間を見透かした。明るい太陽燈で一杯だった水耕農場から入ったので、目が慣れるのに時間がかかる。
少しずつ、巨大な塔のような機械が見えてきた。かすかなうなると、巨大なタンクのまわりでのたくっている大量のパイプの細部（ディテール）が見えてくる。
「はーん」
沖田は、すぐ目の前からはるか上までそびえているタワーを見上げた。巨大な木のような、タンクとパイプの構造物である。
「こりゃ、水かなんかの再生（リサイクル）システムだな……」
沖田は、はっとして右を見た。いきなり横なぐりの強力なサーチライトが点灯して五人を照らし出した。
「しまった！」
眩（くら）む目をしばたたかせて、沖田はサーチライトの方から来る人の気配を探った。
「――他にもドアがあったんだ」
真田が入ってきたドアを蹴とばした。
「登れ！」
沖田は後先考えずにリサイクルシステムのパイプに手をかけた。太いのや細いの、さまざまな直径のパイプが組み合わさっているから足場に苦労することはない。

「登れって、どこ行くんだよ！」
下から榊が喚く。
「上だ！　とにかく上行きゃ何とかなる」
わらわらと登りはじめた五人を、サーチライトが照らし出す。後を追って走ってきた警備兵たちもリサイクル・システムの塔を登りはじめた。
「あー、来やがる」
下を見た沖田は舌打ちした。どうみても先行する自分たちより警備兵の方がピッチが速い。
顔を上げた沖田は、先にパイプが集まっている調節用の中継点を見つけた。バルブだの整備（メンテナンス）用のパネルだのが集まっている。
「あ、そーだ」
沖田はろくでもないことを思いついてバルブに取りついた。メンテナンス用のパネルを上げる。スパナやレンチがしっかり揃っている。
「やりィ、ばっちりだ」
「落としてやんの？」
真田が横に上がってきた。沖田はにたっと笑った。
「もっといいこと。先行ってろ、あとからいく」
「何やろうっての？」
ばかでかいバルブのハンドルを全開にまわしはじめた沖田に、登ってきたつばさが訊く。

「見てりゃわかる。いーから先行ってな」
バルブを全開にした沖田は、工具箱から大型のレンチをひっぱり出した。ひと抱えもありそうなパイプの中を、すさまじい勢いで水が流れているのが音でわかる。
「また、しょーもない事を」
榊が登っていった。沖田はパイプの接続部のボルトをはずしにかかった。
「ん――こなくそ、やけに堅く締めてやがる」
はめたレンチに両足を乗せてジャンプしたりして、ボルトをはずしていく。
「おーし、はずれた」
パイプに足をからめて、沖田はレンチを接続部めがけて思いっきりスイングした。簡単にずれた接続部分から、ほとんど真横に水が噴き出す。パイプの振動が一段と大きくなった。沖田はレンチをほうり出して登りはじめた。
全開の水圧に耐えかねた接続部分のパイプが、すぱーんと吹き飛んだ。開放されたバルブから、すさまじい勢いで水が噴き出した。警備兵たちへ集中放水のような勢いで降り注ぐ。
「おっそろしー事するなー」
上から見ていた榊が声を上げた。
「やったね」
沖田が親指を上げてみせる。
「これで連中登ってこれないぜ」

「リサイクル・システム水耕農場が洪水だ？」
コントロール・ルームのチーフは、思わず連絡してきた保安要員に確認しなおした。
「リサイクル・システムのメインパイプが一本ぶった切られて、未処理の排水が鉄砲水やってるんだ！」
ずぶぬれの保安要員は、腰までつかったままシステム室のインカムに取りついていた。
「至急修理班を回して、四番のリサイクル・システムをストップしてくれ！　ブリーザーだけじゃ処理しきれんぞ！」
「わかった、至急処置する」
「チーフ！」
オペレーターがモニターから顔を上げた。
「例の連中を再捕捉しました」
「今どこだ！」
チーフは転送されてきた映像に目を落とした。――顔色を変える。
「五時のスポークのエレベーターで、セントラル・コアへ――ジャンク・ヤードへ向かっています」
オペレーターの声を聞くまでもなかった。五人分の赤い輝点を乗せたエレベーターが、ワイヤーフレームで作図されたディスプレイの映像の中、スポークを通ってブルーサーチの中央部へ登

っていく。
「――ジャンク・ヤードのコントロールに連絡しろ！」
エレベーターの上昇につれて、一Gの重力が減少していく感覚というのは、ジェットコースターで奈落の底まで連れていかれるような異様な感じがした。一度、まだかすかに遠心力が重力として残っているところで停止したエレベーターは、回転部の接続部を通り、回転から切り離されたセントラル・コアに入ってやっと終点に着いた。
円形のエレベーターのドアが両側に開く。出た所で待ち伏せされているんじゃないかと心配していたが、誰もいなかった。五人は使い古しの宇宙服やショートした部品などが転がっている小部屋にふわふわと泳ぎ出た。
一方に、エアロックのような厳重なハッチがある。
「さーてと、いよいよどん詰まりだ」
沖田はハッチのレバーに手をかけた。
「ここから出られさえすれば、帰れる」
「そうね――ここから出られれば」
「お、珍しく素直――」
沖田はつばさに驚いた顔をしてみせてからハッチを開け放った。
「うわ！」
センター・ドックの中へ出ようとして、思わずたじろぐ。すぐ頭の上を構造物丸出しの巨大な

宇宙船がクレーンの轟音とともに通過していった。通り過ぎるのを待たずに、沖田は巨大な無重力空間へ泳ぎ出た。

「うへえー」

出港準備中らしいのやら、整備中らしいのやら色々な宇宙船で、ドック内は相当混雑していた。とりあえずドック内に張り出した係留用らしいアームの横につかまった沖田の隣に、榊が危なっかしげに泳いで来た。

「これだけ広いとスーパーマンできるのも不便だね。ちょっと間違えるとどこまでも飛んでっちゃう」

「それがまたなんとも、はっ」

ハッチから四、五回とんぼを切って飛んできた真田がアームにとりついた。

「なかなか、慣れれば楽しめるぜ」

「残念ながら慣れてるひまないんだよね」

溶接や溶断らしい火花の音や、金属音などでドック内は喧騒に満ちている。いろんな所から作業員向けのアナウンスを音質の悪いスピーカーでがなりたてているが、その中に突然日本語が混じった。

「なんだ？」

『センター・ドック内を逃走中の学生、速(すみ)やかに投降しなさい。そこは危険です。素人が動き回れるような所ではありません。繰り返します――』

「投降しろってさ」「誰がするか！」
女性二人が上がってきたのを見てから、沖田はアームを蹴って飛び出した。空中で、日本語から英語に戻ったアナウンスの内容に腰を抜かす。
『全作業員へ。脱走者の捕獲に協力せよ。ただし、ジャンク・ヤード内での戦闘機及びブースターの使用は厳禁する』
「戦闘機やブースターって……」
沖田は、腕を振って体を回転させた。宇宙船やシャトルがゆっくり動いているジャンク・ヤード内をぐるりと見渡す。
「つまり、この中でそーゆーの乗り回す奴がいるちゅーことか……？」
背後で聞こえた爆発のような音に、沖田は首をねじまげて後ろを見た。
「うそだろー!?」
空気抵抗を考えないで作られた、エンジンとタンクとノズルの化け物のような宇宙機がブースターで壁面から浮かび上がったところだった。不安定な姿勢のまま、派手な煙とともにバーニアをふかしてこちらへ機首を巡らす。上昇の勢いを軽い逆噴射で殺した宇宙戦闘機が、爆発音とともにブースターに点火して、沖田めがけて発射した。
「何ちゅー連中だあ！」
『こらあ、そこのスターライナー！』アナウンスが喚いた。『戦闘機は使うなと言ってるだろうが！』

轟音で聞こえませんとばかりに、むき出しのコクピットに座った上半身裸のメカニックは白煙を噴いてドック内を突進した。コクピットのまわりにも、物好きなのが二人ばかりつかまっている。

「ひええ」

沖田は必死になって空中を泳いだ。接近してくるスターライナーにひっかけられまいと、あわてて足をひっこめる。

器用な操縦でクレーンのアームをよけて突っこんできたスターライナーは、沖田の足先五〇センチを通過した。風であおられた沖田が妙な方向に飛ばされる。

行き過ぎたスターライナーはくるりと一八〇度ターンをして機体の向きだけを変え、ブースト全開のままバックに飛んで自らの噴射煙にまみれながら逆制動をかけた。

「なんてところなの!?」

流れる噴射煙をかきわけてきたつばさが咳きこみながら喚いた。宇宙船の巨大ノズルからステップして戻ってきた沖田が、行き過ぎないようにつばさの首根っこをつかまえる。

「格納庫の中でジェット戦闘機飛ばすよーなもんだぜ。ったく、何て連中だ!」

戻ってきた戦闘機が、今度は少し離れた所を逆噴射をかけてスローダウンしながら飛んでいった。風にあおられるような形で、もうもうたる噴射煙の中から真田が漂い出てくる。

「あ、お邪魔でした?」

二人でつながって漂っている沖田とつばさを見た真田が手を振る。

「何言ってんのよ！」「バカ言ってないで早く来い」「この、この！」
泳いでくる真田に、つばさが蹴りをいれようとするが、反動で体が後ろへもっていかれるため思い通りにいかない。
「小牧ちゃんと榊は？」
「知らん。拙者は編集長より先に飛び出したんだけど――そこらへんいるんじゃない？」
「この煙じゃあな」
噴射煙があたりを漂っているため、ろくすっぽ見通しが効かない。大きなもののシルエットは何とか見えるが、現在位置もろくにわからない。
「――はぐれたかな」
「おーい、さかきー！」
真田が沖田の肩につかまったまま、片手でメガホンを作って叫んだ。しばらく耳を澄ますが、機械音や喚き散らすアナウンスばかりで返事は聞こえない。
「……どーしよう」
つばさが心配そうな顔で、首根っこをつかんでいる沖田を見上げた。
「こっちも空中だからな、このままじゃ――漂ってるから、そのうちどっかにぶつかるだろーが。……あ、そーだ、真田、さっき預けたイングラム貸せ」
「イングラム？　ってこれか？」
真田はベルトにさしておいた軽機関銃を沖田に渡した。

「しばらくつかまってろ」
ほうり上げたつばさを肩につかまらせておいて、沖田はイングラムのサイレンサーを抜きにかかった。
「そんなピストルで何すんのよ」
「ピストルじゃないっての」
ビールの缶ほどもあるサイレンサーをはずした沖田は、それを思い切って投げてみた。反動で、気持ち後ろに進んだような気がする。
「行けるかな？」
「何すんのよ」
沖田は、反動を逃がさないようにイングラムを両腕でしっかり支持した。
「しっかりつかまってろよ。反動が来るはずだ」
なるべく人気のなさそうな方向を狙い、沖田はイングラムの安全装置を解除して引き金を一度だけ引いた。セミオートのため、弾丸が一発だけ発射され、その反動で三人がわずかに後ろに向かって動き出す。
「うーむ、さすがに三人もいると重い。真田、後ろ見ててくれ。とばすぞ」
「あいよ」
沖田は発射レバーをフルオートにセットして、引き金をひいた。
「うわあああー！」

分あたり約一一〇〇発を発射するというイングラムの弾倉はあっという間にカラになった。カートリッジがばらりという感じで飛び出してきて、三人は一気にかなりな速度まで加速された。噴射煙を突き抜けて、視界が戻ってくる。

「うわあ、とっとっ止まれえ！」

真田が声を上げた。すぐ目の前に大型宇宙船のエンジン部分が迫ってくる。

「足をつけ。着地しろ。ほら、手を放せ。ぼけっとしてるとたたきつけられるぞ！」

三人は離れた。空中で体をまわして進行方向を下にする。

着地と同時に、またも轟音がドック内の空気を揺るがした。再び目標を見つけた宇宙戦闘機が、今度は二機同時にぶっとんでくる。

「まっ、また来た！」

「こっちだ！」

沖田は、斜め上で動き出した大型船の主骨格へジャンプした。急旋回をかけた戦闘機のバーニア噴射で目的地と違う所にたたきつけられる。

「大丈夫？」

「ハ、ハナをうった」

顔の真ん中を押さえた沖田が起き上がる。

「大丈夫だ、来い――いや、来るな！」

パイプを振りかざした作業員が、二、三人で襲いかかってきた。あわてて飛び上がった沖田を

追って、忍者のようにジャンプする。
「逃げろ！」
沖田は宇宙船のエンジンブロックでおたついている二人に船首方向を指した。
「くー、思ったより厄介だぞ、こりゃ」
一機の大型戦闘機が、ブースト全開のまま壁面ぎりぎりに突入してきたのはその時だった。大きくはね上げられたキャノピーの前のコクピットで、薄いピンクの宇宙服が片手を高く上げたまま突っ込んでくる。
「……」
避ける時間はなかった。沖田は宇宙服に右手首をつかまれ、腕が抜けるような勢いで引っ張られた。
「こっ、このやろお！」
「つかまっててて！」
パイザーをはねあげたパイロットが前を向いたまま言って、沖田をキャノピーにつかまらせようと手を引いた。声をどこかで聞いたような気がして、沖田は機の先端部から後方へはね上げられたキャノピーにつかまった。耐Gシートから腰を浮かせて視界を確保したまま戦闘機を操縦する、小柄なごく薄いピンク色の重装宇宙服の後ろ姿を見つめる。
「うわ！」
パイロットが機体をぐいっとターンさせた。すべての動きを翼でなくロケットの噴射に頼る宇

宙機が力任せに反転した。ドックの両端部にあるゲートをなめるようにして、再びドック内へ進路をとる。

「逃がしてあげる」

「え？」

風に流されて聞き取りにくい声の主を思い出せぬまま、沖田は進路上を見た。

ドック内に幾条も残っている噴射煙を抜けて、戦闘機が壁面ぎりぎりの低空進入をはじめた。フックに固定された宇宙船とコンテナの間を抜けて、ゆるい上昇に移る。進路上に突っ立っていたアームをよけてわずかに旋回したその正面に、メカニックに追われてふわふわ遊泳しているつばさと真田が見えた。

「つかまえて」

「わかった」

沖田は、機体上部のアンテナユニットに足をひっかけて立ち上がった。

「真田ァ、つかまれ！」

喚きながら、真正面から飛びこんできたつばさを抱きとめる。真田は身をひねって戦闘機のキャノピーの縁をつかまえた。

「な、なんなの沖田？」

沖田の腕の中で乱れた髪をかきあげたつばさがパイロットの背を見た。

「よくわからんが、助けてくれるって――」

「お知り合い？」
「いや、パイロットに知り合いなんかいないと思うけど――」
急な逆噴射をかけて、戦闘機がスローダウンした。反転して壁面に上を向ける。パイロットは壁面に飛び降りた。そのまま浮いている戦闘機から、沖田はパイロットの横へ降りた。
「――おい」
パイロットが沖田を見上げた。いつの間にかヘルメットのシールド越しに濃い鏡のようなサンバイザーがかかっていた。中の顔など見えない。
かまわずにかがみこんだ宇宙服が、足元のハッチを開けた。自分から中へ入り、すぐ、早く来いというように顔をだしてサンバイザーごしに沖田を見上げる。
「おま……まさか」
「ねえ沖田」つばさが沖田を突っついた。「助けてくれるって、罠じゃないの？」
「まさか」沖田はハッチに足を入れた。「罠ならとっくにつかまってるよ――うは！」
すぐ頭上を、小型の宇宙機が轟音とともに通り抜けた。つばさは思わず首を縮める。
「わ、わかったから早く行って」
「お先」
沖田は、宇宙服を追ってハッチの下に消えた。
「結局逆戻りじゃねェか！」

元のエレベーター室に飛び込んでしまった榊はハッチを閉じてレバーを回した。沖田たちを追いかけてアームから飛ぼうとしたのだが、戦闘機がぶっ飛んできてジャンプのタイミングを失い、さらにノブと榊めがけて作業員や宇宙船乗りがわらわらと降ってきたため、やむなくもとのエレベーター室まで退避したのである。

「やばいな……」

榊は、今閉めたハッチと、その下のドアを見比べた。

「ねえ、下行ってみようか」

言われて、ノブは下のドアを見た。

「――だめ！」

あわてて榊の腕を抱いて、来た時そのままにドアが開いたままのエレベーターに飛びこんだ。

「来る。ねえ、早くドア閉めて！」

「え？　えー？」

言ってる間に両方のハッチが一度に開いて、職員と作業員がなだれこんできた。

「わわわ」

榊は、あわてて奥のパネルのボタンを押した。ドアクローズ、ダウン。

作業員たちが殺到する寸前にかろうじてドアが閉じると、エレベーターはリニアモーターの軽いうなりとともに下降をはじめた。無重力地帯から降りるため、自然に体が天井側に浮いてしまう。初期加速が終わると、リングの回転に同期しているエレベーターシャフトの遠心力で、無動

力のまま降りていく。
レベルメーターがどんどん降りていく。シャフトが終わって居住リングに入ると、何度か追加改装されたらしいパネルに表示が移る。
「本当に逆戻りしてしまった……」
榊は頭を抱えている。
「どーしよぉ」
重力が戻ってくる。ノブは黙ったまま、榊にもたれかかった。
「んー？」
「しばらく、こうさせてて」目を閉じる。「こうしてると、落ち着けるの」
「どうしたんだよ、ほんとに。」
榊はノブの肩に手を回した。
「地球飛び出してから、ずっとおかしいぜ」
ノブは榊の胸から顔を離した。見上げて、無理に笑ってみせる。
「はは、わかる？」
「一発で。何暗く沈んでんだよ」
「だって……」ノブは榊の胸に額を埋めた。「またなんだもん。二度目よ、みんなをこんな所に連れて来ちゃって」
榊は溜め息をついた。

「あのね……」
「こんな事、いつまで続けなきゃなんないの？」
「つきあってやるから安心しろって」
ノブは榊を見上げた。押しつぶされて泣き出しそうなノブの顔を見て、榊は溜め息をついた。
「もしおまえがテレパスなら――」
「え？」
「テレパシーが使えりゃな」
榊はノブを抱く腕に力をこめた。
「多分、何も言わないでもおまえを安心させられるのに」
ノブは息を止めた。
「……普通の女の子だったらよかったのに……あたしが普通の女の子だったら、こんな所来なくても、逃げなくてもよかったのに……」
「バカ言え」
榊はノブから体を離した。顔に両手をあてて向かせる。
「おまえが超能力者だから、オレと会えたんだぜ」
ノブは目を見開いた。何か心の中ではじけた。
指定階まで降りてきたエレベーターが軽い加重をかけて停止した。ドアが開く。冷たいメカニックな感じの通路が続いている。

榊は表示パネルを見て、上を見上げた。
「今さら戻るってわけにいかないからな――……出ようぜ」
「ジャンク・ヤードから二人ばかり戻ってきたようですが――」
コントロールルームのオペレーターは、十時の居住リングの対人レーダーが捉えた二人分の反応を追っていた。
「モニターの視界に入ります。ブロックR－8」
「外縁部に近いか――」
十時の居住リング上を移動する二つの赤い輝点を確認したチーフは、モニターへ目をやった。コントロール式の自動カメラが、R－8ブロックの通路を歩いていく二人を捉える。
「R－8――研究所ブロックか。保安要員をまわせるか？」
ヘッドホンに手をあてたオペレーターはチーフにOKサインを出した。
「大丈夫です。六時のブロックの人たちが今リニアカーで十時に着きました」
「結局、こーなるんだからあ！」
喚きながら、榊はノブの手をつかんで走っていた。要所要所にインターコムのようなパネルがある広い通路だが、早くも現在位置がわからなくなりはじめている。
後ろから、警備兵らしい一団が追いかけてくる。止まれだの何だの言っているらしいが、英語

で喚かれても何を言っているのかわからない。
「ったく戦車よりもたち悪いぜ！」
「えー、なにー？」
「しつこいってーの！」
榊は十字路を右に曲がってすぐの、プラスチックの壁にあいていた細い脇道へとびこんだ。
「どこだー、ここは？」
金属壁むき出しの保守点検用のトンネルのような細い道である。裸電球が点々とついているが、二人並んで走ることはできないくらい狭い。
「どーしよ」
立ち止まって悩んでいるうちに、一度は主通路を通り過ぎた警備兵たちが戻って来た。
「わわ、悩んでるヒマない」
榊は、ノブを連れて通路を奥へ駆け出した。警備兵たちはぎゃあぎゃあ喚きながら追ってくる。
十字路を急に折れた榊は、そのまま配管だらけの角にぴたっと張りついた。素知らぬ顔で通路に足を出す。
同じように壁に張りついたノブが、あえぎながら訊いた。
「逃げないの？」
「追っつかれちゃうでしょ」
走ってきた先頭の警備兵が榊の足にけつまずいて転がった。

「それ逃げろ！」
榊たちは後も見ずに駆け出した。すぐ後に続いていた警備兵たちは次々に転んで通路を埋める。
「やった」
榊はVサインを出した。
「少しは時間稼げたぜ」
工事現場のような通路を曲がりくねって追っ手を撒きながら進むと、錆(さび)だらけの細いらせん階段に突きあたった。上方へのハッチはレバーが完全に錆びついていてまったく動かない。
「下行くしかねーか……」
赤錆の浮いた手すりに手をかけて、榊は階段を降りていった。ノブは恐るおそるついてくる。
一番下までいくと、簡単な鉄のドアが閉まっていた。力まかせに蹴り開ける。
「――ん？」
奥の暗い部屋へ首を出した榊は、首を傾げた。
「妙な所に出たな」
榊は、硬質プラスチックらしい床に足を踏み出した。あとからノブが入ってきた。
薄暗い部屋である。意外に大きいらしく、がらんとしている。
「いったい何なんだ、ここは」
「ひ……」

ノブが押し殺した悲鳴をあげた。振り向いた榊に、足元を震える指でさす。
「――！」
足元に深い宇宙空間が広がっていた。茫然と立ちすくんだノブがぺたんとへたりこんでしまう。
榊は床をそっと蹴ってみた。硬質な音がする。
「床が全面ガラス張りになってんのか……」
暗い深淵の底で、微細な砂をばら撒いたような星が光っている。非常にゆっくり動いているように見えるのは、リングが自転しているからしい。周辺空域の宇宙船や長距離レーダーの骨組みがまるで玩具のように浮いていた。
榊は額の汗をぬぐった。
「――心臓に悪いところだ」
「あっ」
ノブが小さな声をあげた。床の端から青い光が斜めに差し込んできた。下からノブを照らし出す。
地球だった。リングの回転につれて、足の下に地球がまわりこんでくる。ほぼ全面に太陽光を浴びた〝満地球〟に近い状態で、暗い宇宙空間にぽっかりと浮かんでいた。
「最外縁部の、非常脱出用カプセル？」

宇宙服はうなずいた。くぐもったような声で説明をはじめる。
「四人乗りで、自動的に地球に向けて射出されるようにセットしてあります。作動手順は――」
宇宙服に連れられた沖田、真田とつばさの三人は、エレベーターで居住リングに引き返していた。宇宙服の人物はバイザーをおろしたまま顔を見せようとしない。
エレベーターが指定階についた。ドアが開く。
「あちらの方向です」
宇宙服は、エレベーター・ターミナルから広がっている通路の一つを指差した。
停止したエレベーターの中から、誰も動き出そうとしなかった。怪訝そうな目付きで宇宙服を見ているつばさを、沖田がこづいた。
「先行っててくれ、道順はさっき聞いた通りだ」
「何よ沖田、どーすんの」
「いいから先行ってろって。すぐ追いかける」
二人をエレベーターから追い出した沖田は、宇宙服のパイロットに向き直った。
「顔見せてくれてもいいだろ。転校生――和紗結希」
バイザーに沖田を映していたヘルメットがうつむいた。のろのろと上がった手が気密シールを はずし、フードごとヘルメットを持ち上げる。ショートカットの髪を振って結希は顔を上げた。
不思議な色の瞳が沖田を見る。
「やっぱりね」

沖田はドアが閉まらないように もたれかかった。
「わざとらしくサンバイザーなんかしやがって――助かったぜ、ありがとよ」
沖田はわずかに顎をひいて結希を見つめた。
「だが、何で逃がしてくれるんだ？　反逆罪くらうぞ」
結希は首を振った。
「あの人――小牧ノブさんは助けてないから」
抑揚に欠ける、やや高いが落ち着いた声で結希は答えた。沖田は肩をすくめた。
「なんで助けてくれた？」
結希はついっと沖田から目をそらした。
「デートに誘ってくれたお礼」
沖田は軽い頭痛を感じて頭に手をあてた。
「……ま、いーや。それじゃも一つ……」
沖田の質問が言葉になる前に、結希ははっとして沖田の顔を見た。
「おまえ、平気なのか？　どうして平気な顔をしてられるんだ？」
結希は首を振ろうとした。テレパシーが、人にはない特殊な能力だと気がついて以来、貯め込んで来たものが頭の中からあふれそうになる。結希はゆっくり目を閉じて顔を伏せた。
「――テレパスだから？」
沖田はうなずいた。結希は顔を上げて笑ってみせた。

「ひどいところばかりじゃないもの」
「え？」
「テレパシーって、ひどいところだけじゃないもの。同じように、素敵なところだって感じさせてくれるもの」
沖田はドアから身を起こした。
「そんなこと言ったって……おまえ」
結希は、後ろ手にドアクローズのボタンを押した。エレベーターのドアが閉まりはじめ、沖田は反射的に身をひいた。
最後に見た結希の顔は、沖田に向かってきつく目を閉じたまま、あっかんべーと舌を出していた。ドアが閉じて、エレベーターが、ジャンク・ヤードに向かって上昇していく。
沖田は走り出した。エレベーター・ターミナルをシャフトに沿ってまわる。
「あー……」
沖田は足を止めた。エレベーターの裏側の通路につばさがもたれて待っていた。
「先行けったろ」
「あの人、転校生――でしょ」
行きかけた沖田は、つばさの顔を見直した。
「あたり」
「何話してたのよ」

「世間話。いくぞ、脱出カプセルの確認だけでもやっときたい」
走り出した沖田につばさが追いついてくる。
「どーして、あの娘が助けてくれるの」
沖田は顔をしかめた。
「俺もそれを訊きたかったんだけども――」
沖田は、なぜか結希の部屋で見たてるてる坊主の顔を思い出した。
「あいつ、肝心なこと何も言わねェから。ったく、何考えてんだろ」

足元の地球は、一目で直径一万三〇〇〇キロに達する全景を見てとれるほどに小さく見えた。中央アジアからインド洋に至る経線より西側にわずかに夜の闇に閉ざされた部分が見えるが、うすく白い雲をかぶっている東南アジアから日本、オーストラリア大陸、美しい水色の太平洋までが見えた。
「――小さいわね」
ぺたんと座ったまま床に手をついたノブがぽつんとつぶやいた。床のガラス面にあてた自分の手と地球を重ねてみる。
「あれだけの大きさしかないよ」
「あれでも結構広いんだけどね」
「それにこのまわり……」ノブはバックの宇宙空間へ目をやった。「……本当に、がらんとして

何もない」
「どうしたの？」
榊は心配そうにノブの横に腰をおろした。様子がいつもと違う。
「地球へ戻れる？」
榊は肩をすくめた。
「何とかなるよ」
「戻って、それから？　また逃げまわるの？」
ノブはがっくりと首を折った。
「もう、やだ、そんなの。……いくら逃げても、また追っかけてくる。きっとまた捕まる」
「先の心配してもしょーがないよ。大丈夫、また逃げてやろーぜ」
「どこへ？　どこ行ったって、もう逃げる場所なんか――」
「いくらだってあるよ！」
榊はノブの肩をつかんで自分に向かせた。
「シルクロードだって、ヨーロッパだって地中海だって。地球(あそこ)って結構広いんだぜ、二人だけなら充分逃げ回れる」
「無理よ……」
口の中だけでつぶやいてから、ノブは顔を上げた。
「いいわね。そう出来たら……素敵ね」

「だから、そんなこと考えないで――ん？」
話し声が聞こえたような気がして、榊はがらんとした空間を見回した。
「――なんだ？」
「上から」
ノブは骨組みのままの照明のない天井を見上げていた。
「やっぱー……もう警備兵か何か来ちゃったのか」
「ほんとにここ降りちゃっていいのかよ」「ここだっちゅーんだからここだろ」「大丈夫なの？開けたら外出ちゃうなんてことないでしょーね」「ぐだぐだとうるさい奴ちゃな、いーから開けろ」「知らんぞお」
天井のハッチが開いた。
「うわっ底がない！」「な、そんなバカな」
「やだ、死ぬうー」
ガラス張りの床の上に、立て続けに三つ分の人影が落ちてきた。身構えていた榊が目を丸くする。
「お前ら……どーしてここに」
「おー榊、生きとったか」「早くどけー！」
沖田が、クッションになった真田から立ち上がった。後ろの人影を見て指を鳴らす。
「やった、小牧ちゃんも一緒……まさかあいつこれ知ってて……」

「どうしたの？」
「いや――それより喜べ、脱出手段が手に入ったぞ」
「ミサイル母艦の配置はあとどれくらいかかる？」
ディスプレイ上の艦隊配置図を見ながら、キーラーはオペレーターに訊いた。
「今、ジャンク・ヤードからイセリナとゴルダの二艦が出港します」
「配置が遅れている。急がせろ。――ジャンク・ヤードに逃げ込んだ学生たちはどうなった？」
「それが……」
学生たちがもぐり込んだジャンク・ヤード内を管制しているはずのコントロールからは連絡がない。キーラーは直接ジャンク・ヤードのコントロールに回線をつないだ。
「こちら司令室だ。現況はどうなっておる？」
『はやくサーキュレーターを全開にして……あ、いやこちらの話です。こちらジャンク・ヤード・コントロール――やめろってのに戦闘機を中で飛ばした奴が多くて、細かい人間一人ひとりまで追いかけられるような状態じゃありません』
「何をしておるのだ！」
『あ、今情報が入りました。どうやらエレベーター使って、リングの方に脱出したようですが――』
「確かな情報なのか？」

『だと思います。今んところ識別信号出さずにうろついている奴あ――それらしいのはこの中から消えてます』

「司令！」

オペレーターが悲鳴を上げた。

「アルファ・ケンタウリ方向一万キロに重力偏移出現しました！」

「なんだと？」

モニターとメーター類のライトしかない司令部内に、緊急警報の耳障りな電子音が流れはじめる。戦闘情報センターからの情報が大量に転送されて、司令官席のサブモニターの一つにも概略が表示された。

「UFO、エネルギー反応から見て小型の攻撃機（アタッカー）三編隊十五機、一万キロ地点に出現しました」

「至急、待機中の迎撃部隊に緊急発進（スクランブル）をかけろ！」

結希がジャンク・ヤードに戻ってきて、発進台上の自分のCI-40エリアルに戻ると同時にスクランブルがかけられた。コントロールと司令部に発進準備完了を告げると、エリアルは発進台ごとジャンク・ヤードの壁面へ沈み出した。

『こちらエリアル02、スターボウ・リーダーのマイクだ』

戦闘機間専用周波数で、チームリーダーのマイク・ウォーレンの声がヘッドホンに入ってきた。エリアルは小型船用のエアロック内にひきこまれて、ハッチが閉じられていく。エアロック

内が闇に閉ざされる。
『ターゲットはアルファ・ケンタウリ方向の小型機だ。できるだけ基地から離して迎撃しろ。それとカズサ少尉！』
「はい？」
『格闘戦ははじめてだろ、無理するんじゃないぜ。では、外に出た奴から勝手に出撃していけ！』
下面の装甲シャッターが開いた。エリアルを載せた短い発射台が、尾部を起点にジャンク・ヤードの外壁から起き上がる。垂直まで発射台が立ったところで、パネル正面のHUD（ヘッドアップディスプレイ）に発進OKのサインが出る。
「エリアル11、出ます」
指揮所に言って、結希はエリアルの離脱レバーをひいた。電磁石で発進台にエリアルを固定していたストッパーがはずれて、そのショックでエリアルがほうり出される。
ブースターをふかしてブルーサーチ周辺空域からの離脱軌道にエリアルを乗せて、結希は視界のいいバブルキャノピーに首を巡らせた。
ブルーサーチを中心とした大艦隊が形成されつつあった。地球側にはワルキューレ型からラーナまで大小とりまぜたシャトル群、リングの外側や周辺空域には戦闘仕様に換装されたルナトランスポーターや〝ヴァリアント〟型のミサイル母艦、外惑星周回用の巨大な補給船などが浮いている。

受信機の周波数（バンド）を艦船用に切り替えてみる。周辺空域に集中した艦船のコントロールに大わらわになっている管制局の怒鳴り声が入ってきた。出港したミサイル母艦が、ルナトランスポーターと接触事故を起こしたらしい。

「これが脱出カプセルか？」

「――の、入り口だ」

五人は、居住リングの最外縁部のエアロックにいた。宇宙服用のロッカーや非常用の工具などがあるごちゃついた小部屋にいた。足元に外へ出るための二重ハッチがあり、その横にかすれた赤いラインで囲まれたハッチがある。

「えーと……エマージェンシー・ポッドと……これか」

沖田はインカムのパネルとメカニックで埋められた壁にセットされていた、ガラスカバーのボタンを押し破った。圧縮空気の音とともにポッドのハッチがはね上がった。

「学生たち、発見しました！」

オペレーターの一人がキーラーに振り向いた。

「十時S－5ブロック――緊急脱出カプセルを発射させようとしています！」

「止めろ！」

キーラーはリングのコントロール・センターへの直接回路をオンにした。

「脱出カプセルを止めろ！　どんな手を使ってもいい！」
戦闘開始を告げてモニターの一つがフラッシュしたのはその時だった。
キーラーはモニターに目を落とした。迎撃のために出撃した宇宙戦闘機二小隊がＵＦＯと接触、戦端を開いたらしい。

「せっ、せまいー」
「ぜーたくぬかすな、地球までのしんぼーだ」
五人はポッドの中にもぐりこんでいた。リングの回転方向に向いているらしい耐Ｇシートが四つ、小型乗用車ほどのスペースに設置されている。
「さすが非常用、操縦しなくて済むように出来てるわ」
沖田は、唯一操作パネルらしいものの前にセットされた前列左のシートから顔を上げた。前方に大きく傾斜したフロントグラスがあるので視界は良いが、カプセル全体がリングの外壁にはめこまれているためか、ばかでかい骨格部分しか見えない。
「動きそうか？」
前列のシートの頭から顔を出した榊が言った。シートは四つあるものの、中のスペースは来る時に乗っていたラーナⅢよりもせまい。
「これなら、目ェ閉じても大丈夫だ」
「おー、大きく出たな」

「完全自動操縦なんだよ。重傷で意識もーろーで飛び込んできても、このハンドルさえ引ければあとは全部メカが勝手にやってくれる」
沖田はシートの間にあるハンドルに手をかけた。
「行くぞ！」
ハンドルを引く。ギアが入ったような音がすると、上部のハッチが自動的に閉じて一面だけあるディスプレイが生き返った。
「……動かんぞ」
真田はクッションが張られた天井を見上げた。
「故障か？」
「あわてるなって」
沖田はディスプレイでカウントをはじめた秒数を指した。
「外周リングの遠心力が結構強いんだ。この場所が地球に対して最適位置になったら遠心力で射ち出される。あと三〇秒」
「脱出ポッドが秒読み（カウントダウン）をはじめました！」
リングのコントロール・センターのオペレーターが悲鳴に近い声を上げた。
「保安要員は間に合いません」
脱出ポッドはその性格上、カウントダウン開始後に外部から発射を中止させることはできな

い。
「アレスティング・ランチャーを使え！」
チーフが命じた。
「非常用のアレスティング・フックが外壁の脱出ポッドと同じユニットにあるはずだ！」
「――ありますが」
オペレーターはアレスティング・ランチャーのコントロール回路を呼び出した。暴走したりコントロール不能に陥った小型船を、投網よろしくワイヤーロープを発射してからめとる装置である。
「S－5ブロックにセットされて以来、一度も使われていません。作動するかどうか――」
「いいからデータを送りこめ！　もうすぐ脱出ポッドが射出されてしまう！」
「了解しました」
オペレーターは、ランチャーの照準と発射に必要なデータをコントロール回路に送り込んだ。
作動準備完了のサインが戻るが、巻き戻し用のウインチに稼働サインが出ない。
「ワイヤー巻き戻し用のウインチが動きませんが――」
「かまわん、止められればそれでいい」
「準備いいな、ほうり出されるぞ！」
沖田がシートの背につかまった榊と、後席についたつばさとノブにちらっと振り向いた。

「三、二、一、ゼロ！」
軽いショックとともに、脱出ポッドは回転する外壁からその遠心力で放たれた。と同時に外壁に設置された迫撃砲のような外観のアレスティング・ランチャーが鎌首をもたげる。
「やった！」
ポッド内に無重力が戻ってくる。
「あとは地球へ一直線っと――」
レーザースキャナーターゲットを捉えたランチャーは、火薬煙とともにワイヤーを発射した。
「なんだ！」「うわ！」
四本に分離してのびた先端部のワイヤーが、まるで蛇のような動きで脱出ポッドを捕まえた。回転する外周リングにひかれたポッドから束の間の無重力が消え、ぴんと伸びたワイヤーから伝わる遠心力によって一Gの擬似重力が戻ってくる。
榊はつばさとノブの間にしりもちをついた。思わずフロントグラスから上を見上げた沖田の目に、外壁から伸びたワイヤーががっちりとカプセルを捕らえているのが映った。
「何てしつこい奴らだ！」
ディスプレイが、外部から通信が入っていることを伝えた。パネルにセットされたスピーカーに呼び出し音が入った。
『こちらセントラル・コア、キーラーだ。学生諸君、聞こえるかね？』

沖田は、思わずアームレストからヘッドホンマイクをもぎとった。
「てめェ！　よくも……」
『今、君たちをこの基地から出すわけにはいかん』
「このやろお！」
リヤシートから立った榊が、沖田の手首をつかんでマイクに叫んだ。
「どーして放っといてくれねェんだよ！　やっと帰れると思ったのに！」
いささか絶望的な気分を味わいながら、つばさは左側に座っているノブを見た。ノブはくちびるをかみしめてうつむいている。
『今は非常事態だ。君たちに勝手に動きまわってもらっては困る』
「そっちの事情なんか知るか！　そんなに戦争やりたけりゃ、自分たちで勝手にやってろ！」
「やい司令官！　どうあってもてめェにだけは降伏してやらんから、覚えてろ」
返事はなかった。沖田はさらに喚きながらヘッドホンを耳につけた。戦闘中らしい会話が飛び交っている。
「おい――」
フロントグラスから外を見ていた真田が二人をこづいた。
「あれ、空中戦やってるんと違うか？」
マイクに喚き散らしていた二人は顔を上げた。ぎらつく太陽と星の間、ゆっくり動いている宇宙船の間をぬうように、いくつかの流れ星が輝いたかと思うと花火のよ

うに広がる。爆発したらしい。

結希はエリアルを急反転させた。第四波のミサイル攻撃をうけたはずの小さな光のかたまり――ＵＦＯは、傷をうけたように光の粉を撒き散らしながらブルーサーチへ一直線に飛んでいる。

結希は両翼の過熱気味の荷電粒子（ビーム）を発射しながら、ブーストを全開にした。眼球がめりこむような加速Ｇが結希の体を押さえつける。照準の円形内（レティクル）にブルーサーチの外周リングが入ってきた。これ以上ビームを射つと基地にまで損害を与えてしまう。加速度はほぼ同等、わずかに自機が速いが、ＨＵＤに映ったコンピューターの計算では追いつくのはブルーサーチを過ぎてからになってしまう。となれば――

結希はコンソール・パネルに指を走らせた。機体にいくつも装着された高機動用の推進剤タンクを切り離していく。自重の半分を占めるタンクをほうり出しながら、軽くなったエリアルの加速度がはね上がる。その分行動時間はなくなるが、周辺空域なら補給艦もいるのですぐ回収してもらえる。

ＵＦＯは、ワルキューレ型のミサイル母機をかすめてどんどんブルーサーチに近づいていく。斜め方向からの対空砲火がＵＦＯへと走りはじめた。戦術司令部が結希に戻れと言っているらしいがよく聞こえない。

激しいＧに耐えて、エリアルはＵＦＯとの距離を詰めていった。あざやかなビームやレーザー

の対空砲火が多くなってくるが、すぐ後方に友軍機がいるためかあまり効果を上げていない。

――近づき過ぎる！

結希はコンピューターの計算結果を見て、接触地点が基地外周部に近すぎることに気づいた。UFOのコースを変えるか、止めるかしなければならない。

結希は、すぐ目の前に迫ってきたUFOを見た。上に重なり、おおいかぶさるようにエリアルを操作する。UFOの表面の遊動エネルギーに触れた機体下部に火花が散った。UFOはコースを変えない。

結希はシートの射出（エジェクション）レバーに手をかけた。UFOの前にまわりこみ、ブースト全開のまま急ターンしてUFOと正対する。レバーをひく。

UFOはエリアルに衝突した。間一髪のタイミングで射出座席（エジェクション・シート）で脱出した結希は、宇宙服に爆圧を感じながらUFOの行方を見た。身一つで遊泳しながら急減速されたUFOを目で追う。

エリアルの残骸を撒き散らしながら、突入速度を殺されたUFOは、それでもふらふらと進んでいる。光も大分色褪せてコントロール不能の状態になっているらしい。その進路上へ目を走らせた結希は慄然（りっぜん）とした。ジャンク・ヤードにまっすぐ突っ込むコースからそらされたUFOの進路上に、ちっぽけな脱出カプセルが浮かんでいた。外壁からのびたワイヤーにつながれて動けないらしい。

それまでの勢いでブルーサーチに流されながら、結希は目を閉じた。このままでは救命ポッドはUFOに呑みこまれてしまう。UFOをはじいてコースをそらすしかない。

それがどんな結果を招くのか考えずに、結希は自分の体の前面からUFOめがけて、ありったけの力を放射した。

「カズサ少尉がはじけました！」

司令センターの一角に増設されたスターボウ部隊専門のセクションで、オペレーターの一人が悲鳴を上げた。戦闘情報室からエリアル11の消滅を告げる信号がディスプレイ上で点滅するのと同時に、一瞬だけ計測限界レベルを記録したS－5ブロックのESPセンサーが、それきり沈黙する。ジルベスターの前の、和紗結希に同調された脳波計や心拍数などのディスプレイが、データ入力を断たれて何も表示しなくなった。

「自爆したのか……？」

視界の中に浮いていた、ちっぽけなピンク色の宇宙服が、内側からはじけるように爆発した。一瞬後、救命ポッドにまっすぐ突っ込んできた光のかたまりが四散したが、沖田はそれを見ていなかった。

衝撃の余波が、かすかに救命ポッドを震動させた。砕け散った宇宙服が、闇に呑まれるように散っていく。沖田はヘッドホンのマイクを握りしめた。

「やい司令官！　聞こえてるだろう！　てめえらのやってる宇宙開発とか進化ってのは、こんなことしてまでもやる価値があることなのか！」

口もきけずに外を見つめている榊の肩に、誰かが手をおいた。榊は振り向いた。ノブはうつむき加減の視線で榊を見つめた。

「あたし、わかったような気がする……」

「えっ」

まるきり感情のないノブの声に、榊は体ごと振り向いた。ノブは首を振った。

「……あたし、もう、こんなのいやだ……ごめん、榊くん」

「ちょっと待て、何言ってんだよ！」

ノブの瞳が、不思議な色の光を宿した。榊の胸の中に飛びこんでくる。

「ごめん——あたし、もうやめる」

「やめるって何を！」

自分の腕の中から消えてしまいそうな気がして、榊はノブをがっちり抱いた。

「ごめんなさい榊くん……もういいの」

「何が！」

「何だって、もういいのよ……」

ノブはきつく目を閉じた。次の瞬間、榊は目を見開いた。不思議な浮遊感覚——まわりのものがすべて溶けて形をうしない、あやふやになる感覚——

「やめろお——！」

ノブが何をやろうとしたのか気づいて、榊は声を上げた。腕の中にいるはずのノブを抱き締め

ようとする。
頭の中に、甘酸っぱい感情が流れ込んできた。涙声のようなか細いメッセージ。
――わたし、あなたと会えたから……きっと、この先も生きていける。……さよなら
ノブは目を閉じてシートに倒れこんだ。カプセルの中から、他の四人の姿が消えていた。
ノブは、自分の力を無制限に解放した。彼方へ――遠くへ。

結希の最期を探知して以来沈黙していたS－5ブロックのESPセンサーの数値が、いきなりゼロから急上昇した。あっという間にレベルをオーバーしてセンサーの回路が破壊される。ジルベスターは、はっとして脱出ポッドのデータディスプレイに目を落とした。
カプセルをからめとっていたワイヤーが、張りすぎたようにちぎれ飛んだ。カプセルが弾丸のような勢いで飛び出す。
「脱出ポッドが動き出しました！」オペレーターが叫んだ。「加速率百……二百、だめです。計測しきれません！」
「行ってしまった……」
斜め後ろから聞こえたうつろな声に、キーラーは振り向いた。スターボウ部隊のセクションからジルベスター博士が立ち上がっていた。まるで光の矢のように加速していくポッドを映し出したメインスクリーンをぼんやり見上げている。
「方向は！」

キーラーはオペレーターに質問をとばした。
「太陽平面より垂直方向——北斗七星γ星の方向です！」
「なぜだ！」
キーラーの問いに答えるものは誰もいなかった。
コンピューターのターミナルを操作していた若い男のオペレーターが、椅子ごとジルベスターに振り向いて、立ち上がった。コンピューターのプリントアウトを切り取って、持って来る。
「とんでもない加速率です。これじゃシルヴィア衛星でも追いきれません」
男は、データの計算式がぎっしりならんだプリントアウトの紙を博士に見せた。
「これは……」
博士は顔色を失った。男はうなずいた。
「すさまじいエネルギー量です。最終速度は秒速三〇万キロ——光速に達します」
太陽系の諸惑星——最も内側を回る水星、金星から地球、火星などが公転している軌道平面上から垂直に、脱出ポッドは北天へ向けて無限大の加速を続けていた。
見慣れた北の空の星座——カシオペアやオリオン、そして、カペラ、アルデバランなどの星々が青白く偏光しながら収縮する。光行差のために、全天の星空が虹のようなスペクトル偏向を起こしながらポッドの前面へまわりこんでくる。
星の光がドップラー効果を起こすため、収縮した星の光が内側から外側へ虹の七色を放つ星(スター)

虹現象と、船体に高速で衝突する星間物質のプラズマ化した淡い炎を見つめたまま、ノブの脳裏を様々な光景がよぎっていく。生まれてから今まで、小さな青い星の上で過ごした、決して長いとは言えない年月――

前面の星虹が、青白い光に包まれるように収縮していく。光速限界に近づくにつれて白い光のかたまりになり、一点へ絞られていく。

重くたれこめた灰色の雲の下で、水を吸って黒くなった砂浜に緑色をした波が打ち寄せていた。

小雨が降る海岸に、四人はいた。誰もが呆然とした表情のまま、そこに出現した時の姿勢のままで海を見つめていた。

「……江ノ島海岸だ……」

沖田はうめいた。海岸から橋でつながった小さな島が見える。

「……何でこんな所に……」

「あのやろおー！」

がっくりとひざをついた榊は、雨雲を見上げた。煙るような細い雨が顔を濡らす。

「――一人で行っちまいやがった……オレたちだけ地球に戻して、一人で行っちまいやがった……」

「テレポーテーションか……」

沖田は暗い水平線を見つめた。榊はうなずくように頭をたれた。
「どうして……」
閉じた瞳からあふれた涙が、急にゆっくりになってそのまま凍りついた。
――さよなら
ノブを乗せた小さなカプセルは、光速に達して時間を凍りつかせたままなおも直進を続けた。
遠くへ――太陽系の外へ。

エンディング

エンドマークが出た。オールナイトの最終プログラムのストップモーションに重なって流れ出すクレジットも見ずに、榊は閑散とした客席から立ち上がった。映画館の外に出る。

冬の終わりの空は、まだ暗かった。かすかに東の空が白みはじめている。

歌舞伎町映画館街から、早朝で交通量の少ない靖国通りの広い横断歩道を渡って新宿駅東口に出る。冷たい風が吹き抜ける、暗い空の下の街はまだ眠っているように見える。人影も、数えるほどしか動いていない。

榊は、ＪＲ線路の向こう側に建っている大時計を見上げた。デジタルは５：３０を示している。榊は、まだいくつか星が残っている夜明けの空を見上げた。

あれから、もうずいぶん時間が過ぎたような気がする。地球の外での闘いはまだ新聞にも出てこないし、地球も、今のところはまだ無事に存在しているらしい。

早朝のためゆっくりと点滅している歩行者用の信号を見て、榊は歩道へ足を踏み出した。その瞬間、榊は彼女がいるような気がして振り向いた。――誰もいない街角を、ちぎれたポスターが

飛んでいく。

苦笑いして、榊は歩き出した。歩いているうちに、立て続けに思い出が甦ってくる。巨大原潜、ルナベース、学園祭、南洋の孤島、そして――宇宙。

陽が昇れば四月、三年生に進級する。

改札口への階段を降りる前に、榊はもう一度夜空を見上げた。ビルの間の空で、星が少しずつ消えていく。

榊は、目を戻して、新しい季節へ歩き出した。いつか彼女に追いつけるだろうかと考えながら。

『ラスト・レター』完

最後の、あとがき

むかしむかし、ある国営放送のチャンネルに、少年ドラマシリーズというものがありました。当時、黎明期から勃興期に入った国産の一流のＳＦ作家の原作を、魅力あふれる若手俳優、才気あふれるシナリオ、意欲的な演出、低予算という傑作が生まれる条件のもとにＴＶドラマ化したものです。

第一作の『タイム・トラベラー』が放映されたのは一九七二年のはじめ、この作品の原作はその後幾度となく映像化される筒井康隆の『時をかける少女』。そして、おそらくこの時から学園ＳＦをはじめとする日本のジュブナイルのジャンルが始まったのです。

少年ドラマシリーズはその後、『なぞの転校生』、『夕ばえ作戦』などの傑作を放映し、ウルトラシリーズをはじめとする当時全盛だった特撮怪獣物、『サンダーバード』『宇宙大作戦』（スター・トレック）などの海外ＳＦドラマなどと共に当時の日本の若者に多大な影響を与えました。考えてみると、一九七四年の『宇宙戦艦ヤマト』までのほんの数年の間に『ウルトラマン』、『ウルトラセブン』から『仮面ライダー』、『日本沈没』までが集中してるんだもの、いったいなにがあったのだろう。

物心ついてから思春期までのあいだにこういう作品に接していれば、その子の将来にある程度

の指針が与えられることは間違いないでしょう。どういう指針だ。

ついでの事に、小学校の終わりに『宇宙戦艦ヤマト』に出会った少年は、反抗期を迎える頃の高校生になって『未来少年コナン』、『機動戦士ガンダム』などの作品に出会い、卒業する年には『銀河鉄道999』、『ルパン三世カリオストロの城』あたりでほぼ止めを刺されます。逃げるんじゃない、書いてる方だって恥ずかしいんだから。

失われた作品の素晴らしさを語るのは、二度とあえない恋人とのあり得ない未来を考えるくらい虚しいことです。『タイム・トラベラー』は同じ年の夏に、一回だけの再放送の後、マスターテープが消去されてしまい、放映当時の姿は永遠に失われています。『タイム・トラベラー』をはじめとする少年ドラマシリーズはその作品のほとんどがビデオテープで撮影されていたため、そして当時の放送用ビデオテープが高価だったために、他へ使い回されてしまったらしいのです。年寄りの昔話よ、気にしないでね。

笹本にとって、SFはここから始まりました。もっと正確に言うと、『タイム・トラベラー』のラストシーンから。

だから、主人公芳山和子はロングヘアーでセーラー服でなければいけないし（その後、原作はTVで二度、映画化もされるが、正しかったのはデビュー当時の南野陽子が演じた月曜ドラマランド版のみ。原田知世版、内田有紀版よりもはるかに出来がいいと思うのだが）、未来から来た

深町君は眉毛のないケン・ソゴルでなければならない（これが未来での深町君の本名。未来人は眉毛が退化しているらしい。しかし、その後、ケン・ソゴルが出て来る作品はない）。それより何より、平凡なはずの学園がちょっとした事件の積み重ねからとてつもないSF的状況に放りこまれてしまうというわくわくするような感覚が、ほとんどない。（少年ドラマシリーズとはなんの関係もないところで製作されたはずの『狙われた学園』フジテレビ版、主演原田知世が、ほとんど唯一の突然変異的後継番組だった。『幕末高校生』同じくフジテレビ、主演細川ふみえも、近いといえば近いのだが）

それが全てだなんていう気はないけど、SFの楽しさは、ありふれた退屈な日常がある一瞬から姿も何も変わっていないのに体力と知力の限りを尽くさなくてはならないワンダーランドになってしまうところにあると思います。どこも変わっていないはずの現実の中で、誰にも知られない冒険から生還してくれれば、そこが見慣れた日常でもいつもより魅力的に見えるはずです。

しかしながら、ガキが大人化したためか大人が子供化したためか、中高生をターゲットにした実写作品が最近ほとんど絶滅状態です。もともと日本では、思い出したように過酷な企画会議を潜り抜けたそれっぽい作品が時たま放映されるだけで、結局大人向けの実写SF作品は根付いていません。数少ない例外にマリアン演じる未来の女子大生が大学の卒業レポートの製作のために現代の曾お祖父さんのところにタイムスリップして来る『オレは御先祖様』日本テレビ、主演石坂浩二、あるいは谷啓演じる二級天使の手違いで恋人の身代わりに死んでしまったOLが運命を変えるために子供時代から過去を改変しようとし、挙げ句の果てに現代にまで齟齬（そご）を来（きた）してパラ

レルワールドで違う自分を体験しながら恋人を死から救おうとする『あなたに会いたくて』主演佐野量子（なんと、午前中の奥様向け三十分帯ドラマだった）など、見るべき作品があることはあるのに。

予算、その他の都合で現代を舞台にした作品以外は時代劇しか、日本では作れません。（何事にも例外はある。未来の宇宙を舞台にした『オアシスを求めて』『十一人いる』最近では……お、思いつかん）

だけど、現代ものだって、いっさい特撮を使わなくたって、アイディアと展開次第でいくらでも面白い話は出来ると思うのだがなあ。『ナイト・ヘッド』って、そのコンセプトだと思うんだけどなあ。

てなわけで、小説家やってます。

小説には、予算の制約もうるさいスポンサーもありません。巨大ロボットを新宿の高層ビル街で暴れ回らせようが、衛星軌道までロケーションに行こうが、自由自在です。

そのかわり、天下の美少女も凝（こ）りまくりのコンピュ（C）ーター・グラフィ（G）ックも使えません。画面も音もありません。使えるのは、言葉だけ。

言葉だけで作り上げたドラマは、どこまで楽しんでもらえたでしょうか。

では、また、次の作品でお会いしましょう。

OCT・17、1994

笹本祐一

PS　それでも、いつかは映像作品を作りたいと思っている。

ISBN4-257-76703-0

C0193 P520E

9784257767039

19101930052 03

定価520円
(本体505円)

《厚木基地からイエローサーチを経て高度衛星軌道上のSCFの機動要塞ブルーサーチへ》——誘拐されたノブがシャトルで宇宙へ飛ばされるとの情報を得た沖田や榊らは、厚木へと向かった。しかし、基地内へ侵入する手立てはない。想いを伝えて超能力を覚醒させようと、榊は遥かなノブに向けて懸命に念を込めた。

高校生四人組は同級生の少女を救えたか。シリーズ、感動の完結。